

炎導に惹かれて

ねをんゆう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ディアンケヒト・ファミリアで治療師（ヒーラー）として働くアミツド・テアサナールには、2つ年上の同僚が居る。自分より治療師（ヒーラー）としての格は落ちるものの、幼い頃から長く側に居て、多くの困難を共に乗り越えて来た。

笑顔が下手で、能力はあるのに、評判が悪い。

冒険者だけでなく神々からも嫌われて、殺さなければならぬとすら言われている始末。何も悪いことなどしていないのに、彼女の死は確定している。この世界そのものから、拒まれている。

……そんな文字通りの”嫌われ者”の話。

- ・ 前回は全身地雷原の話でしたが、今回は全身爆弾女の話です。
- ・ 主人公ちゃんの戦力は平均的です。
- ・ 衝動で書いているので頭空っぽでお願いします。
- ・ なんとなく書いていたものを勿体無いので吐き出してみました。
- ・ 永久に陰鬱としているのでお気をつけ下さい。

目次

01.	ノルア	1
02.	男神の苦悩	7
03.	彼女の評判	14
04.	彼女の実情	20
05.	神々に見えるモノ	31
06.	女神の眷属達	37
07.	彼女の嘘と、彼女の本音	44
08.	生き残りの女と、死に行く女	51
09.	白炎の根源	58
10.	根源の地雷	70
11.	騒動の巻き添え	76
12.	大和の申し子	86
13.	劍姫と劍技	92
14.	眷属達の苦痛	100
14.	5 勇者の記憶	112
15.	聖女の無力	117
16.	告白	122
17.	先送る	132
18.	青い	140
19.	希望の消失	149
20.	未来の後悔	159
21.	信用	171
22.	乳繰り合う	181

01. ノルア

紅。

紅い炎が灯る。

一寸先も見えない闇の中でも、果てしなく底の見えない水底に沈んでいても、私の前にはいつも眩い程に輝く一筋の炎が道を照らしていた。ダンジョンで危機に陥った時、治療中に手順に困った時、その炎は変わらず私の行くべき先を導き示す。

他の者達には……それこそディアンケヒト様やミアハ様を含めた神々ですら、その炎を見ることは出来ず、感じることも出来ていない。幻想、錯覚、そう断じるにはあまりに正確なその導きを、果たしてどう扱えばいいのか。私は自分自身で何度も何度も思索し、その度にその暖かさに身を浸し、深い眠りの中へと誘われる。

もしその炎が私にとって不利益に働いていると言えることがあるとするなら、それは……

「……はい、これで治療は終わりです。10日もすればまた自分の足で歩けるようになります」

「そ、それは本当か」白焰（レフ・フローガ）!?助かった!今回ばかりは流石に駄目かと思っただんだ!」

「いえ、今は治療の設備や道具も整っていますから。生きてさえいれば、大抵の怪我は治せます」

「そ、それなら俺の連れの方は……!」

「アミッドが担当しています、そちらも問題はありません」

「……ああ!良かった、良かった!!」

まだまだ歳の若い冒険者。

経験もない、知識もない、実力もない、あるのは勇気と無謀だけ。その末に危機を乗り越え生きて帰ってくる事が出来た、そして怪我也治ると保証される。

……運が良かった、恵まれている。同じような状況に陥り、助かることのなかった者達は大勢居る。それを考えれば彼の喜びよりは、些

か足りていないと言わざるを得ない。

今の命を、今日の命を、感謝し、喜び、より一層の愛を持って接しない限り、接するための意識を作らない限り、彼はまた同じことを繰り返すだろう。こうして助かった結果、それでも反省せずに、無駄に命を散らす。正に目の前の男の様な者達も過去には大勢居た。彼は決して1人目ではない。

「貴方は、冒険者として生きるには甘いですね」

「っ……あ、甘い？」

「考えが甘いです」

「い、いきなり何なんだ……!」

「自分より賢い人間を引き入れる事をお勧めします。サポーターでも構いません。貴方に指揮を取る素質はありません」

「っ、偉そうに言いやがって……あんたに何がわかるんだ!!」

「今日までに命を落とした多くの冒険者達の顔を知っています」
「っ」

「一度命を落としかけたんです、今日を境に生まれ変わっては如何でしょう。手始めに、ご自身の不足と無知を受け入れることから」

「おッ前……!」

「それでは、失礼します」

病室のカーテンを閉めて、背中を向ける。直後に背後から聞こえて来るベッドを叩く音、それに少しの興味も示す事なく部屋を出た。

「……言い過ぎではないですか、ノルア」

「早かったですね、アミッド。流石です」

「そんな話はしていません。先程の貴女の態度は、患者に対してあまりに失礼な……」

「あのままでは彼、次の冒険で死んでいたので」

「っ……それも、いつもの勘ですか？」

「ええ。……ああ、そうでしたアミッド。そろそろロキ・ファミリアが戻りますから、準備をした方がいいですよ」

「……準備とは、何の？冒険者依頼の報酬の用意なら既に」

「今回の遠征、多分上手くいかなかったと思います。吹っかけられま

すよ、それもかなり」

「貴女が、同行しなかったから……？」

「いえ、まさか。適当に私の名前を出して遇らうことをお勧めします。

……それでは、私はこれからギルドに用事がありますから、また後で」
去っていくその後ろ姿。

白銀の髪に薄つすらと赤色を混ぜた様な彼女。

(……っ、また)

炎が見える。

彼女と自分を繋ぐ紅の炎の線が。

(……眩しい)

いつからだろう、こんな物が見える様になったのは。

いつからだろう、こんな風に炎が自分と彼女を繋ぎ始めたのは。

(なんでも、知ってるみたいに……)

そんなことばかり言っつて。

そんな風に、自分にばかり導きを与えて。

(気に食わない……)

いつか絶対に見返してやるのだと。

そう考えてもう、何年が経っただろう。

(救われるべきは……)

癒されるべきは。

……貴女なのに。

ノルア・コルヴァスはディアンケヒト・ファミリアに所属している
Lv. 4の眷属である。

治療系ファミリアに所属する眷属達の中では言うまでもなく屈指
の実力者。鍛治系ファミリアのヘファイストス・ファミリアにおい
て、最上級鍛冶師の称号を冠する椿・コルブランドがLv. 5である
ことと、よく並べて称される様な人物だった。

……しかし決して冒険者ではない。
彼女は治療師だ。

それなのに妙にレベルが高い。
それでも治療師としての腕前は、戦場の聖女”アミッド・テアサ
ナーレには及ばない。椿の様に”最上級治療師”とは呼ばれない。
オラリオ最高の医療者は間違いようもなくアミッドであるからだ。
そんな中途半端な人物が彼女だった。
だから彼女を軽んじる声もある。

アミッドではなく彼女に治療される事を、ハズレと称されるのも良
くあることだ。

そして何より彼女がアミッドと比較されるのは……

『あの女には感情がない』

そう言われること。

『目だけが笑っていない』

誰もが口々にそう言う。

『白々しい、人を人と思っていない』

『気持ちが悪い、関わりたくない』

『モンスターの方がまだ可愛げがある』

そんな言葉を咎めることはあれど、否定されることは殆ど無い。そ
れがノルア・コルヴァスという人間であり、極力関わりを拒む者が多
く居た。本人はそれを聞いても”白々しく”笑うばかり。

興味がないのか。

実は心の底では怒っているのか。

それすら誰にも分からない。

……そう、誰にも。

神にも、同僚にも、誰にも。

「こんにちは、エイナさん」

「っ!?コ、コルヴァス氏……!?きよ、今日はどうされたんですか!？」

「次の怪物祭に向けて、当日の治療師達の動員体制表を持って来ました。万が一の場合に備えてギルドでも周知をお願いします」

「な、なな、なるほど……そ、そういうことでしたか!」

エイナ・チュールもまたその女が苦手だった。

行動の全てが模範的、協力的。

言葉遣いも丁寧で、常識がある。

こうして仕事は早い段階で終わらせてくれるし、気も効く。

それなのに、苦手だった。

「複数枚刷って来たので、良ければ街中に貼り紙としてお願いしたいです。一応当日は私も陰ながら巡回していますが、何か起きないとも限りませんし、念のために」

「え、ええ、そうですね。ね、念のため……念のために……」

白々しいから。

彼女がそう言うということは、恐らく何か起きるのだろうに。ギルド長のロイマンもその会話を盗み聞き、隠す事なく顔を顰めて、睨み付ける。

見た目で人を判断するつもりはない。

確かに見た目は大事だ。

見た目で人の印象は大きく変わる。

けれど内面が優れていれば見方は変えるべきだ。

エイナは常々この職業をしているとそう思う。

……そう思うのに、彼女だけは別だった。

「あ、あの……わ、わざわざこれだけのためにご足労いただき、ありがとうございます。こ、コルヴァス氏」

「いえ、ギルドの皆さんにはいつもお世話になっていますから。これ

「くらはいは足を動かしますよ。……それでは」

「そう言つて振り返り、出口の方へと足を進める彼女。職員達はその様子を見てホツと胸を撫で下ろす。決して何かをされる訳でも、されたことがある訳でもないにも関わらず。」

「……ああ、そうでした」

「「!」」

「そんな彼等の様子に気付いたのかそうでないのか、しかし彼女はやはりいつもの様に目だけが笑っていない白々しい笑みを浮かべてエイナの元に戻つて来る。」

「そして冷汗を垂らしながら困惑するエイナの耳元に顔を近付けて、小さく囁いた。」

「彼は無事ですすよ」

「え……?」

「それでは、また」

「え、あ、ええ……!?!」

「そんな不穏な言葉を残して、ノルア・コルヴァスは今度こそギルドを去つていった。そしてその直後、エイナ・チュールの担当であるベル・クラネルが振り返り血で真っ赤に染まったままダンジョンから戻つて来る様なことがあったが……そこに関連性を見出せるかどうかは職員内でも意見が分かれる……などと言うこともなく。見事に彼のことを示していたのだと一致した。そしてまた気持ち悪がられた。」

02. 男神の苦悩

ディアンケヒト・ファミリアには一際趣味の悪い部屋がある。それは当然、主神であるディアンケヒトの自室だ。

彼は金に目がなく、治療系ファミリアではあるが儲けを出すために日々様々な施策を練っているような神だ。その中には卑劣とも取れるような内容も含まれているが、それでもまだ善神と言える部類には入るだろう。

そんな彼の自室は当然ながらその金代わりに手に入れた高価な調度品等が多く詰め込まれており、清貧という言葉とは真逆の方向に突っ走った正に下品な有様になっていた。

基本的には治療を中心に動いている眷属達、他のファミリアの様に滅多にステータスの更新が行われることはない。故にそれほど団員達の出入りの多くない部屋ではあったが、何事にも例外は存在する。

「……というのが怪物祭当日の動きになります」

「むう……」

目の前の女の言葉に何処か不満げな顔をしながら顎髭を撫でるディアンケヒト。しかし、かと言ってそれを非難する様な態度でもない。いつもの様にただ溜息を吐いて、少しの嫌味を言うくらい。

「お前は本当に金にならんことばかりをするな」

「申し訳ありません」

そう言うのであれば、少しくらい申し訳なさそうな顔をしろとディアンケヒトは心の中で呟く。

正直に言えば、彼女は困った眷属だった。

冒険者になりたいのならばここに居る必要はないし、治療師で居たいのならダンジョンで危険を冒す必要もない。しかしその二足の草鞋を十分に履きこなせているのが彼女でもあり、かと言ってそれが周囲に良い影響を齎しているのかと問われれば、そうでもない。

付き合いはもう10年近くになる。

それでも未だその本心や底が見えて来ない。

アミッドもまた優秀であったが、多少なりとも可愛げはあった。し

かしこの女にはそれが全くと言っていいほどにない。それこそ幼い頃からずっとだ。

「しかし金銭が必要だったのですしたら、やはりロキ・ファミリアの遠征に同行すべきだったのではないでしょうか」

「……その数日前まで別のファミリアの遠征に付き合っていた眷属を再び送り出すほど、儂は亡者ではないわ」

「特に疲労等はありませんでしたが……」

「ええい、口答えせんでいい！そんなことをすれば儂が鬼の様に思われるではないか！」

「申し訳ありません」

「まったく……」

確かに遠征の同行は金になる。

かなりの大金を要求することが出来るからだ、相手が払える限りは青天井と言っていい。それがロキ・ファミリア相手となれば当然に釣り上げることも可能だろう。

……しかしディアンケヒトは知っている、その同行した先でこの女がどんな扱いを受けているのか。

そもそもが避けられているのだ。たった一人、別のファミリアの間が入って来たとして、容易く輪の中に入れるものだろうか？それもこんな愛想のない不気味な女と。

腫れ物扱いされているのは言うまでもなく、遠征中は本当に事務的な会話しかしていないらしい。結局は彼等は治療師を欲しているであつて、彼女自身を欲している訳では決してない。それは仕方ないことだとディアンケヒトは理解しつつも、不快に思うかどうかは別の話と言えるだろう。

こんなのでても大切な眷属に代わりはないのだ。そのうち簡単に捨て駒扱いされてしまいそうで、だからディアンケヒトは彼女を遠征に参加させるのに良い顔はしない。結局誰だつて身内が一番可愛いものだから。いくら口酸っぱく契約を交わしたところで、緊急時に無愛想な女一人を守るために自分達の命を投げ出す筈もない。

「まあいい、明日の休暇の予定を話せ」

「はい。明日は特に仕事の予定もありませんので、ダンジョンに潜り材料集めをして来ようかと思っっています」

「……何の材料だ」

「いくつか薬材が不足しているとアマミッドが嘆いていましたので、1日掛けて日帰りです」

「それも仕事だろう！そうでなくともダンジョンに潜らず買えばいい！」

「いえ、いくつかの材料は暫く品薄が続くと思われまます。その時になつてダンジョンに潜つたところで手遅れですから、今のうちに採取の必要があるかと」

「……また勘か？」

「いえ、市場の流れを見ての話です」

「……………とにかく、その件は明日依頼を別の者に出させる。偶には仕事から離れろ」

「ですが、そうになると私は一体何をすればいいのか」

「むう……………これは儂の責任でもあるな」

何を話すにも頭を痛くさせられる。

まあ確かにこの女、ディアンケヒト・ファミリアに拾われた時から常にファミリアの手伝いばかりをしていた。あの頃は色々オラリオも混乱に突入する頃合で、人手不足が顕著だったというのも理由の一つだ。……………とは言え、これといった趣味や目的もなく、ただ機械の様にファミリアのために尽くしているだけの眷属など、ディアンケヒトの神としての器を疑われかねない。

あのアマミッドですら”青の薬舗”に定期的に通い、借金の取立てという建前でミアハ・ファミリアと親交？を深めているのだ。正直ディアンケヒトとしては全く面白い話では無いのだが、それでこそ人間であろう。少なくとも目の前の全く健全でない子供と比べれば見逃すのは容易い。

「……………仕方あるまい。ノルア、貴様酒は飲めるな？」

「はい、人並み程度には」

「ならば明日の夜は儂に付き合え、飲みに行くぞ」

「ディアンケヒト様とですか？」

「なんだ、不満か？」

「いえ、そのようなことは」

「フンツ……昼間は適当に過ごしている、だが仕事とダンジョンに潜るのは許さん。それ以外のことを探せ、そして夜に儂に報告しろ」

「承知しました」

「以上だ、戻れ」

「はい。失礼します、おやすみなさいませ」

深々と頭を下げてから部屋を出ていくその様子、よくもまあこれほど今日まで変わらずに居られるものだとディアンケヒトは何度目か分からない溜息を吐くしかない。

利口な眷属ではあるし、貢献度も高い。

治療師がダンジョンに潜るという行為の垣根を下げてしまっており、それが原因で勘違いした眷属が何人か大怪我を負ってしまったということ以外は問題という問題も起こしていない。それ自体も決して彼女が悪い訳ではなく、愚かな子供達が悪いのではあるが……

「ああ、いかん。この思考はまたやる」

そこまで考えて全てを打ち消す様にディアンケヒトが頭を振ると、丁度背後の扉から再びのノック音がした。この部屋を頻繁に訪れるのはファミリアでは例の2人くらいだ。そしてこのノックの仕方は間違いなく、もう片方。

「構わん、入れ」

「失礼しますディアンケヒト様、本日の収支報告を……どうかなさいましたか？顔色が良くない様に見えますが」

「気にするな、収支報告を始めろ」

「はい」

アミッド・テアサナーレ。

こちらの眷属はこれ以上ないと言うほどに優秀で、気が利き、可愛げも才覚もある素晴らしい美人に育った。ディアンケヒトが何の遠慮もなく自慢することが出来る眷属であり、治療師としてだけではなく、商人としても十分な才能の持ち主である。

今日も今日とて収支報告は黒、黒、黒。

普段のディアンケヒトならここで一つ満足気に大笑いをし、アミツドを褒め称えるだろう。そして新たに思い付いた施策を話し、彼女に丸投げするまでである。

「……………良くやったアミツド。今日の午後にはロキ・ファミリアが遠征から帰って来たと聞く、明日はくれぐれも吹っ掛けられるなよ」

しかし今のディアンケヒトはとでもではないが、そんな気分では無かった。どうしてあの子と話すといつもこうなるのか。

これに関してはアミツドだつてもう見慣れたもので、部屋に入つて来た時からその全てを見通していたのだろう。収支報告も淡々としていた。そしてディアンケヒトもまた、それについてアミツドが興味を持っていることは分かっている。

「……………あの、またノルアが何かしたのですか？」

「何もしておらん、しておらんから問題だ！」

「と言いますと……………」

「口を開けば『遠征に行く』『ダンジョンに潜る』『仕事をする』こればかりだ！わざわざ休みを与えれば『何をすればいいか分からない』だど!?趣味の一つも無いのかアレには！一体何処で育て方を間違えた！」

「ディアンケヒト様、ノルアに聞こえます」

「ええい！少しは人間味というものをだな！好きな男の1人でも連れて来ればいいものを！もう21だろう！アミツド！アレに合う手頃な雄は居らんのか！」

「そういった心当たりは特に。そもそもノルアと親しい人物が殆ど居りません、近寄ろうとする人物も同様に」

「ああ、あの不気味な笑い顔だけでもどうにか出来ないものか……………！面は良い癖に勿体無い！あの顔は上手く使えば良い金になるというのに！」

荒れ狂うディアンケヒト。

色々と突っ込みたいところはあったが、彼のその気持ちもアミツドにはよく分かる。このファミリアに入った時から隣に居て、暗黒期

中でも常に共に戦い続けたのが彼女だ。アミッドからすれば同僚であり、戦友であり、恐らくノルアにとって最も近い存在。少なくともそう自覚しているくらいの関係だとは思っている。ノルアがアミッドに対して抱いている感情も、きっと他の人間に対しての物とは違うはずだ。

「……アミッド、偶にはアレを連れ出せ」

「連れ出す、ですか？」

「そうだ。……ああ、丁度“怪物祭”の話が来ていたな。良い機会だ、アレを連れて見物して来い」

「しかし当日は……」

「お前たちが居なくとも役割くらい回せるわ！最悪エリクサーを使えばいい！いいから連れて回って来い！主神命令だ！分かったな！」

「わ、分かりました……」

彼がそこまで言うのなら、拒否権などもう無かった。金にうるさいダイアンケヒトがエリクサーを使ってでも居ない穴を埋めると言っているのだから、彼の中ではこれはそれほど優先すべき事柄なのだろう。

「本当に困ったものですね、ノルアには」

部屋を出て、壁にもたれ掛かりながらアミッドはそう呟く。自分より2つ歳上で、自分よりも色々知っていて、アミッドは過去に色々なことを彼女に教わった記憶がある。

今はもうそんな彼女よりも治療師としての実力も実績もあり、彼女は実質的にアミッドの補佐の様な役割に就いているが。彼女はそれに対して少しの嫉妬も見せることもなく、むしろ積極的にアミッドを助けてくれる。

(っ、また……)

少しの眩みと共に目の前に現れた紅の炎。

それに手を伸ばし掴もうとするも、決してそれが手に触れる事は無い。そうしているうちに炎は何を訴えかけたのか消えてしまったけれど、アミッドは少しの思案の後、一先ずすべき事から片付けることにした。

「まずはノルアに伝えるのが優先ですね」

自分の隣の部屋に住んでいる彼女。

もう訪ね慣れたその部屋に向かって、アミッドはぼーっとした頭を振り払って歩き始めた。

03. 彼女の評判

次の日、アミッドは普段通り店の番をしていた。

普通ならば他の眷属がすれば良い仕事ではあるのだが、アミッドはこういった仕事も嫌いではない。特に今日はロキ・ファミリアが冒険者依頼で注文した泉水を持つてくると聞いている。……加えて、ノルアの勘が確かならば何かしら吹っ掛けられる様な収穫もあるということだ。そんな交渉を他の団員に任せることなど出来るはずもなく、今日ばかりは店番をする以外に他はなかった。

それ以上にアミッドの力を必要とする患者が居なかったというのも大きいだろうが、だとしても彼女が休みを放り出して代わりに仕事に着いてくれていたことも容易く想像出来る。

「いらっしやいませ、ロキ・ファミリアの皆様」

「アミッド久しぶりー!」

「本日のご用件は引き受けて頂いた冒険者依頼の件で間違いないでしょうか?」

「ええ、そうよ。今は大丈夫?」

「カウンターでよろしければ今直ぐにでも」

昨夜にノルアが言っていた通りの時間にやって来たのは、テイオネとテイオナのアマゾネス姉妹に、”剣姫”として有名なアイズ・ヴァレンシユタイン。そして最近名を上げ始めているエルフのレフィーヤ・ウイリデイスの4人。

今回彼等に頼んでいたのは、ダンジョンの深層でしか取ることでしかない泉水という液体であり、代わりに報酬として用意したのはいくつもの万能薬だった。それだけで巨大な豪邸を建てられるほどの代物。これでも価値は間違いなく見合っているというのだから、やはり上位の冒険者の関わる案件というのは桁が違々と改めてアミッドは思う。

「流石はディアンケヒト・ファミリア、装飾にも拘ってるわね……」

「容器一つが変わるだけでも、その商品に付けられる値段は大きく変わります。例えばその容器によって高額になったとしても、むしろ売行

きは増すそうです。不思議な話ですが」

「でも、何となくわかる気がします……欲しくなっちゃいますよね、これ。高級感があると言いますか」

ケースに入った万能薬を見て感心している彼等にアミッドが伝えたこの言葉も、全て受け売りである。アミッドに商売を教えたのも、こういった細かい理論を教えてくれたのも、彼女だ。アミッドには理解出来ないことも多いが、結果として数字に出ているだけに今も忘れずに実践している。今やポーションの容器1つにしてもこうして拘っている程だ、そして実際に売上は増えている。

「ああ、そういえばアミッド」

「はい？」

「実は深層で珍しいドロップアイテムが取れたのよ。良い値を出してくれるなら、ここで換金していくわよ？」

「……………」

「え、なによその微妙な顔」

「いえ……なんでもありません。それでアイテムというのは？」

手渡されたのは「カドモスの皮膜」と呼ばれる貴重なドロップアイテムだった。加えて品質も状態も良く、これならばアミッドの手に掛ければ、かなり質の良い防具や道具に変えることが出来るだろう。

これほどの素材となれば、価値は相当なものになる。

(ああ、これは吹っ掛けられますね)

ノルアが言っていた通りだった。

特に相手がティオネだというのが不味い。

これが別の冒険者ならまだしも、彼女は自分のファミリアの団長のためならば遠慮なく額を釣り上げてくる筈だ。それに実際、最初に彼等の足元を見て冒険者依頼を発注したのはディアンケヒト・ファミリアの方。これはもう仕方ないと言えなくもない。

「希望の額は如何程ですか？」

「1500万ヴァリス！」

「ちよ、ちよつとティオネさん!?!」

「相場はその半分程になると思われますが」

「今まで市場に出回っていた物と比べても、例が無いくらい上等な物よ？半端な額で取引なんてしないわ」

「……………」

しかし、そうは言ってもだ。

確かに今のディアンケヒト・ファミリアには十分な蓄えはあるが、その中には彼女が危険な遠征に同行する事で得られているものだけである。いくら蓄えがあるからといって、それを容易く差し出す訳にはいかないだろう。痛み分けで簡単に手を引くことも、出来ることならしたくない。これは本当にアミッドの個人的な思いでしかないのだが。

「こちらをご覧下さい」

「ん？なによ……れ……」

「過去の”カドモスの皮膜”の取引に関する記録の一覧です。例が無いとは言いますが、12年ほど前に傷一つない最高級の皮膜が1000万ヴアリスで取引されております。この皮膜を1500万ヴアリスと言っているのは些か無理があるかと」

「そ、そんなの昔の話じゃない。問題なのは今の価値で……」

「どれほど高く見積もったところで900万ヴアリスが積の山でしょう。しかし今回の件については無理に冒険者依頼を入れ込んでしまった我々にも非があります。1000万ヴアリスでどうでしょうか？」

「い、1200万！」

「950万」

「ほ、ほかのファミリアに売るわよ!?!それでもいいの!?!」

「既にこの資料は伝を使って主要な商業系ファミリアに提供しています。1200万ヴアリスで買い取って下さるファミリアが見つかるの良いのですが……」

「ぐ、ぐぬぬぬ……!!」

「もう諦めなよティオネ〜」

「じゅ、十分に相場より高いですから……!きつと団長も喜んでくれますっつてー!」

「今日のアミッド、強い……」

そんな嘘も交えたやりとりの末に、最終的に1050万ヴァリスでこの取引は成立した。ティオネを納得させる為に多少の色を付けた形だ。

……正直アミッドとしても、この素材はどうしたって欲しかった物である。もしここでティオネがまだ勝負に出る様ならば折れるしか無かったが、なんとか勝ち取れて良かったというところだろう。

そうでなくとも十分に譲歩した値段。非難される謂れはなく、決して得をしたとは言いがたい。その分はまた別件で依頼を出して良い分というところか。

「もう……どうしてそんなに手が回ってるのよ！そんな資料用意してたなんて聞いてないわ！」

「あー、そういえばそうだよねー。なんで私達が持って来るもの知ってたのー？」

「昨日の今日で知ってる人は居ないはずですけど……」

「私の手柄ではありません、ノルアが事前に準備をしてくれていました」

「……」

その名前に反応したのはレフイーヤ以外の3人だ。きつとレフイーヤはまだノルアに関して殆ど知らないのだろう。会ったことすらないというのは間違いない。

明らかに渋い顔をするティオネに、冷汗をかきながら周りを見渡して彼女の姿を探すアイズ。ティオナも反応に困った様な表情で、アミッドの次の言葉を待っていた。

「？あの、ノルアさんって確かディアンケヒト・ファミリアの副団長さんのことですよね？」

「はい、レフイーヤさんは顔を合わせたことがないのですね」

「え、ええ。ただ治療師としても冒険者としても実力のある人だとリヴェリア様に聞きました。……あの、皆さんどうしたんですか？」

1050万ヴァリスを静かに袋に詰め始めたアミッドと、今もこの話が早く終わらないものかと言わんばかりに口を閉じている他の3

人。また嫌われているものだなど、アミッドは嘆息する。

だからあまり名前を出したくなかったのだが、彼女の手柄を自分のものにしたくはなかったのだから仕方がない。

「彼女は少し特殊な人物でして、苦手に思う方も少なくはないのです」

「え、そうなんですか？……アイズさんですか？」

「……昔、すごく叱られて……今も、苦手？」

「アイズさんが!？」

「あゝ、あたしはなんていうか……ちょっと怖い、かなあ」

「不気味なのよ、何でも知ってるみたいな顔して。目が笑ってないし」

アイズはともかく、感覚派の2人が揃ってそう言うということに、レフィーヤも唾を飲み込んで色々と悪い想像を膨らませる。

……こんなのももう、いつものことだ。

いつものことになしたくなかったのに、なってしまった。

「悪い人ではありません」

「それはまあ、分かるけどさあ」

「ただ勘がいいだけです、勇者と同じで」

「アレを団長と一緒にしたくないんだけど……」

「叱るのも相手のためです」

「うっ」

「……それに」

私だけは知っている。

私だけは理解している。

彼女の良さを。

彼女の性格を。

「私はノルアにも、友人と呼べる人間が出来て欲しいと思っています

……」

「アミッド……」

だからそれを、自分だけのものにしてはいたくはない。他の人たちにも知って欲しい。理解して欲しい。容姿や雰囲気に関わされることなく、彼女の本当を見て欲しい。アミッドはそう思っている。

「……まあ、努力はするわ」

「テイオネさん……」

「団長が言っただのよ、次の遠征では“白焰（レフ・フローガ）”をどうしても連れて行くつもりだって。遠征に同行を願う相手に苦手意識持つてるとか、笑えないでしょ」

「わ、私も……叱られない様に、頑張る……うん」

「あたしも、うん、今度声掛けてみる……!」

これで少しは状況が良くなるだろうか？

これで少しは彼女を見る目は変わるだろうか？

分からない。

分からないが……少なくとも、今日までは同じことをしても何も変わらなかったというのが、間違えようのない事実だった。

04. 彼女の实情

「……何をしたら、いいんでしよう」

活気のある大通りに佇む。

いつもは何か目的を持って歩んでいるこの道も、今日ばかりはまるで違う世界の様に見えた。

たいした私服など持って居らず、いつも通り真っ白な外出用の医療服を着てここに居る。いつもと違うのは目を隠す様に頭に巻かれた黒い布だけ。

『ノルア、試しにこの布を目に巻いて1日過ごしてみる。多少は何かが変わるかもしれん』

朝早くに思い付いた様にディアンケヒトに手渡されたそれを、ノルアは特に拒むこともなく受け入れた。布と言ってもそれほど厚いものではなく、軽く巻いているだけなので視界も多少悪くなる程度。

ディアンケヒトはこれで何かが変わるかもしれないと言っていたが、ノルアには彼の思惑がサッパリ何も分からなかった。何をしてもどうして欲しいのか。何を求めているのか。ノルアにはそれが分からない。

「……お土産でも、買っていきましようか」

アミツドに。

「あら？ 貴女……」

「……ヘファイストス様？」

そうして何件かの土産屋を周り、アクセサリ等が売っている小物売店に入った時。そこでノルアは思いもよらぬ人物と顔を合わせた。

鍛冶系ファミリアの最大手：ヘファイストス・ファミリアの正に主神、女神ヘファイストス。滅多に会わない、どころの話ではない。彼女ほどの神物がこんな小物売店に顔を出していると言うのは、そのイメージからしてもあまり考えられないことだった。そして彼女自身もそれを自覚しているのか、今の自分の姿を知り合いに見られて恥ず

かしそうに目を背けている。それもまたなんだか珍しい。

「何かお探し物ですか、ヘファイストス様」

「え、ええと……ほら、そろそろ神会があるでしょう？ 装飾品のアイディアが欲しくて」

「そうでしたか。そうとも知らず、お邪魔してしまい申し訳ありません」

「い、いいのよ別に。私もそろそろ途方に暮れてたところだったもの。……それより」

「？」

ヘファイストスに顔を覗き込まれる。

こうして顔を近付けられるということはノルアにとってあまりあることではなく、ノルアは困惑しながらもそれを受け入れる。彼女が見ているのはノルアの眼だ。しかし今日はそれを隠しているのだが……

「……目を隠すだけで随分と雰囲気が変わるのね、貴女」

「そうでしょうか？ あまり自分では自覚がありませんが」

「やっぱり元が美人なのね。正直見違えたわ」

ヘファイストスのその言葉に、ノルアは珍しく驚いた。まさかディアンケヒトのあんな思い付きが、ここまでの効果を発揮するとは夢にも思っていなかったからだ。

「目隠しをしていけば、私は普通ですか？」

「……いいえ、そんな簡単な話じゃないわ。前にも言ったでしょう？ 貴女のことをまともに見て居られるのは、オラリオでも私を含めた少しの神くらいだって」

「そうですか」

「ねえ、前にも誘ったけど、私のところに来ない？ 私の眷属達となら、少なくとも今よりはまともな生活が出来ると思うの」

「……………」

ヘファイストスの言葉に、ノルアはゆっくりと首を横に振る。

その言葉に対する返答もまた変わっていない。

有難い話ではあるが、別にノルアは現状を憂いたりしてはいない

し、不満もなかった。こうして時々ディアンケヒトから訳の分からない指示を出されると困ったりはするが、それでも彼は良い神様だと言える。正直に言ってしまうえばノルアには、わざわざファミリアを変えらるほどの意味が現状に見出せない。

「そう……ごめんなさいね、勝手に同情していたわ」

「いえ、ありがたく思います。こうして仕事以外で他の方と会話をすることも滅多にありませんから」

「貴女ね……っ」

ふと気付き、周囲を見渡すヘファイストス。

店内に居た客は店員を含めてこちらを、否、彼女の方を見ており、その視線はやはりと言うべきかあまり良い物ではなかった。

……ここまで酷かったかと、ヘファイストスは顔を顰めながら思案する。最近は顔を合わせる機会はなかったが、彼女の仕事や功績に関しては耳に入ってきていた。レベルを上げたとか、薬品を開発したとか、遠征にも参加していると。だからこそ少くらは周囲に認められて来たのではないかと思っていたのだが、どうやらそう言う訳ではなく、むしろ悪化していたらしい。

「こっち来なさい」

「？」

ヘファイストスは彼女の右手を引いて店を出る。そうすれば一瞬でこちらに集まる外を歩く街の人々の視線。彼女は今日ここに来るまで、自分がずつとこの視線に晒されていたことに気付いていなかったのだろうか？

(……違う。慣れてしまったのね、もう)

通りを走り抜け、向かったのは薄暗い路地裏。人手が通らない、それだけは間違いないそんな場所にヘファイストスは彼女を連れ込む。

相変わらずされるがままのノルアは、本当にこれっぽっちの危機感も抱いていない様に見えた。

「貴女……普段、普通にこの通りを使っているわよね？仕事とかで」

「はい。あまり外に出る様な仕事を頼まれることはありませんが、市場の流通を知るために定期的に歩いています」

「……それ仕事？」

「薬材の安定供給を図るのは仕事かと」

「……ま、まあそこはいいわ。それより、貴女もしかしていつもあんな風に周りに見られてるの？」

「はい」

「はい、って……」

当たり前のようにさういう。

実際、当たり前になつてしまつていゝのだから。このことをディア
ンケヒトは知つていゝのだからか？

(知つていゝからこそ、外に出す仕事はあまり押し付けけない様にして
るのね)

そんなディアンケヒトの思いも知らず、肝心の本人は自分の時間を
使つて仕事の為にここに来て悪目立ちしていたという訳だが。

あの嫌悪とまでは行かなくとも、異物を見る様な嫌な目線。あんな
ものを四六時中受けていたら、普通の子供なら狂つてしまうのではな
いだろうか？少なくとも、こうして気にせず買い物をしに来るとい
うのは明らかに普通ではない。

……ここまで来ると、同情くらいさせて欲しいものだどヘファイ
スは思う。せめてファミリア内でくらは良い関係を築けてい
るといいのだが、その望みも薄いのだろう。そうでなければあのデア
ンケヒトがここまで彼女を特別扱いする必要がない。

「貴女、これから用事は？」

「特にはありません。今日は休暇を頂いたので、仕事もダンジ
ョンも禁止されてしまいましたので。夜にディアンケヒト様にお供す
るまでは暇を持て余しています」

「そう……それなら、少し着いて来なさい。貴女に紹介したい神が居
るの」

「紹介したい神様、ですか？」

「ええ、最近オラリオに来た女神なの。あの子なら多分、貴女のことを
しっかりと見ることが出来るわ」

「！」

ここに来て漸く、彼女から反応らしい反応を得ることが出来た。そのことにヘファイストスは少しだけ気分を良くしながら、主に裏路地を中心に彼女をとある廃教会へ向けて連れ出していく。

……なぜそこまでディアンケヒト・ファミリアに拘るのか、ヘファイストスは問いたかった。もし自分のファミリアに来てくれるのであれば、こんな視線や悪評からも守ってあげられるし、皆と同じ人間として愛してあげられるのに。

それでも彼女がそれを望んでいないのなら、ヘファイストスに出来るのはこれくらいしかなかった。いくら他派閥の子供とは言え、大事な子供達の1人であることに間違いはないのだから。……何の罪もない子供であることに、間違いはないのだから。

「遅くなってしまい申し訳ありません、ディアンケヒト様」

「ガツハツハ！構わん!!眷属が待ち合わせに少し遅れた程度で機嫌を悪くする儂ではないわ!」

「ありがとうございます」

「しかし!なぜ遅れたかに関しては後でじっくり聞かせて貰うことにするがな!酒のツマミはいつだって会話よお!ハツハツハツハ!」

「……………」

夕暮も沈み始めた頃。ノルアは待ち合わせ時間を少し遅れて、拠点の前に仁王立ちしていたディアンケヒトの元へと辿り着いた。

昼頃はヘファイストスに紹介された女神へステイアと言葉を交わし、その後はヘファイストスによつて鍛冶工房の見学をさせて貰っていたのだ。そうして色々と鍛冶というものについて学んでいれば、氣付いた時にはこの時間。これは不味いと思いついて帰って来た訳なのだが……しかし意外にも、ディアンケヒトの機嫌はむしろ良かったりもする。待たされていたというのに、どうしてこうも嬉しそうなのか。それほど酒を飲むのが楽しみだったのだろうか。だとすれば、むしろ怒っていいようなものもあるが。

「ディアンケヒト様、今日はどちらの店へ?」

「うむ、”豊穰の女主人”という店は知っているか？」

「はい。あまり詳しくはありませんが、確か女性の店員の多い店と聞きました」

「そこへ行く」

「よく行かれるのですか？」

「そんな訳がなからう！何故儂があんな庶民の店で庶民に紛れて酒を飲まねばならんのだ！」

「それでしたら何故……？」

「ふんつ、貴様の様な酒の楽しみも分からん未熟者に、高い酒を飲ませるのが勿体ないからに決まっておろう」

「普通は高く美味しい酒を飲ませて、そこから酒の良さを教えるのでは？最初に不味い酒を飲んでしまい、酒自体を忌避する様になったという話もよく聞きます」

「……わ、儂の思いやりを否定するか!!」

「いえ、その様なことは」

「ええい！お前は黙って着いて来ればいいのだ！余計なことは考えんでいい!!」

「承知しました」

それきり、静かに「ディアンケヒト」の3歩後ろを着いて来るノルア。これで隣を歩いて会話の一つでも投げてくれるのであれば可愛げもあるというものを。まあそれも今更、ディアンケヒトはもう何も言わない。

「……下賤な庶民共め」

それにしてもやはりというか、集まる目線が鬱陶しいことこの上なかった。大通りを歩いているのだから当たり前ではあるが、この時間になると店も客を入れ始め、昼よりも更に多い人混みを掻き分けることとなる。

しかもすれ違うだけならまだしも、本当に目に付く場所全ての人間の目線がこちらに……否、彼女に向いているのが分かってしまう。最初からこれを承知の上だったとは言え、まあ不快だ。せめて憧れや好奇の視線であるのならば良いものを、10年も生活しているのになお

これだ。

「まあ、予約を取っておいて正解だったな」

ふと振り向けば普段通り顔色一つ変えることなく、避けるまでもなく避けられながらディアンケヒトの後ろを着いて来るノルア。その目には朝指示した目隠しが今でも巻かれており、まあよくもまあ暗くなった通りを歩けるものだなと感心すらするが、正直ディアンケヒトとしてはそこまで忠実に守れと言った訳ではない。邪魔なら普通に取ればいいし、丸一日中付けている必要なんて実際ない。

「ノルア」

「はい」

「目隠しを取っても構わん」

「……いえ、このまま付けておきたいと思います」

「?何故だ」

「目を隠していれば雰囲気が変わると言われました、周りの方々からしてもこちらの方が良いのではないかと」

「……ならば好きにしろ」

「はい」

ディアンケヒトとて、それは否定できなかつた。彼女がそれでいいのなら、それでいいと思う。無理にやめさせる必要もないし、それで少しは緩和しているのなら続ければいいだろう。

そうこうしているうちに2人は”豊穣の女主人”へと辿り着いた。今日もディアンケヒトが以前に見た時と同様に繁盛しており、様々な種族の女性店員達が愛想良く働いている。美人が多いという点だけで言えば、ディアンケヒトは満足だった。

……とは言え、今日はそんなことを単純に楽しめる日ではないということも分かっている。今日の酒飲みの主役はディアンではない、彼の眷属の方なのだから。

「邪魔するぞ」

「「……………」」

「チツ」

まあ大方の予想通り、静まり返る店内。

予想出来ていたことだとは言え、いざ直面すれば不快になるのは当然だ。

店員達もまた一瞬こちらに視線を向けたが、次の瞬間には姿勢だけでも仕事に戻ってくれただけマシというものか。

ズカズカと店に入り込んでいくディアンケヒト、ノルアも静かに頭を一度下げた後、彼の後ろを着いていく。

「何処に座ればいい？」

「あの角に座らせな、その横にアンタが座るんだよ。それで対面にアタシが立ってれば少しはマシだろうさ」

「ハッ、少し狭いが仕方のないことか。ノルア、あの席だ」

「はい」

店の角のカウンター。

最初からそういうつもりであったのだろう。

色々と物が置いてあり、横にディアンケヒト、対面に店主のミアという身体の大きな2人が陣取れば、完全に死角になる様な場所が作られている。

騒がしくも温かい雰囲気に加わることも出来ず、角の方へと追いやられる彼女であるが、居場所を用意して貰えているというだけで有難い話だ。

特に表情を変えることもなく作られた専用の席に座り、ディアンとミアによって完全に姿を隠されると、途端にさつきまでの活気が戻ってくる店内。再びディアンの舌打ちが聞こえてくる。

「注文は？」

「一番高い物を持って来い、酒もだ」

「あいよ、アンタは？」

「……あの、ディアンケヒト様」

「好きな物を頼め、今日ばかりは儂が出してやる」

「はい……」

近くにあったメニューを手にとってみるノルア。相場よりは高めだろうか、しかしディアンケヒトが選ぶ様な店だ。その味はどれだつて保証されている様な物なのだろう。

「……焼飯の定食と、葡萄酒を」

「なんだい、アンタ小食かい？」

「はい」

「……ディアンケヒト？アタシはアンタ等が金を使うって聞いたから頼まれたんだよ。」

「ならば席代でも付けとけ、これはこういう奴だ」

「ったく、最近の冒険者は食が細いつたらありやしない」

そう文句を言いながらも彼女が自らの手で食事を用意してくれるのは、ディアンケヒトという神が席代すら払うと言っているからだろう。

目の前に立つミアという店主は、ノルアに対してもおかしな反応を示さない。否、最初に顔を見た時にはしていたが、直ぐに普段の彼女へと戻った。

……店の中は騒がしい。

今日の冒険はどうだとか、好きな女がどうだとか、そういう話が聞こえて来る。

それに向かい側のカウンターに誰かが店員と座ったのか、ミアは身体をそちら側に向けて快活に笑った。そんな笑みをノルアには決して見せてくれなかったことを考えるに、やはり彼女もまた多少は影響されているのだろう。仕方のない話、それを悲しいとは思わない。

「ふむう……まあまあだな」

「？お酒ですか？」

「うむ、貴様も飲め。酒は飲めるのだろうか？」

「はい、酔ったことはありませんが……頂きます」

「ほう、酔ったことがないのか。どれくらい飲んだ時の話だ」

「んっ、エール瓶10数本ほどだったかと思えます」

「じゅっ……!？」

「18階層で食事をしていた際に見知らぬ方々から勧められたことがあるのですが、その時に。どうも酒に酔わせて私を殺そうとしていたようです」

「い、いつの話だ!？」

「1年ほど前でしうか」

「何故報告しなかつた!？」

「特に怪我もありませんでしたので」

「お、お前は……」

話を掘れば地雷しかないのかと、というか普通にそれくらい報告しろと、ディアンケヒトは頭を抱えて酒をかつくらう。

こういうのは飲んで忘れてしまうに限る。

しかし、話を聞く限りでは彼女はどれだけ飲んででも殆ど酔うことのない体質なのかもしれない。となると酒の楽しみを教えるのは難しいだろう。やはり酒特有の楽しみとなれば酔いだからだ、味なり製法なりは別に酒でなくともいい。……というかディアンケヒト自身、酒の酔いを教えたいと思っていた。早速計画が1つ狂った形になる。

「ま、まあよい。……とところで、今日は何をしていた？お前が時間に遅れるとは珍しかろう」

「申し訳ありません。本日はヘファイストス様にヘステイア様の紹介を受けた後、鍛冶工房の見学をさせて頂いておりました」

「……ヘファイストか。なんだ、鍛冶に興味でも湧いたか」

「後学のためにご利用したのですが、とても興味深く思いました。私が想像していた以上に繊細で、熱に溢れていました」

「ふんつ、鍛冶師に転職するのも悪くならう。今からでもな」

「いえ、私は治療師として努力を続けていきたいので」

「……ならばダンジョンに潜るより地上で励め」

「出来ることは多い方がいいかと」

「その中に鍛冶まで増やすつもりか？」

「出来ることは多い方がいいので」

「やれやれ、馬鹿な眷属を持つと苦労するわい」

一朝一夕で出来るようになるものでもないだろうに。それでも一度やると言ったら始めるのがこの女だ。そうして結局いくら時間を掛けてでも出来る様になった末に、このレベル。ならばきつと出来る様になるのだろう、鍛冶も。

出来ることが増えれば仕事が増えるのは当然の話だが、こいつはむ

しろそれを望んでいる。その末に何を求めているのか、口にも出しやしない癖に。何を見て、何を目指しているのか、誰にも悟らせてはくれない。

『おお、ロキ・ファミアアだ……!!』

「っ、なに？」

そして今宵もまた、混乱は起きる。

05. 神々に見えるモノ

「姿を隠せ、ノルア」

「？」

「いいから隠せ」

殆ど食べ終わったノルアの頭を下げるディアンケヒト。幸いにもロキ達にはまだこちらに気付かれてはいないようだったが、これは少し厄介だった。店から出る時には間違いなく気付かれる。

……正直な話、ディアンケヒトは彼女をロキ・ファミリアとは極力関わらせたくはなかった。その理由がある。彼等の遠征にノルアが着いていくことのないように、わざわざ同時期に別のファミリアの遠征に行かせているのは他ならぬディアンケヒトだ。だから未だにロキ・ファミリアとノルアの関係は、治療院でくらいの接点しかない。

……にも関わらず、遠征の度に毎回毎回ノルアを貸せないかと声を掛けてくるロキ・ファミリア。果たして何を考えているのか。しかし事実として、ノルア・コルヴァスに対して好意を抱いている者などオラリオには決して存在しない。それは確かだ。精々ヘアアイスストスとアミッドくらいのもの。ならば信用出来る筈もない、容易く貸し出す筈もない。

「もう少しそうしている」

「はい」

カウンターの下に隠れる様にして蹲ませる。

まさかこの時、反対側にいた1人の男性冒険者も同じ様にカウンターに隠れている奇跡が起きているなどと誰も知りはない話ではあるのだが、唯一その2つを知っているミアからすれば微妙な顔をするしかない。

……その後は色々であった。

何やら妙な盛り上がりをした後に、突如食い逃げをして去っていった冒険者が1人。その後はまたロキ・ファミリアが騒ぎ出してミアが怒鳴りに行ったりと、まあ本当に騒がしい。そんな中でも眷属の為に

1人静かに酒を飲んでいたディアンケヒトは忍耐強く待った方だろう。その間ずっとカウンターの下で主神から手渡された飲み物を飲んでいたノルアも頑張った。

ただ、頑張りがいつも報われるとは限らない。

「おいおい、こないな所で何静かに飲んでるんや？ディアンケヒト」
「……ロキ」

「珍しいやないか、似合わんで？普段はもっと喧しくしとるやろ」
「偶にはそういう気分の時もあるう、邪魔をするな」

あからさまにニヤニヤとした笑みを浮かべて、ディアンケヒトの隣に椅子を持って来て座る女神ロキ。その視線の先にはカウンターしかないが、その下に隠れている者の正体を彼女は間違いなく見抜いていた。

それでもディアンケヒトは目を閉じ酒を飲みながら動かない。バレようがバレなからうが、結局すべきことは変わらないのだから。

「例のあの子は元気なんか？ん？」

「アミッドならば先日貴様の小娘共と取引をした筈だな」

「周りくどい話はせんでええ、そっちの子の話や」

「……」

「なんや大事にしとるみたいやん？今回の遠征もその子が来てくれとったら、もうちうつとばかり楽やったんやけどなあ」

「……この子に拘る必要もなからうに」

「いやいや。戦闘も出来るLv.4のヒーラー、しかも治療魔法もオラリオの3本指に入る高性能。こんな誰が欲しがっても当然やろ」
「当然ではない」

「……」

「全ての例外たる此奴にとっては、その理由では当然には成り得ない」
ディアンケヒトは明確な神威を伴った眼力でロキを睨み付ける。そしてその瞬間、店内に居た全ての者達がディアンケヒトの存在に気が付いた。

……何が起きているのか、少なくとも挨拶程度の雰囲気ではない。

ロキ・ファミリアの者達だけではなく、店員達すらも立ち止まっていた。ミアもまた、口を出さずに食器を磨き続ける。

「何が目的だ、ロキ」

「……自分こそ、いつまで見て見ぬ振りしとるん？ いい加減分かつとるやろ」

「それをこの場で口に出す様なら容赦せんぞ」

「見て見ぬ振りの次は、家族の振りか？」

「なに……？」

今度こそディアンケヒトは立ち上がり、怒りを持ってロキを見下ろした。ロキ・ファミリアの者達はそれを見て立ち上がるが、彼等の行動を幹部の1人であるリヴェリアが制する。

「火に関係ない神やろうが」

「っ」

「自分が影響されとんのは明らかやろ」

「……それ以上の、口を開くな」

「愛情も抱けん癖に、いつまで手元に置いとるんや。せめてへファイストスのとこ引き渡せや」

「貴様ツ!!」

堪忍袋の尾が切れたディアンケヒトが拳を振り上げる。動かないロキ、咄嗟に動き出すロキ・ファミリアの団員達。……しかし、その誰よりも早く立ち上がり、彼の拳を止めた者がいた。

「ディアンケヒト様、どうかそれ以上は」

「ノルア……!!」

「私は、気にしていませんから」

それは一体、何に対しての言葉なのか。

ロキの暴言についてなのか。

周りの目線についてなのか。

それとも……ディアンケヒトがノルアのことを眷属として愛してはいないという、その事実に対してなのか。

「お騒がせしました、今日はこの辺りで失礼させて頂こうと思います。

……ロキ・ファミリアの皆様も、ご歓談中に不快な思いをさせてしま

い大変申し訳ありませんでした。直ぐにこの場を離れ、暫くの外出は控えますので、どうかお許し下さい」

深々と頭を下げ、いつもの目線に晒されながらも主神に代わって謝罪を行うノルア。……いや、これでは主神に代わっての謝罪にはなっていないだろう。彼女が謝っているのは、自分という存在をこの歓談の場に晒してしまったことについて。もつと言えば、自分が原因で起きてしまった口論に關しても。

……1年前、ノルアは18階層のリディアの街の酒屋で複数の冒険者達に襲われた。その時にそれを見ていた周囲の者達から言われた『お前のせいで酒が不味くなる』という軽口は、その後のどんな恨み口よりも記憶に残っている。だから仕事の為に外を出歩くことはあっても、ノルアは極力外食については控えていた。

……いつも、こうなるからだ。楽しいな会話を自分の存在は絶対に遮ってしまう。そしてその状況に出会す度に思う。やはり自分は幸福な場所に顔を出すべきではないのだと。

「いやいや、気にせんといてな。ウチも言い過ぎたし。ちくつとディアンケヒトに釘刺したろと思ったんやけど、口が滑ったわ」

「申し訳ありません」

「ま、これに懲りたら、あんま表に出て来ん方がええで。大人しゅう部屋ん中で1人で酒飲んどった方が気楽やろ」

「ロキ！貴様まだ言うか……！」

「アホウ、その子のため思って言うてるんやろが。こないな所に連れ出して、お前こそ何考えてんねん。今更人並みに生きられると思うんのか」

「っ」

「ディアンケヒト、もう一回言つとくで？はよ手放せ。ファイたんとこでも、最悪ドチビンとこでもええわ。事は派閥1つで収まる問題やない、これの手遅れはマジで洒落にならんぞ」

「……………」

ディアンケヒトは黙り込む。いつもはあれほど騒がしい男神がこれほど言葉を詰まらせることは、早々ない話だろう。口で押される様

な彼でもない。

要は、今の彼はそれくらいに普段とは違う。異常な状態に居る。彼自身もそれを理解している。

「それと……ノルアたん。次のウチのこの遠征、着いてきてくれへんか？」

「承知しました」

「ノルア!!」

「問題ありません、ディアンケヒト様。ディアンケヒト様が危惧されている様なことは無いかと思われませぬ。……勿論、私が今以上に害のある存在にならなければ、の話ですが」

「ああ、話が早くて助かるわ。今のところはほんまに手出す気はあらへん。単にヒーラーが欲しいだけやしな」

「……何を根拠に信じろと」

「ほんまにやる必要があるんなら、真正面から叩き潰したる。それがせめてもの情けや。ウチの子も何人か、世話になったことあるしな」
ロキがそこで言葉を切ると、ノルアはもう一度深々と頭を下げ、カウンターに少し多めのお金を置いてからディアンケヒトの腕を引いた。

苦々しい顔をしてロキを睨み付けながらも仕方なくノルアに連れで行かれる彼は、どうやったってこの論戦に敗北していた。否、それが始まる前から勝負を仕掛けられれば負けることが決まっている様な状況だったとも言える。だから強引に外に出る事なく、あわよくば隠れ続けられないかと神威を消して居座っていたのだから。

「……ノルア」

「私は、例外なんて存在しないと思っています」

「？」

「私を拾って下さったディアンケヒト様だけが影響を受けていないなんて……そんな都合の良い話、有り得ないですから」

「……」

目に布を巻いたまま、ディアンの先を歩く”見慣れた”少女。けれどその少女の姿が、段々と”見慣れた”怪物の姿へと変わっていく。

少女の姿を塗り潰す様に漆黒の炎が燃え盛り、現れるのは身体を球体の様に丸めた小さく悍しい悪しき鬼龍。

周囲の子供達の反応は変わらない、常変わらず彼女を異物のように見つめるばかり。この姿が見えるのは、神だけだ。神々だけが、否、神々だけは、この真実の姿を見通せてしまう。

「ディアンケヒト様。……貴方があの日、私を拾ってくれた。ただそれだけで、私にとってはもう、返し切れないくらいの恩を頂いているんです」

「……愚か者が」

「今日は連れ出して下さって、ありがとうございました」

鬼龍の姿が描き消える。

再び現れた彼女は、笑っている。

……ああ、確かにその目隠しは渡した意味があつたのかもしれない。その笑っていない目が見えないというだけで、こんなにも人間らしい姿になるのだから。

06. 女神の眷属達

「……はあ、相変わらず心臓に悪いわ」

「ね、ねえロキ？さっきのって……」

「ん？おお、雰囲気壊して悪かったな。ほれ、みんな続き続きい！食べて飲まんと勿体ないで〜！」

2人が出て行った後、店内は再び直ぐに活気を取り戻した。本当に、さっきまでの静けさが嘘の様に。客や店員達は当然、ロキ・ファミリアの一部の者達までその有様だった。それに違和感を感じる者達も居るし、見て見ぬ振りをする者達も居る。

当然、席に戻ってきたロキに食い付いたのはレファイヤー達だった。ただアイズだけは別のことに落ち込んでいて、ロキ達が何かを言っているのもボンヤリとしか聞いていなかったらしい。彼女だけは今も別の席で足を抱えている。

「ロ、ロキ……？さっきのは一体」

「ん？なんや、レファイヤーも気になるんか？成長したんやなあ」

「？それはどういいう……」

レファイヤーの疑問に同様に視線を向けたのはティオネとティオナの姉妹、そして丁度その背後で片付けを行っていたリユー・リオンである。彼女も幾らか事情は知っていたが、その詳細までは知らなかった。それ故にわざと片付けをゆっくりと行い、静かに話に聞き耳を立てる。

「あれが”白焰（レフ・フローガ）”、ディアンケヒトのところの副团长や」

「えっ！そうだったんですか!？」

「私達は知ってたけど……でも、なんか前より近寄り難くなかった？」「うんうん！立ってるだけなのに、こう……怖かったよね！目も隠してたけど、怪我でもしたのかな？」

「怪我やない、あれは目隠しとるだけやろ」

「そうなの……？」

「神も子供もその内側は目によく映る。せやから目を隠して誤魔化し

とつたんや。アレ外したらもつと悍ましいで？」

「お、悍ましいって……」

「ん？……ああ、悍ましい思うんはウチ等だけやったつけ。あれの表現はほんまに困るわ」

クイツと酒を飲み干すロキ。

そろそろ団員達もグデグデに酔っ払って来ており、ロキ達の会話を聞いている者も少ない。せいぜい酒を飲まないリヴェリアや、介抱に回っている少しの者達くらい。他の客も減って来た。こんな話をこの場でするのも忍びないが、こんな場でもなければ話難い話でもあつて、ロキは言葉を続ける。

「ねえロキ、結局あれは何なの？突き放したり遠征に誘ったり、よく分かかんないんだけど」

「んく、せやなあ……簡単に言えば、爆弾や」

「ば、爆弾!？」

「せや、生まれながらに爆弾を持つとる。それも下界を揺るがす様なとんでもない威力の爆弾や。爆ぜたら間違いなくオラリオは壊滅するで」

「な、なんでそんなの放置してるのよ!?そんなのさっさと………あ」

「やから言うたやん、必要があれば潰すって」

「……でも、アミッドさんの御友人なんですよね」

「せや。しかも本人は聖人も聖人、能力も高いし頭も回る。そうやんな?リヴェリア」

「……少なくとも私は、治療師としても、冒険者としても評価はしている。アイズを含めた何人かも世話になった。恩はあるだろう」

「でもその恩、闇討ちはしないって返し方をするのよね?あんまり気持ちのいい話じゃないわよ……」

これが救い様のない人間であつたのなら、何の容赦も同情もする必要は無かつたろう。することもなかった。

ただ、つい先ほど見た彼女の姿を思い出してしまうと、それがどうにも……

「……あれ。でもなんであたし、さっきまであんなに怖いと思つてた

「んだらう」

「ティオナさん？」

「いや、今思い出すとき、あの子ずっと謝ってたんだよね。何も悪いことなんてしてないのに、ずっと頭下げた……それなのに、あの時のあたし、何があんなにも怖かったんだらうなあって」

「それは、確かに……」

思い出そうとすればするほど、あの時の異様な状況が理解出来る。今考えれば、本当にあの状況はなんだったのか。客も店員も全員が非難するように訝しげな視線を彼女一人に向け、彼女はただそこに居ただけだというのに、誰よりも深く頭を下げ真摯に謝罪をしていた。そんな彼女を、彼女の主神以外は誰も庇う様子も見せず、淡々と、あまりに冷ややかに見つめるだけ。……そして当然ながら、自分もまたその一人になっただけ。

「うっ……」

「レフイーヤ!？」

「水を飲め、レフイーヤ。余計な事は考えるな、お前は悪くない」

「で、でも……わたし、な、なんで? どうして顔もしらない人に、あんなこと……」

明確に記憶が蘇る。そしてその時の自分を今の自分と重ね合わせてしまい、そのあまりの違和感にレフイーヤは吐き気を催した。

リヴェリアはそんな彼女に水を手渡し、無理矢理にでも飲み込ませる。まるで全く別の自分がそこに居た様な、自分の身体が誰かに奪われていた様な、そういつた乖離感。繊細な者ほど影響は強い。リヴェリアはそれをよく知っている。

「アレに、あまり関わるな」

「で、でも……」

「関わったとしても、何の得もない。正直に言えば遠征に連れて行くことすら私は反対している。確かに治癒師としても冒険者としても優秀ではあるが、あれは私達に害しか与えない」

「リヴェリア様……」

あのリヴェリアがそこまで言うほどの相手だということが、レ

ファイヤにはあまりに衝撃が過ぎた。だってロキだって言っていた、彼女自身は善良な人間であると。ただ生まれた時から何かを抱えていたというだけで、それでは彼女自身は何も悪くはないではないか。リヴェリアだってそんなことは分かっている筈なのに、それでも”自分達には害にしかならない”と言って拒絶する。

「その爆弾って、どうしようもないって事ですよね……?」
「そうだ。生まれた時からその身に宿る力、引き剥がすには根が深過ぎる」

「正直、ただ殺して済む問題なのかも分からんわ。せやから結局、解決を先延ばしにして、今も生かしたるっちゅう訳やな」

「ね、ねえ、それってあの子がその爆弾を食い止めてるって事じゃないの……?」

「ま、そうとも言うやろな」

「……なんか、可哀想」

「治療師でありながらもレベルが高いのも、恐らくは檻となる自分の肉体を強化するためだ。あれは目を増すごとに力を増している。前より近寄り難かったというのは、そういうことだろう」

「「……………」」

先延ばしにするほど力を付けているのなら、さっさと殺すべきだと。そう考えている神々も多い。しかしそれに対して猛反対しているのがヘファイストスやディアンケヒトの様な主に都市の要ともなる主要な商業系ファミリアの主神達であり、流石に彼等の意見を無視する事はダンジョン探索を主流とする神々には出来なかった。

「ねえ、ロキはどう思ってるの?」

「うん? なんもんさっさと殺すべきやろ。ウチ等はまだしも、フレイヤのところを入れても殺せんくなったらマジで終わりやし。多少の被害は覚悟の上で、今直ぐにでもやったらええと思っとる」

「まあ……そうよね、私もそう思うわ」

「実際、暗殺紛いのことを仕掛けとる馬鹿もおるわ。全部失敗しとるみたいやけどな。……せやけど、結局みくんな考えとることは同じや」

さつさと殺せ。

結局、誰も彼もが同じだ。

最初の1人になって商業系ファミリアからの恩恵を受けられなくなることを怖がっているだけで、誰かがその一步を踏み出してくれないかと思っている。あわよくば陰から仕留める事で、その称賛を受けられないかと企む者達も居る。

彼女に味方をしている様な顔をしている神も、所詮はディアンケヒトやヘファイストスの恩恵を受けたいがために味方面している者ばかりだ。本当の味方など殆ど居ない。

「……なんだか、すごく嫌な気分になりました」

「助けてやりたいと思うか？」

「それは、まあ……」

「だがそれは不可能だ。結局、彼女の前に立てばお前はまたこの世界の存在として当然な拒否反応を引き起こす。相当に強い感情でも持っていない限り、あれを克服する事は決して出来ない」

「じゃ、じゃあさ、アミッドはなんで大丈夫なの？」

「それこそ、何かしら彼女に対して強い感情を持っているからだろう」
「まあ、そんな奴はアミッドくらいしか居らへん。ディアンケヒトも抵抗しとる方やけど、あれも結局は神やからなあ。どんだけ大切にしようとしても、見えてまう。心底から受け入れる事なんて絶対に出来へん」

何も知らない神々からすれば、最初に見えるのが爆弾で、そこから少しずつそれを抱えている少女が見えて来る。初めてこの街に来た神々の多くは彼女を見た途端に恐れ慄くし、その異常な光景に混乱する。

「あの、じゃあヘファイストス様に預けるっていうのはどういうことなんですか……？」

「ん？ああ、火を司つとる神なら平気なんや」

「？どういうことー？」

「爆弾の正体なんやけど、異界の火の神の断片なんよ。同じ火の神なら、その炎に惑わされる事なく、あの子を見ることが出来る。つまり

ファイたんなら普通の子供達と同じ様に見える訳や」

「へえ、でも火の神なら沢山居るんじゃないの？」

「半端な神やとあかん。ウチかて元々は火の神なんやで？せやけど異形がチラついて仕方ないし」

「そ、そうだったんですね……」

「ま、この街やとせいぜいファイたんと、ヘステイアのドチビくらいなもんやな。あれはマジもんの火神やし。特にドチビはファイたんより見えとる筈やで、もしかしたら元の異神もな」

「ならば彼女の問題を解決（生死を問わず）するための糸口になるのは、もしかすればヘステイアになつてくるという可能性もある。」

古の大英雄であるエピメテウスはその身に原初の火を宿し戦ったとされるが、その身に異神の火を宿していると捉えれば、プロメテウスもまたその火に干渉出来るかもしれない。まあそもそも彼に関しては未だ所在も正体も不明であるし、同様に強い力を持つ極東のカグツチなんかもオラリオに干渉してくることは早々無い。

「せやから、少なくともディアンケヒトが受け持つべきやないわ。眷属にも少なからず影響すること考えれば、ファイたんところに居った方がええに決まっとるんやから」

「……え、それじゃあ私達ってまだマシンな方ってことよね？ロキも火の神なんでしょ？」

「せやで」

「え、これですか？」

「これでや」

「そもそも自分の違和感に気付いている時点でマシンな方だ。普通ならば違和感すら持てず、元の生活に戻っていく。周りの客達がそうだったろう」

「た、確かに……」

「……そういえば、アストレアだけは火の神やないのに割と抵抗なかったな。【紅の正花（スカーレット・ハーネル）】なんか普通に話しとったし」

「もしかすれば火を得意とする眷属にも抵抗力があるのかもしれない。」

他には思い付かないが」

その会話に反応したのは未だチマチマと片付けをしていたリユールである。だとすれば、彼女がこうしてこの話に聞き耳を立てていた理由も分かるというもの。そうでなくとも、かつての団長であるアリーゼ・ローヴェルと仲良くしていたなどという話を聞かされてしまえば、動揺もする。

「ま、そういうことやから。あんまり深く関わり過ぎんようにな。仲良く出来るんならしてもええけど、潜在的には敵や。死刑が決まっとる相手やと思つて、話したりせんほうがええで」

何も悪いことをしていないのに刑という表現もおかしいけれど。しかしそんな話を聞いて納得出来るほど簡単な種族ではなかった、エルフというのは。そして同様に思い悩み、結果的に失敗し、諦めてしまったリヴェリアだからこそ、同族である彼女達の反応に目を配る。今なら断言出来る。

彼女とは絶対に関わるべきではない。

苦しくなるだけで、どうしようもないのだから。

余計な心労を抱えるくらいならば、最初から知らない方がずっと良いに決まっている。

07. 彼女の嘘と、彼女の本音

その夜、ノルアは1人静かに書物を読んでいた。それはノルアが昔1柱の神から頂いた物であり、こういう夜には定期的に読み返している物だった。

中身はただの物語。

その人生をただ1人の女への愛に捧げた男が、様々な困難を乗り越えて行くというありきたりな話だ。それでも最後にはその努力も苦しみも報われて、男は女と結ばれ、幸福な世界に辿り着く。……ああ、ありきたりだろう。しかしノルアはそんなありきたりな話が好きで、7年近くも前に貰ったそれを、今もこうして大切にしている。

『ノルア、起きていますか……?』

汗を流してから読み始めたそれが半ば辺りに差し掛かった頃、ノックと共にそんな声を掛けられる。途中までしか読んでいないが、栞を挟むこともなくそれを閉じる。

「起きていますよ、アミッド。入って下さい」

「失礼します」

失礼もなにも、そんなことは今更だというのに。それでも律儀にその言葉にして毎回部屋に入ってくるのだから、彼女は真面目なのだ。ノルアは思う。

少し座る位置をズラして空いたスペースを軽く叩けば、いつもの様にそこに座る彼女。こうしてノルアのベッドの上に並んで座るのは、幼い頃から変わることのない様だ。どうやら彼女も今汗を流して来たばかりの様で、今日は治療院の当番でもないらしいかった。

「またその本を読んでいたんですか?」

「ええ、読みたくなつて」

「……話は聞きました、大丈夫ですか?」

「私よりディアンケヒト様の方が心配ですね、かなり落ち込んでいらしたので」

「……その本を読んでいるのは、決まって今日の様なことがある時です。他者に拒絶されて、苦痛を感じないのであればそれは既に病です

よ」

「……………」

「っ、もう……………」

無言でもたれ掛かってくる彼女に、アミッドは口では文句を言いながらも微笑む。基本的に弱音を吐くことのない彼女ではあるが、こうして行動からはそれが伝わって来る。

「アミッドが居れば、私は他には何もいりません」

「何の強がりですか、それは」

「何も羨ましくなんてありません」

「……………今度、2人で食事でもしますか？」

「したいです」

「やっぱり羨ましかったんじゃないですか」

「アミッドとだからです」

「仕方のない人ですね」

そう言いつつも、一番嬉しいと思っているのは他ならぬアミッドなのだから笑みは隠せない。

彼女がこうして弱味を見せてくれることや、こうして自分を求めてくれること。アミッドはそれが何より嬉しい。

姉の様な彼女は、例え治療師として実力が上になった今でさえも、アミッドにとっては届かない存在だから。手が届かなくても、こうして手を伸ばして来てくれる。他ならぬ自分を求めて。それが嬉しくない筈がない。

「……………正式に、次のロキ・ファミリアの遠征に参加することになりました」

「……………心配です。恐らく”勇者（ブレイバー）”は貴女を」

「そうですね、よくは思っていないと思います」

「なぜ、そうまでして遠征に参加するんですか？貴女が行かなくとも経済的な問題は」

「少しでも長くアミッドと一緒に居たいからですよ」

「……………」

「これを抑え込むには、恩恵の昇華は不可欠です。年々レベルもス

テータスも上がり難くなっています、危なくなってから努力したところで追い付きませんから」

「……そんなに、危ない状態なのですか？」

肩を使っていた彼女は身体を戻し、今度は逆にアミッドの頭に手を伸ばして自分の方へと引き寄せる。肩を軽く叩きながら、何かを誤魔化す様に視線を切る。

「根本的な解決の目処は立ってないです」

「……ディアンケヒト様が仰っていました。年々、貴女に潜む者の力が強まっていると」

「まだ大丈夫ですよ」

「まだとは、いつまでですか？あとどれくらい大丈夫なんですか？」

「アミッドが私の側に居てくれる限り、でしょうか？」

「冗談で言っているのではなく……！」

「私も冗談じゃないですよ……側に居てくれる限りは、頑張るつもりですから。死ぬつもりもありません」

「っ」

そんなことを言われてしまえば、もう何も言えない。唇に人差し指を当てられ、下手な笑顔をこちらに向ける彼女。もう何度この笑みを向けられたか。昔は少し不気味に思えたそれも、今ではそこに秘められた感情を読み取ることも出来るようになった。

(……やはり、ティオネさん達でも)

アミッドにとって一番の懸念は、それこそ今正に彼女が言ったことだ。つまり、彼女にとって生きる為の理由というのが自分しかないという点。

もしアミッドが命を落としたら？もし何かの理由で決別することになったら？彼女は命さえ容易く捨ててしまうのではないだろうか？

だからアミッドはティオネ達に”友人になつてくれないか”とボカしながらも言葉にしたし、密かに女神へファイストスにも彼女をへファイストス・ファミリアの人間と交流を持たせられないかと頼みもしていた。

……しかし、それもどうやら今日の様子を見るに芳しくなくらい。ヘフアイストス・ファミリアの方はともかく、今日の騒ぎを聞くに、恐らくロキ・ファミリアの方はもう駄目なのだろう。彼女が生きる為の理由を与えてくれる様な人は見つからない。

「ノルア」

「なんですか、アミッド」

「生きるのは、楽しいですか……？」

「……？そうでなくては生きていないのでは？」

「私はただ、貴女に幸福に生きて欲しいと思っています」

「幸福ですよ、十分に」

「もつと幸福になる方法は、ありませんか？私に何か出来ることを教えて欲しいです。貴女が幸福になるために、出来ることを」

「アミッド……」

その為なら何でも出来る、アミッドは本気でそう言える。

治療師として同じことをしていても、自分ばかり持て囃され、感謝され、逆に彼女は難癖を付けられて感謝すらされない。アミッドは今日まで何度も何度もそんな場面に晒されたし、治療師としての幸福すら彼女は得られていないということをよく知っている。

もし自分が彼女の立場であつたのなら、嘘でも自分が幸福だとは言えないだろうし、人を癒すことすら止めてしまうと覚えてしまう。それでも今日も変わらず仕事に勤しむ彼女に、人を癒し続ける彼女に、少しくらいその働きに見合った何かがあっても良い筈だと思つてしまつて。だから……

「それなら……今日は一緒に寝ませんか？」

「え？」

「駄目ですか？」

思いもよらぬ提案。

想像していたよりもずっと可愛らしくて、小さなお願い。この流れでそんなことを言うのかと思うような話であるが、アミッドが思っていたよりもずっと真剣に、申し訳なさそうにこちらを見る彼女は、もしかすれば本当にそれを願っていたかたでも言うようで。

「……構いませんよ」

「本当ですか？嬉しいです」

「な、なんだか恥ずかしいですね。20近い女が2人で同じ床に入るというのは」

「15くらいの頃でしたか、アミッドが急に1人で寝る様になり始めたのは」

「そ、それは……！わ、私も、その、周りの目が恥ずかしかったというか」

「改めて見ると大きくなりましたね、もうこのベッドでは2人だと少し小さいかもしれません」

「……買えばいいじゃないですか、滅多にお金を使わないんですから」

「……もしかして、また一緒に寝てくれるんですか？」

「た、偶にです。毎日ではありません。……毎日というのは、流石に、その、人の目がありませんから」

人の目がなければ毎日でもいい、とでも言う様なその言葉に、ノルアは笑みを浮かべて明かりを消し始める。

手に持っていた本を机の上に置き、アミッドを壁際の奥の方へと入れてやると、布団を掛けて自分も潜り込む。

「……やっぱり、私がこっちなんですね」

「最初の頃に一度ベッドから落ちてしまつて、それからは壁際に寝かせる様になったんですよ」

「流石にもう落ちません。……それに、こちら側で寝ると逃げ場がなくなるんです。ノルアは直ぐに抱き着いて来るので」

「……胸、また大きくなりましたか？」

「人の話を無視してどこ触ってるんですか。というか貴女の方がまだ大きいでしょう」

「肌も髪も綺麗で、立派な美人になりました」

「……当たり前です。ノルアに教えられた通りに、手入れは欠かしていませんから」

「これは抱き締めたくなくても仕方ありませんね」

「なっ、あつ、もう……」

結局こうなる。

腕の中に吸い込まれて、胸に顔を押し付けられて、ぼんぼんと一定の間隔で背中を優しくたたかかれて……これでは本当にあの頃と変わらない。こんな事が他の人に知られてしまえば、明日から見せられる顔がない。

けれど、少しは大人になったと思ったのに、そんな昔と変わらないこの状況に安心してしまっている自分も居る。19にもなって姉の様な彼女に甘えている気恥ずかしさはあるが、それでもやはりここが一番落ち着いてしまうのも事実で。

「……ノルア」

「はい、なんですか？」

「どこにも、行かないで下さい……」

「……！」

「あなたは、わたしの……大切な家族なんです」

「アミッド……」

「いかないで、ください……」

眠りに落ちるまでは早かった。

1人で眠る時よりもすんなりと眠気はやって来て、普段よりもずつと深い眠りへと落ちていく。

……完全に意識を落とす寸前、思い出したのは彼女に1人で眠ることを伝えたあの日の夜。いい加減にいい歳なのだからと大人ぶって、殆ど使われていなかった自分の部屋のベッドに入ったはいいものの、その冷たさに最初は驚愕した。布団も枕も手触りが違い、何より酷い物足りなさや孤独を感じた。結局その日は眠る事が出来ず、次の日の仕事を休んで、仕事に行く前にノルアの部屋で彼女に寝かし付けて貰ったことを思い出す。今思い出してもあまりに恥ずかしい過去。

……あの時、寂しさを感じていたのは自分だけじゃ無かったのだろう。大人ぶって選んだ判断が、結局一番子供染みだ選択だったと、今なら分かる。そして、彼女と夜を共にするという、その貴重な時間を失ってしまったのだという後悔もある。

これから少しでも、それを取り戻す事が出来るのか。周りの目より

大切な物があるということが分かっただけでも、成長出来てはいるのかもしれない。

08. 生き残りの女と、死に行く女

「これで今日の目標分は終わり。当番表の更新も終わったし、薬材の数量確認もお願いした。後は……ああ、器具の点検簿がまだ来てない。それと判断を仰がれてる案件がこっちにあつたような」

ノルアの執務室は、他の団員達とは異なる部屋に存在する。彼女が居ると仕事にならないため、彼女とアミッドだけは共有の部屋を与えられていた。

それでも団長と副団長が同時にこの部屋に居るということはあまり無く、2人も極力どちらかはこの部屋に居るように意識していた。もちろん、ノルアが居る時よりもアミッドが居る時の方が団員の出入りは多いし、ノルアが居る時には外から書類が投函されることの方が多い。

団員達としては彼女の能力は理解しているし、本当に困っている時には思い切つて声を掛けるが、そうでもない時にはあまり話をしたいとは思わない。それをノルアも分かっているから指示は極力紙面で行い、他の団員達の執務室には余程のことが無い限りは訪れなかった。ベテランの治療師であればいい加減に慣れているが、新人く中堅程度の治療師はそうもいかない。余計な事故を起こさないためにも、ノルアは緊急時以外は治療室にも入らない。

『ノルア様』

「?はい、どうしましたか」

『お客様がいらつしやっております、お通ししてもよろしいでしょうか?』

「お客様……?」

書類を読んでいた手を下ろし、首を傾げる。ノルアに対しての客など滅多にない、というよりは1年に1人居ればいくらいだ。それにそんな約束をしていた訳でも、何かしら思い当たる節もない。

「……分かりました、そのままお通し下さい」

『承知しました』

その言葉と同時に、ドアが開かれる。応対してくれた団員は中に入

ることなく、中に通された”彼女”だけが目を開けて部屋の中に入ってきた。

隻腕、隻眼、衣服は極東特有の紅い桃色。顔に大きく入った傷痕に、髪は後ろで粗雑に結び、腰に付けた小刀もまた色々と手入れが杜撰になっっている様に見える。

「……どうでしたか、極東の様子は」

「はっ、相も変わらず腹黒ばかりだ。見知った顔にも会ったが、この顔を見て直ぐに逃げた。……住う場所が欲しい、頼らせろ」

「ええ、任せて下さい。ただ、それより今は汗を流して来た方が良いと思います。せつかくの美人が台無しですから」

「あほう、皮肉もそこまでいくと清々しいわ」

「替えの服も直ぐに届けますから。浴場の場所は分かりますね」

「ああ、借りる」

何の躊躇もなく小刀と財布をノルアに放り投げて、部屋から出て行く彼女。ボサボサの長い黒髪は、汚れていても極東生まれの証。その雰囲気から感じ取れる明らかな彼女の實力、それは以前にこのオラリオを出た時よりも明らかに上がっていた。

「輝夜さん」

「ん？なんだ」

「女神様には会えましたか？」

「……お前のおかげでな」

「それは良かった」

ゴジヨウノ・輝夜。

元アストレア・ファミリアの団員であった彼女は、多くの物を失って、肉体を大きく欠損し、しかしそれでも尚、間違いようもなく今の世界で生きていた。

「仕事はいいのか？」

「ええ、緊急時でもなければ私が居なくとも回るようにはなっています。……それにしても、またレベルが上がった様ですね」

「極東というのは見方を変えればダンジョンを超える魔境、行って

戻って来た時には上がっていた」

「そんなに暴れて来たんですか？」

「神の顔を殴り飛ばしてた程度でまさか兵を出して来るとは、本当に短気なアバズレ共で」

「追手は？」

「八裂き」

「門番は？」

「袈裟斬り」

「最後に？」

「一文字」

「ふふ、流石ですね」

「言わせたのはお前だろう、くくっ」

本当に、本当に自然にノルアと話す輝夜。

我が物顔でソファにもたれ掛かり、注がれた茶を飲み干す。湯を浴び汗を流したからか髪は以前ほどでなくとも艶を取り戻し、雑に着た衣服からは彼女の美肌が溢れ落ち掛かっている。

来ている物は一先ず患者用の衣服であるが、やはり右腕はヒラヒラと風に舞うばかり。しかしそんなことも、それどころか自分の容姿にすらも、彼女は何も気に掛けない。

「それで、住う場所の宛というのは？」

「ダイダロス通りの辺りに、以前隠れ家目的に個人的に安く買い取った家屋があります。買った当時に掃除と最低限の補修はしてありますので、そこなら生活に問題はない筈です」

「ほう、それは上々」

「お金についてはどうしますか？ダンジョンに？」

「養つてくれと言えば、出してくれるのか？」

「構いませんよ、どうせ他に使い道もありませんし」

「はっ、冗談だ。それくらい自分で稼ぐ」

しかしチラと目を横にやれば、大きく刃こぼれした小刀が一本。着ていた衣服もお世辞にも状態が良いとは言えず、財布の中も殆ど空に近いこの状態。そうして差し出されたのは、封筒に入った少しの金。

汗を流している間に用意をしてくれていたのだろう。思わず顔を顰めるが、背に腹は変えられない。

「……すまん」

「いえ、祝金だとも思っただけです。受け取って下さい。それか、傷を完全には治せなかった謝礼とでも」

「何が謝礼だ。蘇生に近いことをされた時点で、この人生にはお前への借りしかないわ」

「私は救える人を救おうとしただけです。最終的に奇跡を起こしたのは輝夜さんですよ」

「……お前以外の誰が胴体が真っ二つになって瓦礫に潰されていた人間をまだ救えると思えるよ」

「事実救えましたから、それでいいじゃないですか」

「」戦場の聖女（デア・セイント）」が本当にお前以上の治療師なら、オラリオは安泰だな」

「安泰ですよ、アミッドは凄いです」

まあ嬉しそうに言うものだと、嘆息を吐く。

輝夜としては、もうしなければならぬことと、解決しなければならぬことについて、個人的なものに関しては何も終わっていた。その為の長い旅だった。だからこの街に戻って来たのは、残して来たエルフと、殆ど味方の居ないこの女の力になってやるため。

世界の敵とも言えるこの女を、その世界から少しでも長く生かしてやるため。

「……生き残りが揃いも揃って手配書に載るかもしれんとは、アストレア様に向けられる顔が無いな」

「?なにか悪いことでもしたんですか?」

「いや、気にする事でもない。……ところで、最近は何か変わったことはあったか?」

「いえ、それほど大きく変わったことはありませんよ」

「お前についての話だ、たわけ」

「え?ああ……」

オラリオがそれほど大きく変わった訳ではないと輝夜とて知って

いる、なにせあの勇者が居るのだから。あれが管理している限りは、美の女神の一団が何かしらしでかさない限りはこの街に大きな変化は無いだろう。

真剣な目で問いただす輝夜。

それに対して彼女は、少しの間をおいた後に、観念した様に話し出す。

「……恩恵の昇華の必要があります」

「なんだ、もう限界なのか。Lv. 4になったばかりと聞いたが」

「正直、時間がありません。このままではあと1年も保たないと思われます」

「……待て、それではこれまでのペースと合わないだろうか」

「はい、だから困っています。一先ず強引にロキ・ファミリアの遠征について行く約束は取り付けましたが、そもそものステータスが不足しているのです。Lv. 5まではまだまだ遠いです」

「それを他に話したか？」

「アミッドにはそれとなく話に出しましたが、緊急性があるということとは伝えていません。他の誰にも勘付かかっているとは思えませんが、フィンさんだけは分かりません」

「……また危険な綱を渡ったな、愚か者め」

「自覚はあります」

だとするならば、輝夜がこのタイミングで帰ってくる事が出来たのは最善と言えたかもしれない。当然、もう少し早く帰って来れば彼女がその綱を渡ることを防げたかもしれないが、それほど緊急の事態となっているのなら、何れは結局渡ることになっていただろう。

輝夜は思考を巡らせる。

ロキ・ファミリア……問題はそこではない。

「気付いているだろうが、勇者（ブレイバー）はお前を確実に殺す気だ」
「はい」

「理由はいくつかあるが、7年前。ヘラとゼウスの残党が揃って口にした言葉が1番の原因だろう」

「……はい」

『あの銀炎の小娘は必ず殺せ、そうでなければ世界に平和など決して訪れない』だったか。間近で聞いていた身だが、あれは真に迫っていた」

「……」

ノルアだつて、その頃にはもうディアンケヒト・ファミリアで働いていた。あの日を境に自分に対する視線が一層に酷くなったことは覚えているし、それまでは何かと配慮をしてくれていたロキ・ファミリアが全くと云つていいほどに関与して来なくなったのもあの日から。

……ロキ・ファミリアもフレイヤ・ファミリアも敵だと思つていい。ゼウスとヘラの眷属達が何の迷いもなく、最期の言葉としてそんな言葉を残したのだから。それは確実なことだと言つていい。

「本当に、行くのだな？」

「……どちらにしても、このままでは私は死にますから。それなら少しでも希望のある方を取りたいです」

「馬鹿者が」

「すみません」

「せいぜいステータス上げくらいしか付き合つてやれんぞ」

「十分です、助かります」

深々と頭を下げる彼女に、息を吐きながらその頭をわしわしと乱暴に撫でる輝夜。もし遠征に着いて行けるのならば守つてやることも可能だが、そういう訳にもいかない。ゴジョウノ・輝夜はオラリオでは既に死んでいる人間なのだから。この部屋を出る時には変装はせずとも、自分だと分からない様にしておく必要がある。

……あのエルフにも何れは顔を合わせなければならぬとは言え、それは今ではない。輝夜の気分が乗った時にすればいい話だ。今はそれより優先すべきこともある訳で。

「一先ず、服を貸せ。それと髪を切る、形は好きにしろ」

「いいんですか？」

「このナリを見て気付かれるとは思わんが、念の為だ。今はその方が都合も良い」

「分かりました。……それでは毛先を整えて、前髪を少し変えてみましょうか。後髪は勿体無いので結んで貰うとして」

「……殆ど変わらん」

「服装と前髪を変えれば、人は殆ど別人ですよ。輝夜さんならより明確に、眼帯もあるので誰にも分からない筈です」

「まあ、そう言うのであれば信じるか。……他でもない、主神サマの仰ることだからな」

「……もう、その呼び方はやめて下さいと言ったのに」

そうしてノルアは床に必要な無くなった髪を広げ、彼女をそこに座らせる。静けさの残る部屋の中で、鋏の音だけが鳴り響く。

正しさとは何なのか、正義とは何を示すのか、その多くの思考の末に今この関係はここに在った。

「ノルア」

「はい」

「笑って死ねよ」

「……はい」

せめて安らかな死を。

満足の行く死を。

そんなものは決してあり得ないと知りながらも理由にしているのは、歪ではあっても、間違っているとは思わない。

09. 白炎の根源

怪物祭、モンスターフィリアと呼ばれる祭りがオラリオにはある。ダンジョンからモンスターを持ち込み、闘技場を使用して調教を行う。企画はギルドであるが、主に動いているのはガネーシャ・ファミリアだ。しかし一方で、彼等から要請を受けて手伝いを行なっているファミリアも多くある。

当然だが、ディアンケヒト・ファミリアもまたその一つだった。何か問題が起きて怪我人が出ることもある。モンスターが脱走するなんてことは早々ないが、調教中にテイマーが怪我をすることは多々あるからだ。そうでなくとも祭り、オラリオの祭り、喧嘩や騒ぎなんてしよつちゆうある。

治療師達が各施設に配置されるというのは当然として、見回りと称した半観光的なことも眷属達には許されていた。緊急時に仕事をしてくれるのならばと、その辺りを甘くしてあるのは純粹に眷属達のためを思つて。

「……それなのに、いいんですか？こんな人気のない場所に居て」
「それはむしろ私がアミッドに聞きたいくらいです。私に着いてきても祭りは楽しめませんよ。良いんですか、それでも」

「構いません、私は貴女を連れ出せと言われていただけですから」
「連れ出しているのは私の様なものですが」

「……というか、私が側に居たいんです。祭を楽しみたい訳ではありません」

「……そうですか」

「あの、恥ずかしいのでこんなこと言わせないでくださいませんか。少しは察して下さい」

「すみません」

顔を赤くしてそっぽを向くアミッドを、横を歩くノルアが慰める。

歩いているのは街の大通りから2本ほど外れた通り道。普段から人気は少ないが、この祭りの日ともなれば人など殆ど見当たらない。何故こんな怪我人すら出そうにない様な場所を2人が歩いているの

か、それはこんな時くらいにしか出来ないことがあるからだった。

「……それにしても、害虫・害獣用の薬品を撒きながら待機だなんて。一体今度は何が起きるんですか」

「心配しなくとも大丈夫ですよ、アミッドに危険は及ぼしませんから。ちゃんと私が守ります」

「……そういうことではなくてですね」

「端的に言えばモンスターが脱走するんですよ、この辺りもその通り道です」

「!?」

「正直に言えば対処するのは私でなくともいいんですが、下手に他の冒険者に頼むとまた妙な噂が立ってしまいますので」

「それは、まあ……」

「それにこの辺りは貧民街、家屋一つの損害が明日の生活にも関わります。気休め程度でしかありませんが、廃屋が増えると伝染病の温床にもなりますからね」

この会話だけを聞けば、その脱走に彼女が関わっているのではないかと思われてしまいそうだが、決してそういう訳ではない。

それに彼女がここまで自分の悟った物事についてしっかりと語るのも、アミッド相手にくらい。

「そもそも脱走を止めたらいいのでは?」

「相手が女神様となると私には無理です」

「ああ、そういう……」

「元を止める方法が思い付かなかったので、そっちは諦めました。……それに、多分もう一波乱あると思うんです」

「?」

「そっちは私達には関係ありませんが、その後少し首を突っ込もうと思っっています」

「……あの、なぜわざわざ?」

「ステータスが上げられるので」

「……ああ、もう」

こうなるともう止められない。それはもうアミッドも嫌というほ

ど分かっっていて、色々言いたいこの気持ちも飲み込むしかないと理解している。

しかしそれをただ我慢するのも出来ないから、薬を撒いている彼女の腹を後ろから突く、突く、突く。これもせめてもの抵抗だ。危険なことばかりして、心配することすら無駄だということも分かっているけど。

思わずアミッドは、何やらグローブを付けてしやがみ込みながら作業をし始めた彼女の背に抱き付いて、自分の頭を押し付けた。

「っ……そんなに怒ってるんですか？アミッド」

「怒ってますよ、いつも。分かっているでしょう」

「すみません」

「謝れば済むと思っっているのも不満です。許さざるを得ないので分かかって言っるところも」

「……ごめんなさい」

「許して欲しいなら？」

「……ええと、抱き締める？」

「なんでそうなるんですか!？」

「危ないからです」

「っ!？」

突然、ノルアはアミッドを抱き寄せ果てその場から横に飛ぶ。そうしてみれば丁度それまで居た地点に降りて来た3匹のモンスター。アルマジロ型のハードアーマードが2体に、シルバーバックが1体。(……完全に私狙いですね、これ)

事前に調べた限り、シルバーバックもハードアーマードも確かに調教メニューの中に居た覚えがあるが、ハードアーマードが2体も居たという覚えはない。つまりこれは調教されていたモンスターとは別物、そもそも種類の異なるモンスターがこうまで揃って敵意を向けて来ることもそうない。それもアミッドが居るにも関わらず、こうしてノルアだけを見て、威嚇して……

「アミッド、下がっっていて下さい。手を出さない限りは攻撃して来ないはずですよ」

「手伝った方が被害は少なくて済みますよ？」

「いえ、あれは私に対して仕向けられた刺客です。その可能性も考えてこうして人目の離れた場所に待機していたんです。……女神様の思惑は分かりませんが、アミッドまで”見”られたくはないので。取り敢えずは待機をお願いします」

「……うわ、分かりました、お任せします」

何を言われているのかはあまり理解出来ていないが、彼女がそこまでするのなら、そこまでの理由があるのだと、それだけは理解してアミッドは建物の陰に隠れる。

それに反してノルアは手足の柔軟をし始め、着ていた外出用の治療服の袖を捲る。剣はない、槍もない。

『地理焼却 (F o m a l h a u t) 』

彼女の武器は、少し変わっている。

「……相変わらず、綺麗な炎」

両手両足から白い炎が発火した。

衣服も焦がさず、肉体すら焼かない。

アミッドがずつとずつと側で見て来た、人の心を優しく包む神々しくも美しい煌めき。アミッドはそれが好きだった、それを見た時だけは他の誰もが安らぎを得ることが出来た。……しかし、モンスターだけは違う。モンスターだけは、それを悟っている。

「さて……やりましょうか」

『『オオオオオオアアアアアアアア!!』』

最初に仕掛けて来たのはシルバーバック。銀色の長い髪が特徴的な大猿は、その見た目通り特徴は巨躯と豪腕。仮に高位の冒険者であつても、その一撃が直撃すればただでは済まない。もちろん、そんなことはノルアとて分かっている。

そして挟み込む様にして左右から突進を仕掛けて来るハードアーマード。彼等はその凄まじい甲殻の硬さと重量を武器に、平凡な武器や防具程度ならば簡単に破壊してそのまま押し潰しに来る。そして何より、彼等はシルバーバックの攻撃についても巻き込まれて死ぬようなことは決してない。むしろシルバーバックの拳に当たり、更に威

力を増して突進を仕掛けて来るくらいのは容易にしてくる。

「まあ私には特に関係ありませんが……」

シルバーバックの拳による攻撃を背後に飛んで避け、直後に左右から挟み込む様にして丸まりながら迫って来たハードアーマード達の突進に、両手を横に大きく開くことで軌道を変えた。

『キツ!?!』

「鋼線です、さつき床に仕掛けて置いたんです。専用のグローブとLv. 4の腕力があれば、飛んでいる球体の軌道変更くらい出来ます」
『グガアアア!!』

床と手を繋ぐ左右2本ずつの鋼線で、ハードアーマード達の軌道を変えると、そのまま走り飛んでシルバーバックの頭を越える。そうして今度はシルバーバックの肩に掛かった鋼線達。首に向けてまとり付いたそれを彼が引き千切ろうとするその前に……

『地理焼却 (F o m a l h a u t)』

『オツ……ゴアツ……!?!』

白い炎が鋼線を伝うと、シルバーバックの身体は容易く縦に引き裂かれた。

『キイイイイイツ!!』

「ステータスの累積はあまり無いとは言え、これでもLv. 4ですから」

『ピギイツ!?!』

あまりの出来事に呆然とする一体を他所に、こちらに突っ込んで来たもう一体のハードアーマード。ノルアはそれを軽く避けると、炎の伴った蹴りを横から叩き込む。軽い小爆発と共に弾け飛ぶ甲殻、剥き出しになる肉身。そこに更に更に追撃を仕掛ける様に回し蹴りを叩き込む。そうすれば当然の如く肉体の大部分は弾け飛び、ハードアーマードの片割れは即死した。

「鋼線は大型や多数相手に使うだけで、基本はこつち(素手格闘)が主体です」

『ギイ”イ”イ”イ”イ”イ”イ!!』

「……言葉は通じていなくとも、意味は通じていそうなんですよね。」

モンスターって」

炎を消した鉄線で再び突進を仕掛け来たハードアーマードの軌道を上を逸らし、そのまま神々が言うところのオーバーヘッドキックを叩きこんだ。

白い炎が爆発し、凄まじい速度で人の居ない通路を吹き飛んでいくハードアーマード。身体が灰になりながら、まるで削り取られていく様に地面を滑っていき、通路の壁にたどり着く頃には既に原型は殆ど消失していた。

洗練された素手格闘に特殊な付与魔法による防御力を完全に無視した爆破の一撃。例え最低限のステータスで恩恵の昇華を行なって来た眷属であつても、精々14階層程度のモンスターがこれに耐える余地など何処にもなかった。

「……あつけないものですね、Lv. 4の眷属相手となると」

「少し床を壊してしまいました、これは謝罪をしないとイケませんね」
「むしろ被害が小さ過ぎるくらいではないですか？本当にモンスターと戦ったのか疑われるくらいに」

「それはそれで不都合ですね、まあアミッドが見ていてくれたので問題は無いでしょう」

「怪我はありませんか？」

「ええ、擦り傷程度です」

「見せて下さい」

それほど苦のある戦闘でもなく、足の一部が若干赤くなっている程度の話。それでも甲斐甲斐しく傷を治そうとするアミッドは、言うまでもなく過保護である。

「貴女は自分の魔法で自分のことは治せないんですから、これは私が治します」

「なんだかこんなことにアミッドの魔法を使わせるのは勿体ない気がしますね」

「所詮は個人の魔法ですから、どう使おうと私の勝手です」

その魔法一つで多くの重傷者を治療することが出来るアミッドの魔法。呪詛だろうと毒だろうと、彼女の魔法はそれを何の関係もな

く、しかも広範囲に渡って同時に万能薬を超える効力で治療することが出来る。

反してノルアの魔法は広範囲の治療は効果減衰が酷く、何より自身を癒すことが出来ない。個人に対する効果で言えばアミッドと同等の効力を出すことは出来るが、彼女の様に効力の選択や集中を行うことが出来る訳でもなく、やはり治療師としてはアミッドの方が数段階上である。

彼女の描く魔法陣は美しく、神聖な雰囲気漂っていて、それは彼女が”神秘”のアビリティで作成するアイテム等からも感じられた。彼女が聖女と呼ばれている理由の一つがそこにあり、ノルアもまたそれを美しいと評している。

「それで、これからどこに首を突っ込みに行くんですか？この様子では街中にモンスターが散らばっているのではしう？」

「ええ、ですがそちらは問題ありません。仮にもオラリオ、冒険者達が既に対処してくれているでしょうから」

「……？それなら女神の方ですか？」

「いえ、まだここでの事は終わっていませんよ」

「え？」

「アミッド、少し手伝って貰ってもいいですか？」

「え、ええ、それは構いませんが……」

そう言って手渡された幾つものピンと鋼線、そして専用の作業用グローブ。ノルアに言われた通りの場所にそれ等を設置し始め、この狭い通路にまるで蜘蛛の巣の様に張り付けられる。

「あの、まだモンスターが来るのですか？」

「正直どんなモンスターが来るのかまでは分からないですよね、私もそこまで詳細に分かる訳ではないので。ただ次に来るのはさっきのモンスターとは別件です」

「……勘、ですか」

「自分の知らない情報も見えるので、予知という方が正しいかもしれませんが」

「……その話、誰にもしないで下さいね」

「分かっています、余計な非難の的になることくらい。これ以上気味悪がられたり、無関係な疑いを掛けられるのも嫌ですから。アミツドくらいにしか話しませんし、自分のためにしか使いません」

「ステータスを上げるためと言えれば何でも許されそうな理論ですね」

「つまり気を付けます」

「ええ、本当に……って、もう」

作業が終わると直ぐにアミツドを抱き上げ、そのまま屋根の上に飛び上がって彼女を自分の背後に立たせるノルア。右手に握っているのは鋼線の片端、準備はもう出来ている。

「っ、地震……!?!」

「あく……これは失敗だったかもしれないです」

「……………ツツ!!!」

「これはっ!?!」

地鳴りと共に地下から突き破る様にして現れたのは、2本の巨大な蔓の様なモンスター。予め仕掛けて置いた鋼線に引っ掛かり、動き難そうに現れたそれは、屋根に立つ2人を認識した途端に口を開けた。

「……口というより、花開いた、と言うべきかもしれませんね」

「ノ、ノルア!!」

「大丈夫ですよ、この為に張り巡らせたんですから。……『地理焼却

(F o m a l h a u t)』

ツ!?!?!?

……………ツツ!?!?!?

白い炎が伝った鋼線が、ノルアが端を引っ張ったことを下輪切りに、蔓のモンスターの身体を先程のシルバーバックを思い出させる様な形で縦に引き裂かれていく。1体はそれで絶命したが、もう1体はあまり鋼線に上手く絡まっていなかったのか、花卉を引き裂かれただけでノルア達に突っ込んで来た。

「アミツド」

「ひゃっ!?!」

アミツドを抱き上げて再び跳ぶ。家屋に直撃するモンスター、当然

ながら家屋は倒壊した。

「少し揺らしますよ」

「も、もう好きにして下さい!」

アミッドを抱えたまま、蹴りを1発、2発、3発4発5発6発7発……!地面に着地するまでの間に、彼女をぎゅつと胸の中に抱き締めながら白炎を纏った両足で蹴り続ける。吹き飛ぶ肉体、恐ろくかなり硬い部類であろう身体も爆破によって削られていく。

「最後です」

「ひいつ!」

……なお、アミッドはそんなとにかく彼女の胸の中で目を回していた。というかもう必死にしがみ付いていた。

着地した直後、最高威力の蹴りを叩き付ければ、蔓のモンスターは完全に半ばでへし折られ沈黙する。ピクリピクリと動き、未だ致死には至っていないかったが、ここまで来たらもう負けは確定した様なものだった。

『地理焼却 (Fomalhaut)』

『イイイイイイツツ?!』

ぶった切られた切口から白炎を流し込む。

肉体を内部から焼きながら頭の方へと昇っていくそれに、モンスターは最後の力を振り絞って暴れ始めた。……とは言え、もう全てが手遅れ。外皮ならともかく、剥き出しになった内側から焼かれ始めれば、それを消す事はもう出来ない。

「あー……通路が滅茶苦茶になってしまいました。アミッド、これどうしましょう」

「ノルアああ……」

「……ええと、大丈夫ですか?」

「こ、これが大丈夫だと……?」

「いえ、すみません」

「……あの、私は子供ではないのですが」

腕の中で縮こまっているアミッドの頭を撫でるが、明らかに不満気な顔をして彼女は頬を膨らませる。背後ではようやく力尽きたモン

スターが灰へと変わり始め、付近の被害が着実に見えて来た。家屋が2つ、通路も大破。

まあここまで行けば、むしろさつきよりもモンスターに襲撃されたという言い訳が立つだろう。それに……

「えっと、大丈夫……ですか?」

「っ、アイズさん……!?!」

こうして2人目の目撃者も来てくれた。目撃者としては、良かったと言える部類だろう。

巻き込まれたアミッドとしては、それなりに仲の良い彼女に、こんな風に誰かに抱き抱えられ撫でられている光景を見られるのは、あまりにも恥ずかしい事であったが。

「お久しぶりですね、劍姫」

「っ、貴女は……!」

「モンスター3体と未確認の蔓型モンスター2体からの襲撃を受けました。全て討伐済みです」

「……っ」

「あ、降りない方がいいです。鋼線を引いていますから、今取ります」
「の、ノルア!?なんで降ろさないんですか!?なんで抱えたまま!?知り合いの前で恥ずかしいのですが!」

「……あまり無い機会ですから、この期に楽しんでおこうかなあと」

「勝手に人の身体を楽しまないで下さい!」

「……」

中央のピンを引き抜き、全体の鋼線を緩めながらも、ポカポカと拳を打ち付けられるのを受け入れるノルア。そんな2人の姿を見て、アイズはただただ呆然としていた。

(この人、こんな風に……それにアミッドも、楽しそう)

記憶の中にある彼女の像と被らない。

こんな風に(歪だけど)笑う人だったろうか?

こんな風に冗談を言う人だったろうか?

こんな風に個人を大切にする人だったろうか?

相変わず見ていると凄く嫌な感じがして、明らかに自分にとって

の敵で、倒さなければいけないという確信だけは揺るがないけれど。今だつてアミッドを助ける為に剣に手を添えて降りかけたのに、彼女はむしろ忠告をして来た。前に叱りを受けた時もこんな感じだったのを思い出す。

それにアミッドだつて、あまり自分達には見せてくれない様な顔をしている。顔を真っ赤にして、見るからに慌てて。……いつもと違う。

「アミッド、このまま剣姫と共にギルドに報告をお願い出来ますか？先程の蔓のモンスターの魔石を見せれば、手掛かりになる筈です」

「それはいいですけど早く降ろして下さい！いつまで友人の前で姫抱きされてないといけないんですか!!」

「……あと5分くらいいいですか?」

「あと5分もこの光景を見せ付ける気ですか!？」

「冗談です、残念ですが」

「味占めたら許しませんからね!？」

ここに来て漸く降ろされたアミッドが、もう半分涙目になりながら自分の身体を抱く。アイズはそんな2人の様子を目で見ながら言われた通りに魔石を探していたが、見つけた物を見て目を細める。……彼女も少し前まで、それと戦っていた。そしてこの緑色の魔石、確かに彼女の言う通りこれを見せれば手掛かりにはなるだろう。

「……あの、あの人は」

「あ……ええと、彼女のことは気にしないで下さい。それより今はギルドに行きましょう」

「……うん」

アミッドはアイズの手を取り、一度ノルアの方に顔を向けてからギルドに向けて歩き出す。彼女をここから引き離すためだ。

(……何に首を突っ込もうとしているのかは分かりませんが、絶対に無茶はしないで下さいね)

(分かっていますよ)

視線だけで互いに意思を交わす。

ノルアがこれから何をどうするかは知る由もないが、アイズが側に

居ると不都合になるということだけは知っている。アイズもまた彼女に良い感情を抱いていないのだから、現れた瞬間に剣に手を触れたのがその証拠だ。これから何か怪しいことをしようとしている彼女の姿を、そんな相手に見せる事は出来ない。……アミッドはアイズを友人と思っではいるが、これに関しては別の話。彼女に関しては、例外として扱わなければならない。

10. 根源の地雷

ノルアが首を突っ込もうと思っていたことは、それこそ先程の蔓のモンスターに関する事だった。

蔓のモンスターは地底から現れた、ならば彼等はどこから来たのか？ダンジョン？それは最も容易く考えられる論の1つではあるが、もっと普通に考えれば、より相応しい場所がある。そしてそれについては先程、そのモンスターが出現した穴の中を見て確認した。

『ガアアアアッ!!』

「やっぱりここが溜まり場でしたね、地下水道」

狭い水路、破壊された壁、そしてまるで見張りをする様に鎮座していた蔓のモンスター。ノルアはそれに対して、鞆から一本の大きめのピンを取り出した。

「ふっ」

蔓のモンスターの噛み付きを飛び上がって避け、天井にピンを刺して身体を固定する。それに鋼線を通したら、そのまま再度別方向に跳び、ピンを差し込んだ。

『ガブアッ!!』

「この狭い空間だと、正面からは危険ですからね……申し訳ないですが絡め手を使いますよ。『地理焼却 (F o m a l h a u t)』」

鋼線を一本張るだけで、このモンスターは容易く引つかかる。こんな物は自分にとって何の脅威でもない、まあ実際そうではあるのだが、例えばこれをノルアが白炎を灯して思いつ切り引つ張るだけで、切ることが出来る。それはこの蔓のモンスターが相手でもそうだが、「それに身体さえ短くしてしまえば、流星に素手格闘でも安全に倒せますし」

『ガアアアアッ!?!』

勢いが弱くなった噛み付き攻撃に、カウンターでその顔面を蹴り飛ばす。速度も威力も正確さも、身体が半分になんて千切られてしまえば半分以上。ノルアのステータスでもなんとかなる。

「……やっぱりこの魔石は出る訳ですか」

顔面を破壊され、最後にもう1発蹴りを入れられたモンスターは灰へと変わり、再びあの緑色の奇妙な魔石を落として水に流れていく。見つめる穴の空いた壁の先、どう考えてもこの先に同じ様なモンスターが大量に居るのだろう。今のノルアに、果たしてその全てを相手にすることが出来るのか。

(……無理ですね)

恩恵というのは、レベルアップの際により高いステータスを持つてした方が、最終的に数値以上の能力を発揮出来るようになる。しかしノルアは基本的にレベルアップが可能になった段階で、躊躇うことなく上げてきた。つまりステータスの累積が少なく、同じLv. 4の冒険者達と比べるとかなり弱い部類に入る。魔法としては相性がいいモンスターではあるが、実際のところ1対1でも攻撃を避けるのに全力を出している。3体以上を相手にするととなると、まず間違いなく手痛い傷を負うことになるだろう。

(となると、ステータス目当てに根元は叩かず、こうして分散している枝を切り落としていくのが良さそうですね。……でも、あまり刺激し過ぎると結局釣り出してしまいかも)

ノルアは思考し、目を横に向ける。

何の変哲もない壁、しかし妙にその辺りだけが新しく塗り直したかの様な継目があり、老朽化の跡も他と比べると少ない。

「……これは帰ってギルドに報告ですかね、思ったより余計な藪が多そうです」

ノルアはそう判断して、魔石を片手に帰り支度を始める。確かにステータスは欲しいし、この先を進めば間違いなく恩恵の昇華に繋がる危険は存在しているが、少し条件が悪い。こんな汚水に塗れた場所で大怪我でもすれば、それこそ致命的だ。なにより今日の様子を見る限り、アミッドはかなり自分のことを心配していた。最近は何やら落ち込んでいる事も多い。今は心労をかけるべきではないだろう。

(無茶はせめて輝夜さんと潜っている時にしましょう、勿体無いですが。そもそもその前提を忘れてはいけない)

彼女を泣かせることは本意ではない。急ぐ必要はあるが、焦る必要

はない。まだ1年近くは保つ筈なのだから、彼女に焦りを感じさせるべきではない。

「帰ります」

「へえ、もう帰るんだ。もう少し遊んでいけばいいのに」

「……私達はここで会いませんでした、言葉も交わしませんでした。そういうことでお願いしたいです」

「酷いなあ、そんな悲しいこと言わないでくれよ。せつかくこうして計画前に顔見に来たんだ。少しくらい話しようぜ、”化け物”」

「……………」

”はあ”と、ノルアはあからさまに溜息を吐く。

わざわざ話しかけて来ない様に、ここで帰るという選択肢を取ったというのもあるのに。関わりたくなかったから、見て見ぬ振りをしたというのに。

背後からのその声に、顔を向けることなく、鞆を背負う手を止めることもなく、言葉のやり取りだけを続ける。

「私は貴方の顔を見たくはありません、早々に立ち去って頂けると幸いです」

「ここで捕らえた方がオラリオにとってはいいんじゃない？」

「私にとっては良くありません」

「関係を疑われるから、かな」

「私の信用なんて、神々が適当なことを言うだけで崩れる様な脆い物です。例え貴方をこの場で捕縛したとしても、次の日には私は貴方方の一味にされていることでしょう」

「ここで見逃しても同じじゃない？むしろ見逃した方が問題でしょ」

「……正直、ここに来たのは悪手でした。ステータスという目先の欲に囚われて、貴方と言う地雷を踏んでしまったみたいですし」

「じゃあどうするんだい？」

如何にも面白そうに笑っている背後の男。

これだから神は困る。

これだから神は好きじゃない。

特にこういう類の神は、嫌いだ。

「貴方をここで殺します」

「へえ、君そういうこと言う子だったんだ。でもいいのかな？ここで柱が立ったら、明日から君は神殺しになるでしょ」

「なりませんよ、そんなこと」

「……嘘じゃないってことは、強がりなのかな？それとも精神的に殺すとか？神相手にそんなこと」

「それも勘違いです」

「うん……？」

「……そもそも、なんで何事もなく天界に還れると思ったんですか？」

「？」

「化け物に関わるつもりなんでしょう？」

「！」

その瞬間、背後の神から始めて動揺の意思が読み取れた。嫌な空気が充満していく、これはノルアが意図的に発しているものだった。普段は閉じ込めているその扉を、ほんの少しだけ、鍵を緩めてやっただけ。

「……まだ目覚めてないだろうに、神を殺せるっていうのかい？」

「恩恵なんて私に一番与えたら駄目なものだったと思います、今更ですが」

「まあ言い方を変えれば、二重に神の力を与えてる様なものだけどさあ」

「それで、どうされますか？ここで会ったことを無かったことにしてくれるのでしたら、それ以上は求めませんが」

「へえ、本当に見逃してくれるんだ」

「捕らえても面倒ですし、殺したらもう引き返せないですし。無難に終わるのならそれがいいです」

「オラリオとかどうでもいいの？」

「どうでもいい訳ではないですが、私を守ってくれる訳でもありませんから。私の立場を悪くしてでも、とは思いません」

「ま、それもそうか。愛着とか無さそうだもんねえ、隙あらば殺そうとしてくる街になんか」

「……………」

流石にそこまでは言っていないが、優先度が低いというのは間違っていない。あくまで自分の立場を悪くしない程度にしか動くつもりはないし、自分を犠牲にするほどの認識でもない。問題を解決したとて、それが感謝されるかどうかとも怪しいところだ。それにノルアが何かをせざとも優秀な冒険者の多いこの街は、勝手に問題を解決して、問題なく平和を取り戻せる。どこまで行っても不要な駒。ディアンケヒト・ファミアアさえ、ノルアが居なくとも回していける。本当の意味で彼女を必要としている場所など、この世界には一つしかない。「私を唆せばオラリオを破壊出来るとでも思っているのかもしれないんが……………」

「あれ、バレてた?」

「私の大元の地雷があることも忘れないで下さい」
「……………」

「私は所詮ただの枝です。ですが枝と言えど目的があつて伸ばされています。私が死ぬだけであれば問題ないかもしれませんが、その地雷を踏めば本体が来ますよ」

「…………確かに、言われてみればそうだね」

背後の神は何かに納得した様な声を出した。

そして満足したのか、期待に添えなかつたのか、彼もまた背中を向けて歩き始める。

「敵の敵は味方…………どころか、もっと大きな敵だったって訳だ。俺も死にたくはないからさ、今日は君の言葉に乗っておくよ」

「ありがとうございます」

「ははは、でもこれ普通に天界案件だよねえ。異界からの侵略者の先兵が来てる訳なんだし、神の力（アルカナム）が飛び交う大戦争に発展するかもしれないじゃん? オラリオとか言ってる場合じゃなさそうだよねえ、滅ぼすけど」

「別に地雷さえ踏まなければ大丈夫ですよ」

「教えてくれないの? その地雷」

「その地雷を踏む様なら、こんな世界滅んでいいと思ってるので」

「……なるほど、やっぱり手を出すべきじゃないさそうだ」

その言葉を最後に、その神は壁の向こう側へと消えて行った。きつとこれ以上はノルアが深く関わらない限り、向こうも関わって来ることはないだろう。

……さて、ここでの話をどこまでギルドに話すかと考えたが、取り敢えずは”地下にモンスターが居た”という所までにノルアは留めておくことにした。

魔石を提出して、そんな情報提供をするくらいでいい。余計なことを話せば、また変に疑われる。実は闇派閥と繋がっていた、なんて根の菌もない噂も昔は流れていた。それが再起するなんて、そんなのは絶対に御免だ。

「……アミッドに会いたい」

ただ平和に暮らせるのなら、それ以上のことなんて望まないのに。

1-1. 騒動の巻き添え

「ということ、暫くお休みを頂きたいと思えます。デイアンケヒト様」

「……お前という奴は、本当に」

引継ぎと仕事の分配、既存の作業の終了報告書に、数日の間に起り得るであろう問題の対処方法……大量の書類を持って部屋に入つて来た彼女が開口一番に発したその言葉に、デイアンケヒトはいつもの様に頭を抱えた。

「……またダンジョンか」

「はい、またダンジョンです」

「目的は？」

「ステータスを上げたくて」

「アミッドに許可は取ったのか」

「同行者のことを話したら渋々ながら認めてくれました」

「同行者……？」

「輝夜さんです」

「……そういうことか」

デイアンケヒトの顔から先程までの困惑の表情が消え、顎髭を触りながらも思考し始める。彼女は相当な実力者、経験もある、なによりノルアにとって本当に数少ない心から信用できる相手だ。彼女が一緒であるならば、大きな問題にはならないと思える。無茶をしても、止めることまではしなくとも、死なせることは決してないとも。

「……何日だ」

「一先ずは1週間お休みを頂こうと思っています。この際ですから幾つか新薬の素材も採取しておきたいので」

「金はあるのか？」

「普段あまり使いませんから、問題ありません」

「持っていくポーションは？」

「基本的な物は揃えてあります」

「万能薬を持って行け、金はいらん」

「……いいんですか？」

「ハッ、その新薬に対する先行投資だ。勘違いするでない」

「……ありがとうございます」

それ1つで家が建てられるという程の価値のある物を、ディアンケヒトはノルアのために手渡した。これがどういう意味であるのかを分からない彼女でもない。

「出発は？」

「明日の朝に出ようかと思っています」

「今夜はアミッドと話しておけよ、1週間も空けるとなればアレも寂しがるだろう」

「大丈夫です、最近は一緒に寝ているので」

「そうか………は？一緒に？」

「はい、一緒に」

「………いや、もう何も言うまい」

「？ええ」

そのことについてはもう流石に触れない方がいいと判断したのか、ディアンケヒトは特に言及することなく彼女を部屋の外に出す。

もう20近い女2人が床を共にする、果たしてこれは正常なのだろうか？双子の姉妹であってもベッドくらいは別にしては別にはいるのではないだろうか？ディアンケヒトにはその辺りがわからなかった。しかしノルアが孤独を感じているのなら、それは当然の話で、アミッドがそれを埋めるために付き合っているというのならまだ理解も出来るかもしれない。

「……まあ、良いか」

双方がそれで納得しているのなら。

………そういつた会話があつての次の朝。

ノルアが支度を終え、もう和服も着ておらず、フード付きのブカブカな上着を羽織った如何にも怪しいゴジョウノ・輝夜がファミリアの拠点に迎えに来た頃………何故か玄関の前に彼女は居た。

「何故、アミッドが………？」

「私も着いて行きます」

「……いや、駄目ですよ？」

「着いて行きます」

「深い層に潜るので危ないです」

「ノルアが守ってくれます」

「守りはしますけど……怪我させたくないですし」

「それはこちらの台詞です」

「ディアンケヒト様だって」

「許可は貰いました」

「仕事だって……」

「全部引き継いで来ました」

「流石に私達2人とも居なくなるのは……」

「そういった場合を想定した訓練の様な形です。いざという時の万能薬の使用も許可を頂いています。何の問題もありません」

「ディアンケヒト様……」

探索用の動き易い服装に着替えて、杖まで持って来て、もう行く気しかないと言わんばかりの様子。ノルアの反論にも事前にも予想して潰すつもりで考えて来たのか、バツサリと切っていく。

「ノルア、お願いします」

「アミッド……」

「私も連れて行ってください」

「……」

それにアミッドが本気をお願いをすれば、ノルアが断れないことも承知していて、少し卑怯ではあると自覚しながらも、彼女は目と目を合わせて言葉にした。見るからに動揺する彼女、そこに追い討ちを掛けたのはニヤニヤとそれを見ていた輝夜で。

「連れて行ってやれ、へたれ」

「輝夜さん……」

「守れる自信もないのか」

「それは……もしものことを考えると……」

「ならそのもしもが起きないよう必死になれ、ステータスを伸ばすに

は丁度良い荷物だろうが。いざという時には手を貸してやる」

「……分かりました」

「よしっ！」

ついに折れたノルアに、アミッドはガッツポーズを決めて輝夜にお礼をした。実際のところ、輝夜にとってもこうも弱々しいノルアの姿を見ることはかなり珍しく、アミッドの前ならばもっと見られるのではないかという好奇心もあつたりして。

「そういうことですので、ご迷惑をおかけしてしまいますが数日間よろしくお願い致します。【大和竜胆（やまとりんどう）】」

「その名はもう馴染みがない、だが人前で名を呼ばれるのも困るか。

……アリアとでも呼べ」

「アリア……？」

「……アストレアと、アリーゼ？」

「深読むな、適当に思い付いただけだ」

「承知しました」

とは言え、アミッドがパーティに入ったというのは決してマイナスな要素ではないことも当然ノルアは分かっている訳で。ノルアは拠点を出る前にもう一度アミッドに向かい合つて、目を合わせて、告げた。

「……アミッドは私が守ります。ですから、もし私に何かあつた時はお願いしますね」

「……当然です、ノルアの傷を癒すのは私ですから」

そんな2人のやり取りを見ていた輝夜は如何にも甘苦しい顔をしていて、完全に空気を破壊していた。

「それで、今回の予定はどうなっているのでしょうか？」

「予定も何も、20階層まで1人で戦わせるだけだが」

「20!？」

「ゴライアスは居ない筈ですし、18階層で休みも取れますから。何とかなる筈です」

「18階層まで戦い続けるつもりですか!？」

「癒してやれよ、治療師」

「これむしろ私のせいでハードになってしまいましたか!？」

「それとノルア、10階層まで右手を縛れ。言うまでもないだろうが、この女に傷一つ付けるなよ」

「はい、当然です」

「あとその目の布は縛りになっているのか？」

「一応、少し視界が悪くなっています」

「なら20階層まではそのままにしておけ」

「承知しました」

「なに承知してるんですか!？」

「怪我はお前の相方が治すから好きだけしろ」

「了解です」

「それも了解しないで下さい！私を心労で殺す気ですか!？」

この後、結局18階層まで縛りは続き、ノルアはアミッドに滅茶苦茶怪我を治して貰った。18階層に着く頃にはアミッドも流石に慣れ始めていたが、その過保護度合いが増していることはその場に居る誰もが気付いていた。だとしても反論なんて出来るはずもなかったが。

――

「ふっ!!」

『ゴアアッ!?!』

16階層、出口の見えるて来た頃合いで最後のミノタウロスの頭部を吹き飛ばす。ここに来るまでモンスター的大量発生なり妙に強いモンスターと鉢合わせるなり色々であったが、3人は無事ここまで来ることが出来た。

汗を流し、明確に疲労の色を見せるノルア。

いくらLv.4と言えど休憩無しで縛りを付けた状態でここまで戦い続け、輝夜から体力の回復の支援を受けてはならないとも厳命されていた。しかもアミッドだけではなく、全く戦う気がない輝夜の方

バーまで入る必要があり、常に走り続けながら広範囲のモンスターを狩っていく。もうここまでのモンスターの大半を殺したのではないかというくらいの働き振りだった。そんな彼女を見た輝夜も少しは満足しているみたいで。

「縛りを緩める事なく成し遂げたか、その根性は流石だな」

「ありがとうございます……」

「ゴライアスは居ない、体力を回復させてやれ。怪我はそこまで酷くない」

「もう！もう……!!」

アミツドの魔法が使われる。

すると直ぐ様に体力が元に戻り、傷もあつという間に消えていく。その即効性には見ていた輝夜も素直に感心し、ノルアも嬉しそうな顔を向けていた。輝夜も何度か彼女の治療を見たことはあつたが、それも昔の話。あの時よりも治療師として上達した彼女の魔法は、ノルアが本当に誇張していた訳ではなかったということを理解できるほど。

「……死人1歩手前まで対処出来るというのは本当だったか」

「ええ、私の魔法では精々3歩前が限度ですから。アミツドは凄いです」

「ノ、ノルア……!」

「だがお前も死人1歩手前の私のことを救っただろうが」

「魔法以外にも薬品に器材、私自身の血まで使って、更にそこに天運と輝夜さんの気力が乗ってようやくですよ。治療師としての私は少し優秀な程度です」

「と言っているが、相方としてはどうだ？」

「謙虚過ぎてはっ倒したいです。魔法だけで治療師が出来る訳ではありませんから」

そんな風に話していれば、ゴライアスの居ない無人の17階層を通り、3人は漸く18階層に辿り着いた。

自然が溢れ、空のように見えるくらいに天井を埋め尽くす青水晶。モンスターの出現しない安全階層でありながら、この美しい世界の光景。

「……変わらん、ここは」

「ええ、本当に」

何か感傷に浸りながらそう呟く輝夜に、ノルアも一つ頷く。彼女にとつてここは、思い出深い場所だ。同じように生き残ってしまったエルフの少女もまた、今でもなおこの階層に定期的に来ていると彼女は知っている。

「……少し、寄ってもいいか？」

「ええ、元々リヴィラに入るつもりもありませんでしたから。この街に私が来ると色々大変なことになってしまうので」

「はっ、嫌われ者は大変だな」

「……一応、テントの準備はしてありますよ」

「ありがとうございます、アミッド」

「とは言え、流石に食い物は買った方が楽だな。金はあるか？」

「ありますよ。私が持っていては仕方ないので、輝夜さんに預けておきますね」

「……軽々しくこんな大金を預けるな、たわけ」

「相手が信頼できる方ですから」

「それとアリアと呼べ」

「それこそ完全に忘れてました」

輝夜が寄りたかった場所というのは、この18階層のリヴィラの街から少し離れた場所にあった。

水浴びがよくされている美しい水泉を超え、森の奥深くへと入り込み、深く入り始めたそんな木々の間に隠れるように、それは存在している。多くの古びた武器が突き刺さった小さな小山、誰もが見ただけではない。そんな場所であるからこそ、むしろそんな物があったとしても不思議ではない。ここはあくまでダンジョンの中なのだから。

「……全く、なんとも品のない墓標を作った愚か者も居たもので」

「……………」

今ではもうめつきり見なくなった昔の彼女の口調が戻る。かつては被つていると言われていたその口調も、今では別の物を隠すために

使われているということだ。

ノルアもアミッドも、多少ではあるがアストレア・ファミリアのこととは知っている。むしろノルアに関しては何人的にアストレアとアリーゼと言葉を交わしたことだってある。それでも助けることが出来たのが一度も話したことなかった輝夜であるのだから、縁というのは不思議な物。

「……正直に言えばな」

「はい」

「今でも信じられん」

「……」

「朝起きればひよっこり帰って来るのではないかと、何度も思った」

「……似た境遇の方は、皆さんそう言われます」

「そうか……まさかあのアリーゼが死んで、未熟者と半端者が生き残れるとは。本当に何が起きるか分からないな」

アミッドが摘んできた花を、輝夜は供える訳でもなく墓標にぶち撒ける。きつともう1人の生き残りのエルフであるなら、少しは丁寧に供えたのだろう。今も枯れた花の束が残っている。しかし輝夜は違う。自分達の関係で、そんな余所余所しいことをするのも違うだろうと。

「聞けよ馬鹿共、私はこの女を助けるからな。その末に世界が滅んだところで知ったことか」

「輝夜さん……」

「正義も理想も既に散ったが、恩くらいは返さねばならん。……区切りは付けてきた。もしオラリオを敵に回すのなら、望むところだ」

最後に輝夜は、かつての団長であるアリーゼが使っていた剣に目を向ける。あの頃の自分が敵わないと悟り、そして認めた、炎の様に輝いていた彼女に向けて。

「……お前に着いて行った馬鹿の一人だ、火に飛び入ることくらい許せ」

その先に破滅しかないと分かっている。

それでもこの女の力になってやりたいと思っただ。世界の敵にならざるを得ない女を、少しでも幸福に死なせてやりたいと思っただ。

「……今からでも、私から離れて彼女のところに戻れるんですよ？むしろそうした方がいいとすら思います」

「どうせお前は直ぐに死ぬだろうが。あと数年待たせたところで大して変わらんわ」

「そんなこと……！」

「アミッド」

「っ」

「お前が満足出来る死に様を迎えるまでは付き合っただ。その道中で冒険者を斬る必要があるのなら、してやる。精々上手く利用すればいい」

「……はい、頼りにしています」

ノルアのその言葉に、輝夜はニツと口角を上げる。そんな2人の姿を見ていたのはアミッドだ、アミッドとノルアの間にある関係とはまた違う信頼感。なんだかそれに嫉妬すら覚えてしまっただ、不満気に視線を逸らす。

何故2人とも、長生き出来ないことが前提なのだろうか。アミッドは本当に、これっぽっちだっただ、ノルアを早死にさせる気なんてないのに。

それから輝夜に続いてノルアとアミッドも彼等に花を手向けると、3人はまたリヴィラの街の方へ戻り始めた。

テントも食料もあるにはあるが、滞在時間を考えるともう少し物資に余裕が欲しい。そのためには多少高くともこの街で買っておく方が楽というもの。……当然、ノルアがこの街に入ればそれはもう嫌というくらいに厄介な絡まれ方をされてしまうので、入るのはアミッドと輝夜だけになる。それでもリヴィラの近くにテントを張っておいた方がいいと言う時に対処ができるので、ノルアもここまで一緒に来ていた。

……異変に気付いたのは、その時だった。

「あく……」

「ノルア？どうかしましたか？」

「ちよつと不味いです」

「……何が見えた？」

「アミッド、怪物祭の日に戦闘した蔓型のモンスターのこと覚えていますか？あの妙に強かった緑色の」

「ええ、まあ。ロキ・ファミリアの皆さんも別箇所に対処していたようですね」

「あれが今から大量に発生します」

「大量に!?今から!?!」

「具体的にはいつだ!!」

「大体15秒後です」

「全部手遅れ!!何も出来ないのですが!?!」

「もつと早く気付けなかったのか!!」

「そんなに便利な能力ではないので……あ、来ます」

「ど、どど、どうするんですかあ!!」

突然の揺れ、突然の咆哮。

ノルア達3人は今回ばかりは本当に何の関係もなく……巻き込まれた。

12. 大和の申し子

「な、なんなんですかこの数!?!」

「oooooooooooo!!!」

「しまっ」

「余所見をするな!たわけ!!」

ゴトリ、とモンスターの首が落ちる。

太刀筋一つ見えることのない輝夜の一閃、アミッドに襲い掛かった2体のモンスターの頭部はその皮膚の硬さを僅かにも活かすことが出来ぬままに切り落とされた。

「ふっ!!」

「oooooooooooo!!!?!?!?!」

一方で大きな爆発音を立てて派手に頭部を吹き飛ばすノルアの踵落とし。戦闘スタイルは違えどやっている事が同じなのは、それが最も有効であるという事が理由としてあるのだろう。

ノルアの予知通り、突如としてリヴィラの街を取り囲む様にして出現した蔓型のモンスター達。その数は目視出来るだけでも100以上。推定Lv.3辺りのモンスターがこの階層にこれだけ出現するというのは、普通に考えればあり得ない事だ。それもこうまでタイミングを合わせて。

「ノルア!敵の目的は分かるか!」

「…………輝夜さんの予想通り、恐らく敵に調教師(テイマー)が居ます。詳細な目的は分かりませんが、相手は闇派閥(イヴィルス)で間違いないかと」

「闇派閥!?それは事実なんですか!?!」

「怪物祭の後に地下水路を探索したのですが、そこでこのモンスターと闇派閥に所属していると思われる神と言葉を交わしました。……あ、これバレると面倒なので秘密でお願いします」

「何やってるんですか貴女は!?!」

「…………なるほど、また何か企んでいるという事だな。相も変わらずネチネチネチネチと!」

近寄る端から頭を切り落とされるか吹き飛ばされるモンスター達。アミツドを守る様に陣を取っているが、リヴィラの街からも多くの悲鳴が聞こえて来る。このままでは多くの犠牲が出ることになるだろう。

……加えて、ここから見えるだけでも水辺から崖を登って街を目指している数百のモンスター達。街が全滅、果たしてそれだけで済むのだろうか。ノルアだけではなく、輝夜もまた顔を強張らせた。

「ノルア！ 【戦場の聖女（デア・セイント）】をリヴィラまで運べ！ 残存戦力を掻き集める！」

「分かりました！」

「結局姫抱き！」

「道は私が開く！ 全速力で着いて来い！ それと目隠しを外すなよ！ フードも被っておけ！ 他の邪魔になる！」

「はい！」

屠る、屠る、凄まじい速度で前方のモンスター達が灰へと変えられていく。ノルアに抱き抱えられながらもそんな光景を見ていたアミツドは、その僅かにも無駄のない殺戮に軽く恐怖すら覚えてしまう。

かつて正義の旗のもと、アストレア・ファミリアで活躍した冒険者の1人。結末を予知したノルアが強引に地下に潜り、なんとか助け出した生き残り。当時でさえ格上に手傷を負わせられるほどに卓越した剣技を持っていた彼女であったが、利腕を無くし、その技術も実力もあの場所に落としてしまったのではないかとアミツドは思っていた。

……なんのことはない、とんだ勘違いだ。

彼女が利き腕を無くしたくらいで落ち零れる様な人間であるのなら、彼女にとつてもどれほど良かった事か。

「……あの、ノルア？」

「はい、なんですか？」

「彼女は、その……どれほどの実力を？」

「ステータスだけで言えばLv. 6です」

「なつ、L v. 6!?アイズさんより上なんですか!？」

「それくらいの力を付けなければ倒せない相手が居たそうですよ」

「それって……」

「一度極東に帰ったのも、実家の秘技書を強奪するためだそうです。勿論、個人的な清算もあつたでしょう。……ただ、今の輝夜さんはロキ・ファミリアの幹部達にも匹敵すると私は思っています」

「そ、それほどですか……」

「元々不意打ちとは言え、L v. 7の”静寂”に傷を与えられる人ですから。ステータス以外は元から完成されていた様なものです」

そんなことを話している間にも、ただ一振りでも前方に立ち塞がった三体のモンスターをぶった斬る輝夜。片腕を失ったことで得意としていた居合は殆ど機能しなくなってしまったが、代わりに彼女は片腕でも出来る剣技を突き詰めた。今回の極東への旅というのも、ノルアの言った通り、実家を含めた全ての家の家伝の秘技書を強奪し、その自作の剣技を究極にまで昇華するための総仕上げという面が大きかった。

だからこそ朝廷そのものから兵を出される程の一大事になってしまったが、輝夜はそれすら切り捨てた。否、それすら利用して剣技を極めた。加えて輝夜は忘れていなかった。結局レベルを上げる際に最も効率が良いのは……極限まで研ぎ澄まされた人間同士の殺し合いなのだ。

「つ……これはまた厄介な」

「え、こ、今度はなんですか?」

「輝夜さん!モンスターの親玉が来ます!ただし調教師とは別です!」

「……それは奴等に任せる!こつちに来い!負傷者の手当てが優先だ!思っていたよりも状況は悪くない!」

「悪くない……?あ、あれは」

「ああ、なるほど。これは確かに、状況は悪くないですね。……私以外」

ノルアの半端な予知の中ではその姿は見えていなかった、偶然?に

もこの場に居た彼等の姿がようやく目に映り始める。

……ロキ・ファミリア、それも幹部2人を含めた上位の面々。この騒動の中、彼等は率先してモンスターを狩り、リヴィラの人々を守り続けていた。アミッドの表情が明るくなる。これならばノルアもアミッドも、普段している様な仕事をしていればいいだろう。下手に目立つ必要もない。

「治療を開始します!!」

「周りのモンスターは私が狩る！好きにやれ！」

「お願いします！」

その瞬間、2人の目の色が変わったのを見て、輝夜は笑った。

治療師としての目、冒険者とは違う人を癒す場所で戦う者達の目。この場こそが、彼等にとつての本当の戦場だった。そしてこの程度の戦場は、あの闇の時代を乗り越えた2人にとつて、然程難しいものではない。

「詠唱開始します！先に重傷者を！」

「毒性なし、呪詛なし、疲労軽微、出力「中」で設定を。『地理焼却（Fomalhaut）』」

「うおっ!?な、なんだあんたら!?!」

「【戦場の聖女（デア・セイント）】!?なんでここに!?!」

「って、お前【白焔】じゃねえか!?触んじゃ……!!」

「黙って下さい」

「ぐっ!?」

怪我人が集められた区画に突如として現れた2人が、その場に居る人々の意向を完全に無視して治療をし始める。中央で詠唱を始めるアミッド、同時に全体の傾向を見て彼女に魔法設定に使用する主要情報伝えるノルア。

そんな彼女達を見て人々が困惑することは当然で、何よりノルアの姿を見て一部の者達は思わず殴り掛かる程に軽い混乱をしても居た。

……しかし、そんな男の1人にノルアは鳩尾に向けた膝蹴りをお見

舞いする。蹲る男、突然の強行に呆然とする周囲。アミッドも眉一つ動かさない。

「今から治療を行います、重症者は挙手を。30秒後のアミッドの魔法で大半は回復しますが、重傷者は私が治します」

「お前つ……ぐはっ！」

「治療に必要なこと以外の発言は一切許可しません。それほどに私が気に食わないのであれば、今直ぐにこの場の全員を昏倒させてから治療を行います。他に何か」

「……」

「それでは重症者は挙手を……速やかに！時間がありません！治療を終えた者から戦線復帰なさい！足が千切れようと腕が千切れようと即座に修復します！とにかく死人を出さないよう徹底なさい！！」

「……は、はいっ！！」

リヴィラのならず者達を、その凄まじい威圧感で以て纏め上げる。ノルアもアミッドも知っている、ここに住んでいる者達は言葉だけ素直に動く様な者達ではない。彼等を動かすのに必要なのは腕っ節、何より彼等自身がそれを上げてこの街で生きている。ならばノルアがこの場で必要な振る舞いもそれだった。

死んでしまえばアミッドでさえもどうしようもない。だが生きてさえいれば絶対に死なせることはない。そしてそのためなら鬼でも悪魔にでもなる、それが治療師だ。後の評判など一切気にしない、ただ目の前の人間を死から遠ざける。2人は今日までそうして癒して来た。死物狂いで、生かして来た。

「す、すげえ……本当に治っちまった」

「ま、まじかよ、腕が生えたぞ……」

「お、俺なんて焼かれてると思ったら腹の穴が無くなって……」

『早く立ちなさい！』

「……はいっ！！」

『武器を持って走りなさい！戦わなくとも構いません！負傷者を優先的に避難させなさい！そして叫んで私達を呼びなさい！！』

「……は、はいっ！！」

『それと基本は5人1組！単独行動はしない！いいですね！』

「「分かりましたあ!!」」

『なら行きなさい!!』

「「行つてきまあす!!」」

治療時間僅か1分、23名全員の治療が終わった。

使用した魔力は最低限、このペースならばあと100人近く来たところで対処出来るだろう。アミッドは患者が全員再び戦場に走っていった後も薄く魔法を展開し続け、何かあっても直ぐに対処出来るように用意している。軽い負傷程度ならば数秒で治すことが出来るくらいだ。それほどに彼女の魔法は凄まじい。

「輝夜さん！戦線の状態は!？」

「あ、ああ。一先ず問題ない。そろそろロキ・ファミリアが親玉を討つ」

「でしたら私達は調教師の所に行きましょう」

「?それもロキ・ファミリアに任せればいいのではないか？」

「劍姫が不味いです。問題ないとは思いますが、一応行きます」

「っ、アイズさんが!？」

「……やれやれ、その場合それとやるのは私だろうが。まあいい、ほら走れ」

ノルアが見た一瞬の景色。

もしかすればその後他の団員達からの支援があったかもしれないが、そこまでは見えなかった。ならばもしもの場合に備えて走る、走らないという選択肢がそもそも存在しない。完全に治療師としての目になっっているノルアのその言葉に、輝夜は特に断ることもなく頷いた。

……輝夜自身、彼女のそういうところによって救われたのだから。無下に出来る筈もなかった。

「ただし人前で名前を呼ぶな！良い加減に慣れろ！」

「あ……はいっ！アリアさん！」

「全く……」

そういうところだけは、変わらないが。

13. 劍姫と劍技

アイズ・ヴァレンシユタインはLv. 5の冒険者だった。

とある目的を持って強さを求め、ロキ・ファミリアの一員として今日まで戦い続けて来た。

そんな中で現れた目の前の女は、その単純に凄まじい身体能力によってアイズがここまで積み重ねて来た物を悉くに拵じ伏せてくる。人には使わないと思っていた『エアリアル』をしようしても互角、いや互角にも届かない。一振り一振りが致命的で、それほどの力を持っているというのに動きもまた早い。ならば技術が無いかと問われれば全くそんなこともなく、肉体的な耐久力さえレフイーヤ・ウイリデイスの魔法を片手で食い止める程に人離れしている。

(私よりも……強いっ!?)

「便利な風だな、『アリア』」

「っ、どこでその名前を……!!」

そして何よりアイズの心を揺さぶっていたのは、目の前の正体不明の女が先ほどからしきりに自分を呼ぶその名前についてだ。その名前は他ならぬ自分の母親のもの、それを知っているのはロキ・ファミリアの幹部達を除いて他には居ない筈。それなのに何故この女は知っているのか、そもそもこの女は一体何者なのか。アイズが取り乱すのも仕方のないことであった。彼女はそれほどの過去を抱えているのだから。

(この一撃で……!!)

風の魔法を使用した超高速移動を利用した変速攻撃、敵の完全な死界から繰り出す全力の一撃。

「……ほう」

(っ!?)

それすらも、避けられる。

「人形のような顔かと思えば……存外動くな」

「しまっ!?!」

敵の大剣が粉々に砕け散るほどの一撃。

なんとか間に合ったガードの上から、まるで爆発の様な音を響かせて吹き飛ばされる。ロキ・ファミリアの幹部であるガレス・ランドロックを思わせる様なその超怪力は、時にはどんな小細工よりも恐ろしい。まさにそれを体現したかの様な存在は、壁に叩きつけられ、剣を落としたアイズに歩き寄る。

(……動かない)

頭を打ったのか、身体が麻痺しているのか、そもそも腕の骨が折れているのか、それすら分からない様な意識の中で、アイズはなんとか立ち上がろうともがき苦しむ。しかし彼女の身体は動かなかつた。ただ近寄って来る女の姿を、その眼に映し出すだけ。

「はっ、これはこれは……技を試すには打って付けの獣だな」
「!?!」

だが次の瞬間、アイズとその女の前に3つの人影が降り立った。

……直後、反応する身体。鳥肌が立つ。そして同時に、困惑と混乱をする。なぜ? どうして? それが言葉に出てこないくらいには、頭の中で色々な情報が巡っている。

「治療します。後は任せてもいいですか? 『アリア』さん」
「っ!?!」

「構わん、早く治してやれ」

そして発されたその名前に、アイズの頭の中は今度こそ完全に小爆発を引き起こした。というかアイズを打ち倒した女でさえも、明らかに困惑し、混乱している様だった。

ここからアイズ・ヴァレンシユタインの脳は、目の前の光景を記録するだけの機械へと変わってしまう。

「アリア、だと……?」

「なんだ、他人の名前にケチを付ける気か? 里が知れるな」

「……似ても似つかん、偶然か」

「まあ貴様の生まれ里など興味もないが……見たところ、剣姫が目的なようだな」

「だったらどうした」

「こうして話している5秒もあれば、あれは人を癒すぞ」
「!?」

輝夜の言葉通り、背後ではアミッドによって怪我が完全に治療されたアイズの姿がある。女があればほど戦闘を続けて負わせた怪我が、ここで僅か一言二言交わした程度の時間で癒されてしまっていた。

……呆然とする女とアイズ自身。

ポーションでさえももう少し時間がかかるし、治した直後は違和感だつて残るというのに。アイズの身体には本当にそれすら残っていない。オラリ才最高峰の治療師というのは、僅かな余裕すら与えてはいけないほどに、戦場においては影響強かった。

「……っ、殺すなら奴からか」

「それが出来ればな」

「容易いことだ」

輝夜がゆっくりと刀を抜く。

女はアイズとの戦闘で剣を無くしてしまつたが、その剣以上の硬さを持つ肉体を持つて構えを取つた。

それを見てアイズは慌てて意識を戻して立ち上がるが、即座にノルアが引き戻し、アミッドが固定する。流れる様な動きで、息のあつた動きで、まるでいつも騒がしい患者達に彼等がしているように。

「は、離して……このままだとあの人が！」

「問題ありません」

「でも……！」

「あの方は……強いですから」

「え？」

アイズのその反応とほぼ同時に、彼等は走り出した。

拳と刀のすれ違い、流れた血は女の物。拳を作つた左腕をなぞる様にして傷跡が残り、刀に付いた血を輝夜が振り飛ばす。

「この程度か」

「っ、調子に乗るな……!!」

並の冒険者であれば一撃で粉砕できるほどの破壊力を秘めた拳の連打を、まるでその全てを読み切っているかの様に余裕な表情でなら

りくらりと避け、その合間合間に刀を差し込み確実に傷を与えていく輝夜の姿。

彼女の刀は時には目に見えない速度で腹を抉り、時には蛇の様な変則的な動きで女の腕を喰らっていく。

床を崩すために足を振り片足を振り上げれば、その振り上げた方の足を斬ってから距離を取り。当てるために掴み掛かろうとすれば、拳を開いた瞬間に指の一本が飛んでいく。

「……すごい」

アイズはそんな彼女の姿を、ジツと見つめていた。自分を負かした女を、ほとんど一方的に追い詰めていく女の剣技。ステータスもある、それは十分に分かる。けれどなにより彼女の剣を扱う技術があまりにも常軌を逸していた。モンスターを狩るためだけの剣では、あそこまでのものは生み出せない。あれほど人を追い詰められない。あの件は間違いなく人に向けられるために生み出された物が源流にあった。そしてそれを究極の域まで昇華させられたからこそその結果が、正に今日の前にある。

「チイツ！第一級冒険者……Lv. 6か!!」

「……物足りんな、所詮は獣か」

「っ」

振われた右足を下からの掌底で浮き上げ、残った左足を払って宙に浮かせた輝夜。それに対して即座に身体を捻らせ、女は反撃の回し蹴りを叩き込もうとする。……しかしそれは悪手であると、ノルアは知っている。その様な大技を叩き込むには、あまりにも大きな隙が生まれてしまうからだ。

剣技だけではない。体術にも当然のように秀でている彼女に対して、それはあまりにも悠長が過ぎた。

「擬・一閃」

「なっ!!?」

右足を使った足払いの格好から、身体の回転を利用した擬似的な居合をその腹部に見舞う。咄嗟に直撃地点を右手で庇う女、アイズの攻撃を受けても殆ど崩れることのなかったその肉体が、肉を断ち、骨を

断ち、抵抗少なく切り裂かれていく。

「まだだっ……!!」

それでもなお、女は痛みにも身体の姿勢を崩すことはなかった。痛み分けを狙い、輝夜の頭部を吹き飛ばすことだけを考え、右手と腹部を犠牲にして防御に転じることを拒絶する。刀という武器は打撃能力に乏しい、もしこれが普通の剣で女を斬り付けると同時に吹き飛ばすことが出来ていれば、ここで間違いなく輝夜の勝ちは確定していただろう。

「ノルア」

「はい」

「っ!?!」

……まあ仮にそうだとしても、次の一手で勝負が決まっていたのだから、特段大きな問題ではなかったのだが。

『『人理焼却 (Fomalhaut)』』

”黒色”の炎を纏ったノルアの拳が、右足が輝夜の頭部に当たるより先に、女の腹部へと突き刺さる。生じる爆発、吹き飛ばされる肉体。皮肉にも先ほど女がアイズにしたように、今度は女の方が対面の巨岩に激突した。

「やれやれ、その色の炎を眼前で見せられるのは肝が冷えるな」

「……………」

「……………?どうした、ノルア」

少しの冷汗を垂らしながら、輝夜はゆっくりと立ち上がる。しかし今拳を放った筈のノルアは、何故か困惑したように自分の拳を見つめている。あの女を殴り付けた、その拳を。

「指が折れました」

「……………なに?」

「彼女、人間ではないみたいです。しかし爆発はしたので、確かに人としての要素は持っている様ですが」

「……………」

瓦礫をかき分けて、女が立ち上がる。右腕を切り裂かれ、腹部に深い傷を残し、更に皮膚が破裂でもしたかの様に弾けた衣服と共に赤く

染まっている。

……だが、それでも女は無表情に立っていた。

まるで痛みなど殆ど感じていない様に。体液を垂れ流し続けながらも、傷跡を庇う様な仕草も一切することなく。

「流石に分が悪いな」

「……貴様は何だ」

「それはこちらの台詞だ。……何だ、その女は」
「っ」

わざわざ夥しい程の体液を垂れ流す引き裂かれた右腕を使ってノルアの方を指差す女。言いたいことは分かる、恐らくこの街のどの陣営に所属している、どんな人間でも神であっても、初めて目にすれば同じことを言葉にするだろう。

それが例え、オラリオにとって明確に敵であると判断される様な相手であっても、それは変わらない。事実そのことを、地下水路で顔を合わせたあの男神も言っていた。

「貴様は……貴様だけは、滅ぼさなければならぬ」

「……………」

「何故その様な女がのうのうと生きている。分かっているだろう、その女はこの世界における明確な悪だ。ダンジョンも人間も天上すらも関係がない、何をどうしたところで排除しなければならぬ存在のはずだ」

知っている。

聞き飽きた。

それでも俯き視線を逸らすノルアのその姿は、分かっているてもその事実を直視出来ない自分の感情を明確に表している。

「だからどうした」

「？」

「っ」

「それを飲み込んだ上で、私はこの女に力を貸してやると決めている。正義だ悪だのと押し付けがましい上に胡散臭い……恩人の願いを踏み躪らなければ実現出来ないような事ならば、私はもうそんな物要ら

ん」

「か……アリアさん……」

そう断言した輝夜に対して、苦々しげな顔をして女は睨み付けた。色々と言いたいことはあるが、こういう輩には言葉での説得は通じない。なぜなら既に覚悟というものが固められてしまっているから。かと言って先の通り、今の状態では戦闘力でも敵わない。今この場で何か出来ることもなく、むしろ長居は無用だった。

「……アリア、忘れるなよ。私などより先に殺さなければならぬ者が今お前の目の前に居るということを。手遅れになってからではどうにもならんぞ」

「っ！」

「あ？アリア？なんだ、私のことか？」

「お前ではない。……女、次に会った時には確実に殺す。自ら死を選んでくれるのであれば、私としても助かるのだがな」

その言葉を最後に、女はその異常な身体能力を持って全速力で崖から飛び降り、水中へと沈んでいった。それに気付いたアイズが立ち上がり追い掛けようとしたが、それも手遅れ。落ち込んでいるノルアはともかく、輝夜もまたそれを追い掛けるつもりはなかった。

それよりも彼女は背後を向き、ずっとこちらを見ていた2人に対して声を掛け？。

「見学は気が済んだか、ロキ・ファミリア」

「！」

「……やはり、気付かれていたか」

「フィン……リヴェリアも……」

「おい、ノルアを隠せ。モンスターはともかく、人間からこいつを守ってやれるのは私達だけだ」

「は、はい……！」

「……………」

この世界は敵だらけ。

否、この世界に対してノルアだけが明確な敵。

それに肩入れするということは即ち、この世界を仇す事と同義であ

ると。それを本当の意味で理解している者達が、今こうしてダンジョンの中で、ノルアの目の前に現れてしまった。

14. 眷属達の苦痛

18階層のリヴェイラの街。

街を襲撃した調教師は撤退し、暴れていた親玉も討伐された。街全体に潜伏していた数多のモンスター達も冒険者達の手によつて次々と数を減らし、着実にこの戦いは終わりへと向かっている。

……しかし、そのような中でも今この場所だけは空気を凍らせる様な極度の緊張感が支配している。段差の上から見下ろすロキ・ファミアの幹部であるフィン・ディムナとリヴェエリア・リヨス・アールヴ。そんな彼等からノルアを守るようにして立つ輝夜とアミッド。少し離れた所からそんな彼等の様子を見守っているアイズは、自分がどう動くべきなのか分からず、ただただ困惑していた。……渦中のノルアは、顔を俯かせ、目を背ける。

「まず最初に、君は誰かな？ 僕の記憶が正しければ、この街に君の様なLv. 6は居ない筈だ」

「アリアだ、つい先日この街に来てな。別に珍しい事でもあるまい」

「馬鹿を言うな、外界にそれほどの実力者が居るのであれば話が聞かえて来ない筈がない。仮に姿を隠していた実力者だとしても、背後に隠している彼女と意思疎通が出来過ぎている」

「ほう、それはどちらの意味での話だ？ 薄情者」

「……どちらの意味でも、だ」

”薄情者”

輝夜が言い放ったその言葉に、リヴェエリアは顔を歪ませる。輝夜は知っていた、目の前のハイエルフの苦悩を。高潔であるが故に抱える事となった矛盾を。輝夜はその末にこちら側に立つことを選べた人間だ。反して目の前の女は、こちらに立つことを選べなかつた人間だ。恩よりも世界を取った。自分と彼女を分けている点は、ただそれだけだ。

「それなら質問を変えよう。何故君達がここに居るんだい？」

「偶然だ、冒険者がダンジョンに潜ることの何がおかしい」

「何が目的で、という話だよ。滅多にダンジョンには入らないアミツ

ドを連れていけるとなると、多少怪しむのは当然だろう?」

「ち、違います!それは私の我儘で……!」

自分の存在のせいで余計な疑いを掛けられていることを悟ったアミッドが、慌てて反論しようとする。しかしそんな彼女に伸ばされた手はノルアのものだった。言葉はそれだけで十分だと、笑みを向ける。

「ステータスを上げに来ました」

「……………」

「ノルア……」

「そろそろ今の器では足りなくなってきたので、その補強の為です。アミッドはそんな私を心配して着いて来てくれただけです。……それをどう捉えるかは自由ですし、どれだけ私を疑っても構いませんが、その私の悪評にアミッドを巻き込む事だけはご容赦下さい。お願いします」

「……………」

それまで俯いていた顔を上げ、その言葉だけは目を合わせてしっかりと伝える。そんな彼女にフィンは表情を変えずに口を閉じ、一方で隣のリヴェリアは奥歯を噛み締めて杖を握る手に力を入れた。

2人の記憶の中の彼女と、変わらない、変わっていない。これほどに異質な存在感を持ち、2人の経験や勘がこれでもかという程に明確な危険を伝えてくるような、間違いのようなない邪悪であるにも関わらず。その言葉と行動だけが、どうしようもなく誠実で愛情深い。

目に付けている目隠しは、恐らく自分の目を相手に見せないためのものだろう。顔を隠しているフードは、少しでも自分の存在を周囲に広げないためのものだろう。彼女達がここに来て冒険者達の治療を行なったという話も知っている。自分達よりも早くこの場に来て、アイズを助けていたということも、しっかりと自分の目で見ていた。

(……気持ちが悪い)

きつと闇派閥の幹部達が街中で子供や老人に優しくしているところを見掛ければ、正に今フィスが抱えている感情と同じ物を得ることが出来るに違いない。

それを擁護する2人も受け入れ難い。

自分達が悪のような立ち位置にされているということも、気に入らない。目の前の人間はそれこそ、それ以上にどうしようもない悪鬼であるというのに。……本当に白々しい。

「……ふう」

しかしフィンも理解している、この女を前にした時に本来の冷静な思考や感情を働かせる事が出来る様な人間は、自分を含めても存在しないということ。今抱えているこのどうしようもない不快感も、嫌悪感も、全てが影響されていることによつて生まれている感情だ。

……だから一度息を吐く。あくまで事前に考えていた自分の思考通りに、過去の記憶の中にある自分が抱いていた思いを引き出し、その他全ての感情の一切を殺して判断を下す。信じられるのは過去の自分であつて、今の自分ほど信用出来ないものはない。

「アイズ、帰るよ」

「え？あ……うん……」

「リヴェリア、君もだ。……一先ず、今回の件については礼を言うところ」

「恩を忘れるなよ。私ではなく、こいつにな」

「……遠征についても後日連絡を入れさせる。詳細はその時に伝えるから、頼んだよ」

そうして動かないリヴェリアの肩を叩き、その場から去っていくフィン。リヴェリアは最後にもう一度だけノルアに顔を向け、一度だけ目を合わせると、直ぐに見ていられずに目を閉じて逃げる様にフィンを追い掛けた。アイズもまたチラとアミッドの方を見たが、直ぐにその隣に居た彼女に目が言つてしまい、明らかに眉を顰めると2人の後を追いかけて行く。

……残つた3人は、とてもではないが笑つて言葉を交わせる様な状態ではなかった。関わりと決めた時からこうなることは予想できていたことではあるが、それにしても改めてノルアのあまりに悪い現状を思い知らされる。

「やれやれ、大変だな。嫌われ者というのは」

「……ご迷惑をお掛けしました」

「お前から掛けられる迷惑など全て許容の範囲内だ。それに顔を合わせた事で確信も出来た」

「確信、ですか……？」

「少なくとも、今のロキ・ファミリアにお前を殺す準備は出来ていない」

「！」

「どう殺せばお前の中のものを解き放つ事なく済むのか、それ以前の話しだ。そもそも奴等自身にお前を殺す為の意思統一が一切出来ていない。それでもとなれば勇者（ブレイバー）の独断でやるしかないが、あの男にそんなことは出来ん」

彼の目的を知っているのであれば、そんな直接的なことは絶対に来ないと分かる。だから確実に直接的に殺しに来ることはなく、何かしらの大義名分を作り出す算段を正に立てている頃だろう。ノルアが抱えきれなくなれば、女神ロキが言った様に正面から潰しに来る。しかしそうなれば犠牲は免れず、そこまで気長に待つ筈もない。そして今はまだ、その算段が組み立てられてはいない。

「運が良かったな」

「……闇派閥がこのタイミングで活動を再開したことがですか？」

「そうだ、少なくともお前に構っていられる余裕はなくなる。お前は危険度は大きくとも、緊急の対応を要する事ではない」

「……なんと言うか、闇派閥と同等の扱いをされるとするのは、流石に心に来ますね」

「お前が善人である事と、お前が脅威であることは別の話だからな。どちらが先であるかなど他の者には関係がない。……私達も帰るぞ、長居は不要だ」

輝夜に手を引かれて、ノルアは無理矢理に動かされる。立ち止まって俯くから駄目なのだ。他人が思っているより、周りが見えているより、むしろ人並み以上に感情深い彼女は、表面に現れているより3割り増しの感情を抱えていると輝夜は考える。

そして、その一方で同様に暗い顔をしているアミッドについては、

輝夜は触れない。それは彼女自身で受け入れなければならぬ問題だからだ。今日までノルアの気遣いによつて有耶無耶になっていたそれに、彼女もそろそろ向き合わなければならぬ。

「そろそろ冷静になったかい？リヴェリア」

「……すまない、やはり取り乱した」

「君を責めるつもりはないよ、僕もかなり影響されていたからね」

「リヴェリア……っ!？」

先程の場所から少し離れた空地で、フィンとリヴェリア、そして2人を追つて来たアイズが立ち止まる。フィンに声を掛けられ、その場で口元を押さえながらしやがみ込むリヴェリア。そんな彼女にアイズが声を掛けようとすれば、彼女は咄嗟にそれを制して物陰へと隠れる。……アイズはこんな彼女の姿は初めて見た。ファミリアの仲間とは言え、人の目の前で胃の中ものを吐き出すリヴェリアの姿というのは。

「はあ……はあ……」

「……やはり、もう限界か」

「リヴェリア、大丈夫……?」

「ああ、問題ない……」

リヴェリアほどのエルフが、なぜこうまでなっているのかは分からない。ただ原因が先程アミッドの隣に居た彼女だという事だけは分かる。アイズにとつても今は余裕がない。自分のことをアリアと呼んだ女、自分の実力の不足を痛感させられた。しかし周りに自分よりも余程余裕のない人間が居れば、少しは冷静になつてしまうものだ。フィンでさえも調子が悪そうにしている。これは明らかに普通ではない。

「……フィン、あの人って」

「君が抱いた感情や想像、その通りの相手だよ」

「っ、フィン！その言い方は誤解を招く！彼女は決して……」

「余計なことを知れば苦しむのはアイズだ。君はアイズにも僕達と同じ苦痛を与えるつもりかい？」

「それは……………そう、だな」

彼女から離れるほどに、自分の認識が元に戻っていくのを感じられる。そして先程までの自分との乖離に、悍しい吐気を催す。ロキ曰く、この現象についてはむしろ正常なものらしい。異常な外敵に対して、異界からの侵入者に対して、この世界の人間が本能的に抱く拒否反応。この世界で生まれた者ならば当然のように持ち合わせ、むしろそれが働かなければ欠陥があるとも言える当然の現象。

「……………ただ、前よりも酷くなっている」

しかしその現象は、単純に格の違いによって和らげる事が可能だとロキは言っていた。格とは即ち恩恵のランク。恩恵のランクが高いほど自分を維持出来るようになり、外敵を相手にしても自分の意識を保っていられる。しかし反対に恩恵のランクが低ければ、強い感情や意思でも無い限り、以前に”豊穡の女主人”で客達の間で起きた奇妙な現象の様に、まるで操られた様に揃って彼女を睨み付け、意思のない無生物の様に只管に敵意を向けるだけの存在となってしまう。

「……………私達でも認識が歪され始めるほどに、力が強くなっている。恐らく今のラインはL v. 3、それより下は素で彼女を認識した瞬間に問答無用で人形になるのだろう。他に意識を割く理由などがあれば話は別だが」

レフィーヤがあのお店でも意識を保っていられたのがその証拠。彼女が今日の様に自分の姿を極力衣服などで隠していれば、L v. 2程度までなら意識を保っていられる。治療されていた冒険者達が敵意を持ちつつも意識があったのがその証拠だ。

……………そして恐らくであるが、人形にならなくとも嫌悪感が消えることはない。彼女のことを知れば知るほどにその善性を理解することになるが、目の前で顔を合わせてしまえば途端に凄まじいまでの嫌悪感と衝動に襲われてしまう。リヴェリアとフィンを今正に襲っているのはその乖離についてであり、これは彼女を良く知る者達ならば誰でも味わっている現象だ。だから彼等はむしろノルアのことを避け

る様になる。……よく出来た機能だと、フィンは思う。それを乗り越えればディアンケヒトやアミツドの位置に行けるのかもしれないが、その立ち位置すら今は恐ろしい。関われば苦痛以外に得られるものがない。だったら最初から関わるべきではないというのは当然の判断だ。

「アイズ……悪いことは言わん、あの子にはもう関わるな」

「……でも、アミツドの友達だって」

「彼女はいつか僕達の手で殺さないとはいけない」

「……！」

「その時にもし君が彼女と関係を深め、一瞬でも躊躇いを見せてしまうようであれば、それは大きな失敗に繋がってしまう」

「……だから、仲良くならない様に、関わらない方がいいってこと？」

「そういうことだよ」

言いたいことは分かる。

何故彼女を倒さないといけないのかについても、豊穰の女主人で口キの話を通してしか聞いていなかったアイズでも何となく想像は付く。

しかし、アミツドは確かに言っていた。彼女は自分の大切な友人で、他にも友人を作ってくれると嬉しいと。自分だって昔は彼女に治療をして貰ったことがある。……もしこの手で彼女を倒したとして、アミツドはそんな自分のことをどう思うのだろう。悲しむ彼女の顔が思い浮かんで、あまり良い気分にはなれない。

「じゃあ、次の遠征に連れて行くって言うのも……？」

「いや、今はまだその時じゃない」

「？」

「次の遠征は、あくまで彼女の能力の詳細を知ることが目的だ。だから彼女は常に僕達と同じ前線チームに配置して、探索を進める」

「それは、危険じゃないの……？」

「危険だよ、だから僕は何より君達を守る選択肢を取るつもりだ。彼女のことは殺さないし、彼女の能力と性格も最大限に利用する。治療師としての彼女は信用出来るからね。……それでも、もし彼女がそこ

で死んでくれるのなら話は別だ。助けることはせず、ダンジョンの深層に封印する。僕達の関係はあくまで、その程度だ」

恐らく彼女はステータスを向上するために、前線で戦うということを承諾するだろう。そして例え相手がフィンであっても、怪我をすれば治療をしてくれるはずだ。影響されていない状態で客観的な事実だけを見れば、彼女はそういう人間だから。だが彼女が怪我をした時に、こちらが治療をするつもりはない。そのまま死んでくれるのであれば、地上への被害の少ないダンジョンの深層で死んでくれるのであれば、それで彼女への対処の前段階は完了するからだ。

「酷いと思うかい？こんなやり方をする僕達が」

「……うん。けど、フィンがそこまでしないとイケない相手だつてことも分かる」

「ダンジョンの深層でも抑えきれない可能性はある、だが地上で解放するよりは間違いなく時間も稼げるし被害も減るだろう。……それでも積極的に殺さないのは、最初に手を下すのが僕達じゃない方が都合が良いという理由以外にも、これがロキ・ファミリア自体に不和を齎す可能性もあるからだ」

「フィンも、迷ってるってこと……？」

「……殺さなければならぬ。早ければ早い方が絶対に良い。ただ殺してしまえば僕達はファミリアとして、少なくともオラリオではまともな活動が出来なくなるだろう」

「あくまでやるのであれば、正当な理由がある場合。もしくは故意ではなかったと説明、証明出来る状況でなければ許されない」

「毘とかも、仕掛けないの？」

「彼女には僕よりも優れた勘の様なものがある、そういった勝負を仕掛けるのは無意味で逆効果だ」

「……みんな、そう思ってるんだ。自分以外の誰かが、あの子を殺してくれないかって」

「ああ、そうだよ。だからこのままだと、彼女が器としての限界を迎えるまで放置することになってしまう。そうなってしまえば、発生する被害は間違いなく甚大だ。……本当なら、10年前に見つかったあの

時点で手を下しておかなければならなかったんだ」

そんな話を聞いたアイズは、俯きながらも若干の恐怖を抱いてしまっていた。それは別に彼女に対しての恐怖ではない。……もしかしたら自分もまた、何か少し違っていれば、今の彼女と同じ立ち位置に居たのではないだろうか。そう思ってしまったのだ。

誰からも疎ましく思われるどころか、殺さなければならぬと思われていて、彼女はどんな気持ちで生きているのだろう。苦しくないのだろうか、辛くはないのだろうか。アイズの頭の中を過るのは、彼女のあの人形の様な顔だけ。自分だって人形のようにだと巷では言われているというのに。

「後で遠征参加者全員に伝えるつもりだったが、彼女は白炎の魔法を使っている間は他者への影響が緩和される。だから遠征中にはポーションを飲み続けるなり、無理矢理にでもそれを使い続けて貰うつもりだよ」

「……………そう」

「一方で彼女が黒炎を出した際には、むしろ抵抗感が強くなる。だからこれの使用は禁止する。アイズも、それについてはさつき見た時にも感じた筈だね」

「……………うん」

「彼女の監視と指示については全て僕が担当するし、接触させるつもりもないけれど、もし何か感じるものがあれば教えて欲しい。彼女に関する情報は、今は何より欲しいんだ」

「……………分かった」

アミッドは聖女と呼ばれるに相応しい人間だ。見識もある。そんな彼女が心から信用している人間が、悪い人物である筈がない。

自分が感じたあやふやな抵抗感より、アミッドがリヴェリア達を相手に自らの背後に彼女を隠そうとした程の愛情の方が余程信用出来ることも間違いない。

……けれど、それよりもフィンやリヴェリアの今の言葉や反応の方がもつともつと信用出来る。彼女は殺さなければならぬ。例えばアミッドとの関係が悪くなったとしても。殺さなければ間違はなく大

変なことになってしまおうのだろうから。だから、
(っ！)

だから、殺さないといけないのだろうか？

「フィン、リヴェリア……」

「ん……？」

「なんだい？」

「もし、私が、その……」

「？」

「もし、私も、あの子と同じ立場になったら……私のこと、殺すの？」

「っ」

気になってしまった。

思ってしまった。

アミツドの気持ちを考えたら、あの時のアミツドの顔を思い出して
しまったら、それを考えずにはいられなかった。

もし自分がオラリオを破壊する様な何かになってしまったとして
……果たしてフィン達はどうするのだろうか、と。アミツドの様にそ
れでも愛してくれるのか、それとも……

「それ、は……」

「……そうはならない、意味の無い仮定だ」

「そんなことは、ないと思う。今回だって、食人花に宝玉が寄生して、
モンスター達の親玉が生まれた。けどあの宝玉が最初に狙いを定め
たのは、私だった。あれがもし私に寄生していたら、そうしたら私も
……」

「……………」

それくらいには身近な話であると、アイズは思う。決してフィン達
の行動が間違っていると言いたい訳ではないが、これは決して彼女に
だけ当てはまる話ではない。身近な人間を殺さなくてはならない状
況……果たしてそうだった時に、自分は、周りの彼等は、どうするの
か。

「……僕は恐らく、今と同じことを考えるとと思うよ」

「フィン……」

「例え相手がリヴェリアでも、ガレスでも、同じだ。そうでなければ、フィン・ディムナじゃない」

「そうだ、フィン・ディムナであればそうするだろう。そうしなければならぬ。彼はそういう人間だ。今回の件についても、同情はしているが、殺すという結末が揺らぐことは決してない。その過程で心揺らぐ事はあるかもしれないが、結末は絶対に変わらないと断言出来る。もしディアンケヒトやヘアイストスがそれに反対しなければ、むしろ話を聞いた時点で彼は直ぐにその命を奪いに行っていた筈だ。」

「……私には、無理だ」

「そしてリヴェリアもまた、そういう人間だった。」

「もし、お前を殺さなくてはならないとして……私にはそんなこと、絶対に出来ない。彼女のことを殺そうとしている分際で、だがそれでも、きつと、いざ自分の事となれば……そんなことが、出来る自信はない……」

「……うん」

「そう言ってくれる人が1人でも居てくれるのなら、頑張れるかもしれない。きつと彼女もそんな気持ちなのだろう。例えオラリオ全体が敵に回ったとしても、アミッド1人が側に居てくれる限り、彼女は……」

「うん、分かった。私はフィンとリヴェリアのこと、信じてるから」

「……ありがとう。そしてすまない。不甲斐のない団長で」

「もし彼女を倒さなければならなくなったとしても、その末にアミッドを傷付けてしまうことになったとしても、それでアイズの何かが変わる訳ではない。アイズの目的は変わらない。」

「……力がないから悪いのだ。守れないのも、追いつけないのも、助けられないのも。強くなって、力を得て、どんな相手にも負けないようになれば……あの女からアリアについての情報も引き出せていたし、ノルア・コルヴァスという少女だって、弱いうちに殺さなければならぬなんてことにはならなかったのだから。」

力が足りていない。
今のままでは、何にも届かない。

14. 5 勇者の記憶

リヴィラでの一件の後、フィン達は一度地上へと戻っていた。リヴィラで起きたことをギルドやロキに報告し、街の人々を地上に一度送り返すためにも必要だったからだ。直ぐにまたダンジョンに戻るつもりではあったのだが、何より一つ確かめたいこともあった。

「大和竜胆が生きとったあ!？」

「ああ、あれは恐らく彼女で間違いない。偽名を名乗っていたし、服装や容姿もかなり変わっていたけれど……声はそのままだった。話し方も彼女が仲間内だけで会話をする時のもので、実際に彼女の隣で戦った事のあるリヴェリアも同意見だったよ」

「マジか……あの子が助けとったんか? だとしても、隠す必要性なんかどこにも」

「それと彼女、恐らくLv. 6に到達している」

「それもマジか!？」

「大真面だ。アイズよりも強いのは明らかで、ステータスはさておき、近接戦闘での実力は僕と同等と考えていい。……まあ、5年前の時点で彼女の技術は殆ど完成していたからね、それについては然程驚く事ではないかもしれないが」

彼女が存命していたという件については、フィンの想像通り、やはりロキですら知らないことであつたらしい。今は酒場で働いている当時の同僚である疾風でさえも、あの様子では恐らく知らないのだろう。突然現れた彼女というイレギュラー、これは現状の情勢を大きく揺るがしかねないと言える。

「……もしアストレア・ファミリアが残つとつたら、ほんまに相当な戦力になつとつたかもしれないな」

「今はその戦力がノルア・コルヴァスの元にあるのが気掛かりだ。無いとは思うが、下手をすれば疾風もあちらに着く可能性がある」

「他に生き残りが居る可能性は?」

「分からない。もつと言えば、彼女という例外がある以上、過去に亡くなっている筈の冒険者がノルア・コルヴァスの味方についている可能

性も出て来た」

「……死人を生き返らせて使役しとるって言いたいんか？」

「アストレア・ファミリアの最後は……その凄惨さは、とてもではないが生き残りが居るとは思えない様なものだったろう」

「……………」

「生き返らせた本人に嘘の記憶を植え付けているのかもしれない。彼女に抵抗感を持たない人間は、皆彼女に生き返らされているという共通点があるのかもしれない」

「……珍しく憶測ばつかやな、フィン」

「彼女と相對するのであれば、そういった”かもしれない”を積み重ねておく事が大切だと思うからね。気付いた時には周囲の大半が彼女の下に付いていた、なんて事態は絶対に避けたい」

表では無害を装い、その裏で大きな事を計画している。そういつたことはよくある。アミッドを隠れ蓑にしている、アミッドすらも既に亡くなっており、強引に蘇えらせて使役しているということだってあり得るだろう。

「あの子自身は善人でも、無意識のうちに操られとる……確かにそういう道筋もあるかもな」

「……正直に言うと、僕もどうすればいいのか分からないんだよ。ロキ」

「まあ、そうやろな」

「彼女に関しては、自分の勘が何を示しているのか分からないし、その道筋も辿れない。自分が今彼女に影響を受けているのかも分からないし、冷静な思考が出来る自信もない」

「弱気やな、また珍しく」

「恐ろしいんだ、本当に。……………昔は、優秀で素直な子だと、可愛がっていた時もあったくらいなのにね」

「……そんな頃も、あったなあ」

何も知らなければ、あの頃のまま居られたのだろう。だが自分達はそれを良しとしなかった。まだ幼い彼女を拒むことを決めた。……彼女がそんな自分達のことをどう思っているのかなんて、考えた

くもない。どうか忘れていて欲しい、恨んでいて欲しいと、思わざるを得なくて。

「……見とるだけやと、あの頃から全く変わつたらんのがまた辛いところやな」

「今はもう彼女のことを何一つとして信用出来ないけど」

「そか」

(……だからもし、本当に彼女自身には何もなくて、本当に彼女はただの被害者で、言い訳の出来ないくらいの善人なのだとしたら)

そんな彼女を追い詰めて殺すことしか出来なかった自分は、永久に”本物の英雄”になることなど叶わなくなるのだろう。とは言え、それはもうそれでもいい。自分の志した夢は、例え偽物であつたとしてもいいのだから。小人族の繁栄のため、偽りであつても英雄となる。その目的のためならば、決して本物にならなくともいい。

……口だけでなら、そう言うことは簡単だった。

けれど違う、だつてフィンだつて男で、かつては英雄に憧れ、目指した子供だった。今でもそれに対する憧れはあるし、これから下す自分の行動が”英雄”という存在に全く相応しくないものであると、むしろ真逆のものであると、理解して、今も心の中に居る幼い自分が哀れなものを見るような目をこちらに向けて来ているように感じている。

「……本物の英雄なら、彼女を信じて、彼女を救うために必死になつて、奔走するのもかもしれない。嫌悪感なんて気合で振り伏せて」

「けど、まあ、そうはいかん」

「ああ、そうはいかない。彼女のために、仲間達を犠牲にすることは出来ない。……彼女を救おうとする英雄は居なかつた、これはただそれだけのことだ」

そう、言い訳をするしかない。

今でも時々思い出す。

『アイズを助けてやって欲しい』と彼女に伝えたあの日のことを。『無

茶をしたら止めてやって欲しい』と軽い気持ちでお願いしたあの時のことを。

その結果、無茶ばかりをしていた当時のアイズを、自分達の代わりによく叱ってくれていた。そして彼女は今でも、アイズの治療をする時には、彼女のことを叱ってくれる。

それなのにアイズは彼女のことを苦手で、避けていて、アミッドと交友を築いて彼女に治療をして貰うようになってからは、会うことも説教を受けることも滅多になくなってしまつて……その上で彼女に抱く嫌悪感が強くなつてしまつたことで、もう2度と彼女の真意に気付くことすらなくなつてしまうのだろう。

何年も前にお願ひしたことを、彼女は今でも守つてくれている。これだけ拒絶しているのに、どんな時だつて頼めば治療をしてくれる。こちらの都合だけを押し付けても、文句すら言わない。リヴィラの街で顔を合わせた時もそうだった。彼女の表情には憎悪の感情など決してなく、むしろそこには……

「……ツツ!!」

フィン は拳を自分の膝に叩き付ける。

この頭は、少し油断すれば勝手にそんな思考を作り上げてしまう。目を逸らしたい真実を、目を背けている事実を、無意識に目の前に突きつけてくる。

あの子は悪魔だ。

生きていてはいけない存在だ。

早急に殺してしまわなければならない。

裏では何かを企んでいるに違いない。

そうでなくとも操られて何かしているのだろう。

「……」そうとでも、思わなければ。

「フィン、今日はもう休み。疲れとるんや、明らかに冷静やないで」
「……ああ」

「別にフィン1人が気負わんでええ。あの子を今まで野放しにして来たんはオラリオ全体の責任や。……あの子を助けられんかったんも、ウチ等全員の責任や」

「……分かってる」

『あの、ふいんさん。……これ、おれい、です。つくって、みました』

本当に。

もっと早くに殺していれば、楽だったのに。

15. 聖女の無力

18階層の夜は、外と同じように暗くなる。これは天井に存在する水晶の影響であり、こうなると火の様な灯りは必須の物だった。

壊滅したリヴィラの街から少し離れた場所にテントを張り、灯りを付けて食事を終えた。色々と大変なことはあったとは言え、怪我という怪我もノルアの指以外には殆ど無い。それもアミッドが治したことによつて、3人は静かな夜を過ごしていた。

「ん？なんだ、ノルアは寝たのか」

「ええ。寝た……というよりは、寝かせた、と言う方が正しいですが」「睡眠薬でも使ったか？」

「いえ、最近また一緒に寝床を同じにしてから気付いたのですが……ノルアは手を繋ぐと安心するのか、直ぐに寝てしまうんです」

「……そうか」

アミッドの膝の上で静かに寝息を立てているノルア。手はしっかりと繋がれて、頭を撫でられながら心地良さそうに眠っている。……18階層までの強行突破と、リヴィラの街の襲撃。当然疲れはあったのだろう。しかしそれだけではないことも分かっている。

「悲しい事があつた日はよく魔されているのですが、こうしていれば落ち着きますから……もう少し早くそれに気付いてあげればと、今更になって思います」

「……はっ、まるで子供だな」

「ええ、本当に変わっていません。……最初に会った時から、ずっと」一緒に眠るようになってから、なんだか彼女との距離がまた縮まった様にアミッドは感じている。自分の進言で寝床を分けてからは、話すことは仕事のことばかりで、時々部屋に行つて話すことはあつても、子供っぽい自分の姿をあまり見せたくなくて、むしろいつも冷静で大人っぽい彼女に少しの対抗心すら燃やしていた。

……実際には、こうして彼女の方がずっとずっと子供のようだったというのに。こんなことについて最近まで気付けなかった自分も、本当に何も見えていなかったのだと思つてしまった。一緒に育つて来た、

姉の様な相手のことなのに。

「正直に言えば、昔は隙さえあれば殺してやろうと考えていた」

「……そう、なのですか？」

「ああ、あの頃の私は影響を受けていたからな。アリーゼとアストレア様だけは何故か当時から殆ど影響を受けて居らず、こいつとよく話をしていたが……私はどうにも拒否感が拭えず、その笑みが胡散臭く、白々しく感じていた」

「……………」

「だが今こうして見ると、不思議な物だ。あれほど胡散臭かった笑みが、こいつなりに必死に浮かべてるものだと分かる。アリーゼとアストレア様が気に入るのも当然だ。冷静に見えて、こいつは常に必死に生きているからな。……相手の気分を少しでも悪くすれば殺されるやもしれん、そんな環境で育ったのであれば、少しくらい笑顔が下手になって当然だろうよ」

ノルア・コルヴァスはオラリオのダイダロス通りの路地裏でボロ雑巾の様になって倒れているところを発見され、ディアンケヒト・ファミリアに運ばれて来たという経緯がある。最初に彼女を見つけて運んで来た人間のことは既に記録にもないが、当時の彼女は多くの傷を抱えていた。日常的に何者かに暴力を振るわれていたことがありありと分かり、彼女を見て抵抗感を抱いていた治療師達も、その小さな子供が抱えるにはあまりに甚大過ぎる損傷の数々を見て、不快感など吹っ飛ばして必死になって治療を行ったという。

恩恵すらない小さな子供が、明らかに大人の手によつて痛めつけられていた。そんなことがオラリオで起きていたというのに、大事にはならず、その犯人すら今も見つかっていないのは、やはり単純に彼女が抱えているものが原因となる。ディアンケヒト・ファミリアの治療師達が必死になって治療したのに、その次の日から既に彼女を殺すべきだと多くの神々が口にしていただけから。

言葉すら辿々しい女子に、心すら壊れていたような子供に、最も酷い方法で殺さなければならぬと多くの神々が顔を向き合わせて賛同していた。

密かにそれに同意していた当時のデアアンケヒトを思いとどまらせたのも、彼の眷属達の猛抗議以外に他にない。

「だが状況は今も大して変わらん。この子は生まれてから死ぬまで、そういう運命だ。……むしろ時が経つに連れ、味方は消えていく」

ロキ・ファミアリアのように。

恐らく、いつかはヘアイストスやデアアンケヒトも賛同せざるを得ない状況になると輝夜は踏んでいる。彼等が無意識下でも望んでいるのは、所詮は輝夜と同じだ。せめて今だけは幸福を噛み締め、人並みの幸せを感じ、最後には彼女が満足して、笑ってその生を終わらせられる様に生きて欲しい。

輝夜とて世界の滅びまでは求めない。

ノルアが死ななければならぬことは分かっている。火の神であるヘアイストスがその危険性を知らない筈など決してなく、誰もが最後にはノルアが死ぬことについては諦めている筈だ。……せめてその過程を幸せに満ちたものにして欲しい、求めているのは本当にそれくらいのことだけではない。

「お前はどうか、【戦場の聖女（デア・セイント）】」

「え……？」

「お前はこいつの最後を、どうするつもりだ」

輝夜のその問いに、アミッドは顔を俯かせる。視線の先にあるのは彼女の寝顔。何も変わらない。彼女はずっとこうして自分の側に居てくれたし、それはこれから先も変わらないはず。そう信じている。

「私は……ノルアを死なせるつもりはありません」

「放っておけばオラリオを滅ぼすぞ、それは」

「ノルアは、そんなことしません」

「ああ、しないだろうな。するのはその中に居る奴だ」

「……ちゃんと、治しますから。私が」

「ならさっさと治せ、治せる物ならな。ホラを吹いて解決出来る問題か？」

「それ、は……」

「1人の死で済むのなら、こいつにとってもそれはマシな方だ。全て

が手遅れになってから、自己嫌悪と後悔に塗れて死なせたいのなら好きにすればいい。だがその選択をするのであれば、私はお前を敵と見なす。……後先を考えろ、せめて人間として死なせてやれ」

その言葉を今日まで突き付けて来た人間を、突き付けてくれた人間が、幸いにも、けれど不幸にも、今日の今日までアミッドには居なかった。

……拳を握り締める。今自分の視線の先で寝息を立てている彼女は、アミッドからしてみればただの人間だ。どうしてこれほど嫌われるのか分からない。どうしてこれほど死を望まれているのか分からない。本当の本当に、心の底から分からない。

今日までずっと隣に居た家族で、姉妹の様な間柄で、彼女に頼ったり、彼女に教わったり……掛け替えの無い人だ。

「っ」

視界にチラつく紅い炎が、まるで彼女の顔を隠す様にして覆い尽くす。一度目を瞑って頭を振ってやればそれは直ぐに消えてしまったが、それが何を意味していたのかは分からない。

いつも何の前触れもなくアミッドの前に現れ、自分が行くべき道を導いてくれるその炎は、今日はまるで彼女と自分を遮る様にして現れた。自分と彼女はもう関わらない方がいいと、そう言っているのだろうか。

(そんなことない……そもそも、この炎が本当に正しい道を示しているのかすら……)

それまで、その炎の導きに誘われるがままに歩んで来た自分が言える立場ではないけれど。それだけは信じたく無い。それだけは、導きに従いたくない。

「……レベルが上がれば、いいんですよね」

「それもいつまで続くかは分からん。そもそも、そう容易く上がるものでもない。どころか、上がれば上がるほど他者からの警戒は増すことになる」

「ですが、時間稼ぎにはなります」

「何の時間稼ぎだ？お前が今からこいつを救う策を練るための時間か

？……いくら意図的にノルアがお前に情報を与えていなかったとは言え、行動が遅過ぎる。いつそ最後まで隣で寄り添ってやった方がこいつは喜ぶだろう」

「それでも……！」

「少なくとも、極東には解決策はなかった」
「っ」

「向こうの有力な女神にも聞いたのだがな。神が取り憑いているのならまだしも、同時に産まれ、完全に肉体と同化しているとすれば、いくら強力な神具があつてもどうにもならん。……言うなればこいつは神の分身、転生体の1つ。神の要素だけを取り除くことなど、絶対に出来ん」

「……………」

諦めろ。

「お前が調べなくとも、お前が今更動かなくとも。お前が呑気に目を背けている間に、既に他の人間は動いている。その上での現状だ」

何の意味もない。

「時間を浪費するな、愚か者」

「アミッドだけがノルアを救うことを諦めていない。……のではない。……のではない。」

アミッドだけがその事実から目を背けており、未だに直視出来ないだけだ。他の者達はもう知っている。ロキ・ファミリアの彼等でさえ、その最期はどうにもならないと、それだけは理解している。

「……………ノルアは、普通の人です」

「何度でも言うが、普通ではない」

「私にとっては……………ずっと、最初からずっと……………」

普通の、同じ年の、子供だったのに。

16. 告白

リヴィラの街への襲撃から4日が経った。

ダンジョンの30階層までを目標とし、ステータスを伸ばす為に自身に縛りを課しながらも戦闘をこなしていくノルア。主に素手による打撃と鋼線を利用した罫を使って戦闘を優位に進めていく彼女であるが、やはりダンジョンに入ってから5日ともなれば疲労の色も見えて来る。

「ノルア……大丈夫ですか？」

「ええ、なんとか……アミッドが居ますから、大丈夫ですよ」

「またそういうことを」

「……」

いくらアミッドが居るとは言え、精神的な疲労までは癒せない。むしろこういう時だからこそ成長がし易く、それは輝夜が言うまでもなくノルア自身が理解していることでもあった。

ステータスは最低限で良い、レベルさえ上がればノルアの場合は問題ない。この調子でいけば、リミットには間に合うと輝夜は睨んでいた。しかしそうなる問題はレベルを上げるための偉業の方。こればかりは簡単にはいかない。確かに時間さえかければファミリア単位で階層主を倒しているだけでも達成出来るが、そんなことをしている余裕はどこにもない。

死なないためにレベルを上げているというのに、そのために死を覚悟とした無茶をしなければならぬというのだから、矛盾も甚だしい。しかしやらなければ生き残れない。恐らくそういった重圧もまた、ノルアの精神に負担を掛けているのであろう。

「……ノルア、偉業をどう稼ぐかは決めているのか？」

「ええ、ゴライアスを魔法を縛った状態で単独で倒します」

「!!」

「というより、直近でロキ・ファミリアに関係しない偉業となるとこれ以外にはありませんでした。昨晚あらためて予知を集中して見えたのですが、まあ本当に……」

「それって意図的に見れるものなんですね……」

「本来は意図的に見るものではないので、その分だけ色々消費してしまいます。ただ、これに関しては早めに知っておくに越した事はないので」

その辺りの詳細をノルアは絶対に語ってくれないので、いつも通りアミッドは話を流すが、ノルアがここまで披露していた理由の一つが分かったというもの。むしろそれを目的にノルアは自分の身体を追い込んでいたのではないか、そうとすら今は思えてくる。

「ゴライアスには具体的にどう勝つつもりだ？ 次の復活は恐らく1週間後だろう」

「ええ、復活の時期は既に分かっています。後はどの程度で偉業となるかの見極めですね。魔法を縛るとなると武器を使うしかないので、攻撃力のある大剣を使うことになるでしょうか」

「相手は推定Lv. 4の階層主ですし……そもそも魔法を縛る必要があるんですか？」

「魔法を使えば苦戦はしても勝てますから。言い切れては駄目なんです。9割勝てないと思える様な状況でない限り……アンフィス・バエナ相手となれば魔法を使っても10割殺されますし」

その辺りの見極めこそが大切だ。

手頃な相手が居ないのだから、自分自身を弱体化させる以外に他にない。しかしそうなるとまた1週間後に休みを取らなければいけないのだが、そこはまたディアンケヒトに頼み込んで……

「ノルア」

「はい……？」

「アンフィス・バエナを殺れ」

「え……？」

しかしそんな風に悩み混んでいるノルアに対して輝夜が言い放った言葉は、そういった彼女の工夫や苦悩を完全に消し飛ばすものだった。

「ど、どういうことですか！」

「喧しいわ、【戦場の聖女】」

「……聞かせて下さい」

「単純な話、そうして倒したところで偉業として認められるかは微妙だ。ならば倒したことの無い相手を倒した方が間違いない」

「私に倒せるでしょうか？」

「無理だな」

「む、無理なんですか!？」

「当然だろう、あれは水上ではウダイオスと同等の存在。単独討伐など正常な成長をしたLv. 6でもなければ不可能だ」

そもそもが水上、相性もある。基本的に近接戦闘しか出来ず、剣姫の様な飛行手段も無いとなれば、レベルだけあっても勝てない相手だ。加えてノルアは実際のところ、殆どステータスの積み重ねがない。Lv. 4というのは建前で、その実力は通常のLv. 3と変わらない。魔法で一撃を加えても、反撃で殺されるのが関の山だ。だとしたら……

「確かにお前では正面からあの龍を叩き潰すことは不可能だ。……だが、正面からでなければどうだ」

「……なるほど」

「……罾を張る、ということですか？」

「そうだ、お前が考え付く限りの罾を張って徹底的に叩き潰せ。それでも殺し尽くせはしないだろうが、手傷は与えられる」

「そこで私でも倒せるくらいまで引き摺り下ろすのが、最低条件ということですね」

「例え罾を張ったとしても、それはお前の努力の結果。別に傷を負わなければ偉業にならないという訳でもない。圧倒的な上位者を無傷で倒す事が出来たとするならば、それこそ偉業と呼ぶべきだ」

輝夜のこの意見には、アミッドでさえも頷かざるを得ない。怪我をする事が前提というのが間違っている。推定Lv. 6の相手を、実力的にはLv. 3程度の冒険者が無傷で打ち倒した。魔法の特殊性を加味したとしても、これは間違いのような偉業であるだろう。しかも先手を取れるとは言え、場所は敵の本拠地。確かにこれが出来たのなら、偉業となることは間違いないだろう。

「ノルア……?」

「……ええ、そうですね。やるなら徹底的に、無傷での突破を目指します」

「!!私も協力しますから……!」

「輝夜さん、今日はこのまま18階層に戻ってもいいですか?具体的な策を考えたいですし、調達したい物もあります」

「ああ、お前の好きにしろ。やりたい事があるのなら、いくらでも手を貸してやる」

「ありがとうございます。……アミッドも、ありがとうございます」

「……私とノルアの仲ですから」

策を用いてアンフィス・バエナを倒す。それは決して現実的な話ではないけれど、それを現実的なものにするために、ノルアはまた頭を回し始めた。

ノルア・コルヴァスの予知能力は、やはりと言うべきか、そこまで万能な物ではない。しかし予知であるからして未来の結果は確定だ、そしてそれはノルアの行動次第で変えることも出来る。

例えばノルアが目の前の人間を殴ろうとして、それは失敗すると予知で見る。ならば殴るフェイントをかけてから蹴るとかという意思に変えたとすれば、再度の予知で見える光景も変わってくるという訳だ。そこで当たらなければ、別の手を考えれば良い。確実に攻撃が当たるまで、事前に予知で確認し続ければ良い。

だからこそ、ノルア・コルヴァスにとって罠というのは魔法以上に強力な武器であった。この能力さえあれば事前に準備をこなした戦いでは、絶対に負ける事がない。

……そう、理論上は。

「……アミッド?」

「起きましたか?ノルア」

「あ……また気絶していましたか」

「ええ、驚かせないで下さい。買い物から帰って来たらテントの外で倒れているものですから、一体何事かと」

「……ごめんなさい」

クラクラとする頭を持ち上げようとして、アミッドに押さえ付けられる。……完全に、意図的な連続の予知による弊害が出ていた。

この予知能力、そもそもは意図的に使って良いものではない。何か物事を聞いたり見たりした時に、唐突に僅かな部分だけ見えるというのが本来の在り方だ。

例えば数日前のリヴィラの街の襲撃の際も、リヴィラの街を見た瞬間に15秒後の襲撃の様子が見えて。その後にはリヴィラの街に向かっている途中に、アイズが赤髪の女にトドメを刺されそうになっている光景が見えた。

見える物も見える時も、本来ならば定められるものではない。自分の意思で捻じ曲げられるものでもない。……だからそれを捻じ曲げる為には、己の記憶と思考と意思を徹底的にそれだけに完結させる必要がある。

「……まさかずっと瞑想していたんですか？」

「瞑想……というより、迷走ですね。生半可な罨では傷すら負わせられそうになくて」

「なんというか、奇妙な話ですね。本来なら心を落ち着かせるための技術なのに、貴女はそれでむしろ疲労するんですから」

目を閉じ、外界からの情報を全て捨て、徹底的にアンフィス・バエナとの戦闘に関する事だけを脳内に走らせる。半端な思考では余計な雑念が入ってしまうため、本当に全力で思考を巡らせるのだ。だから決して無意識で居てはならない。ノルアはその瞑想の最中、心の中で常に独り言を話し続け、ここに戻ってくるまでに見た26階層の詳細と、張ろうとしている罨の詳細を組み立て続ける。そうして偶に見えた予知によって、その結果を測るといふ訳だ。……これを只管に徹底的に繰り返し返す。ロキ・ファミリアの今後の動向を見た時も、この方法だった。そしてこんな方法を長時間に渡りし続けていけば当然ながら疲労は溜まるし、鼻血も出る。具体的には自分の衣服と近くの地面に自分の血が固まってしまっているくらいには。顔には付いていないことを見ると、アミッドが拭いてくれたのは間違いない。

「……普通の人間には、こんなことは出来ないでしょう」

「そうでしょか……」

「ええ、そこまでする理由がなければ絶対に出来ません」

「それなら、私とて同じです。そこまでする理由があるから、やるんです」

「?どんな理由なんですか?」

「アミツドの隣に居たいので」

「……それは私も同じですよ」

ノルアの目に手を当て、治療魔法をかけるアミツド。事前にもかけていたというのに、これ以上何を治療する必要があるというのか。そんなことはアミツド自身が一番よく分かっているけれど、こうでもしないと今の自分の顔を見られてしまう。そしてそれはノルアも同じだったからこそ、何も言わずに受け入れた。

「……アミツド、ずっと謝らないといけないと思っていた事があります」

「謝らないといけないこと……?」

「私は間違いなく、長くは側にいられません」

「っ!」

「だから、きつと、近いうちにアミツドに悲しい思いをさせてしまいます。貴女をきつと、泣かせてしまいます。そうなつてからでは謝れないと思うので、今のうちに謝らせて下さい。……ごめんなさい」

「……そんなこと」

「私が居なくなつた後も、涙を拭いて、ちゃんと幸せになつて下さいね。私はそれ以外には求めません。……むしろ私のせいでアミツドの人生まで壊してしまつたら、本当に」

どうして生きていたのか、分からなくなる。

……そこまでは言ってくれなかったのが、尚更に辛い。言ってくれば、強制してくれれば、アミツドだって少しは楽なのに。ノルアにそう言われたから、そう生きていくのだと、支えを持つ事が出来るのに。彼女はそれすら持たしてはくれない。

「ノルアがずっと、隣に居てくれれば……それでいいじゃないですか」

「この街に居るとどんな神様だって、私を殺す以外に他にないと仰っています。それは即ち、そういうことなのでしょう」

「それでも……それなら、せめて、少しでも長く」

「ええ、そうですね。ですから、今のうちにアミッドにも覚悟を決めておいて欲しいです」

「……その為に、最近になって、私にこんな話ばかりする様になったんですか？」

「そうですよ」

「……本当に酷い人です、貴女は」

こちらの思いも知らないで。

勝手に自己満足して。

残される側の気持ちも知らないで。

怒ることが出来ないことも、分かっている癖に。

いつもいつもそうやって、全部分かっているみたいにして。本当に、本当に……。

「輝夜さんにも、言われました」

「？」

「覚悟が足りないと、時間を浪費するなど。……私はもっと、現実を見るべきだと」

「彼女は厳しいですから。他人にも、自分にも」

「でも、私は……そんな現実、見たくない」

「……………」

「なんで、どうして貴女なんですか？ノルアは悪いことなんて、何もしてないじゃないですか」

「……………」

「どうして貴女ばかりこんな目に遭わないといけないんですか？どうしてその半分でも他人が請負う事が出来ないんですか？……なんで、一番辛い思いをして来た人が……最後まで、こんな……………」

既に魔法も発動していなくとも、遮られている視界の先で彼女がどんな顔をしているのかはノルアにも容易く想像が出来た。ノルアの頬に温かな水滴が落ち、やはり泣かせてしまったのだと理解する。

泣かせたくはなかったけれど、事前にこの段階を踏まなければ、彼女はもつと酷いことになっていただろうから。

「辛いだけの人生ではありませんでした」

「……嘘です、そんなの」

「嘘ではありません。だって私、アミツドの前でだけは普通の人間で居られましたから」

「でも、だからこそ、辛いものではないんですか？」

「……私は、生まれた時から異物だったので」

「……」

「もう記憶にも殆どないですが、私は両親から放置された様な形で育ち、物心ついた頃には捨てられていたと思います」

「そう、だったんですか……」

「ええ。その後は何処に行っても殴られて、蹴られて、殺されかけて……ああ、自分は皆と同じではないんだなあ。人間ですら無いんだなあ。それが最初の自分への認識でした」

ノルアのそんな話を、アミツドは今日の今日まで聞いたこともなかった。そもそも彼女自身がそういうことを他人には話さなかった。……いや、そもそもアミツド以外にそんな事を話す相手が居なかったという方が正しいだろう。そんなアミツドが聞かなかつたのだから、誰も知らなくても仕方がない。

「アミツドは私が悪いことなんてしてないと言いますが、当然盗みもしてました。私がディアンケヒト・ファミリアに拾われる切っ掛けとなった怪我也、盗みがバレて店主の怒りと憎悪を買ってしまったからです」

「そんなのは……」

「むしろそこで私を殺さなかつただけ、あの店主さんは理性があつた方だと思えますよ。私はそもそもそういう存在ですから。愛想がないという理由だけで普通の人に刃物を持たせる様な異物です、相手は悪くありません」

悪いのは私なんです。

アミツドは自分の下唇が切れてしまったことを自覚する。きつと

ノルアの目を覆っている手も、震えてしまっているのだろう。けれどそんなの仕方ないではないか。怒りを抱いてしまっても、仕方ないではないか。そんな風に彼女に自覚させてしまいう何もかもに怒りを抱いてしまっても、それでも。

「だから、私を見ても何も思わないアミッドやフィンさん達と出会って……本当に嬉しかった」

「ノルア……」

「フィンさん達は今は影響を受ける様になってしまったけど、それでも私に向き合ってくれている。それに何より、アミッドだけは今でも変わらず私を愛してくれている」

「……そんなの、当たり前です」

「当たり前かもしれないですけど、私にとつてはそれが何よりの救いなんですよ。アミッドがこうして私に触れて、私のために怒ってくれて、私を想って泣いてくれる。……これ以上に幸せなことなんて、ある筈がない」

その温もりを感じたのは、今度はアミッドの方だった。彼女の目を覆うその掌に、伝っていく。震える様なその声に、自分の心まで震わされる。

「だから……そうやって私に何よりの幸福をくれたアミッドには、誰よりも幸せになって欲しい」

「……貴女だって、もっと幸せになっていい筈です。私なんかよりも、もっと、もっと幸せな事が、この世界にはある筈なんです」

「例えそうだとしても、私はもう満足していますから。アミッドが私のことを、こんなにも大切に思ってくれている。この事実以上に幸福なことがあるなんて、私はむしろ知りたくないくらいです」

ノルアの手で、彼女の顔を覆っていたアミッドの手を握られる。露わになる互いの表情。……本当に、酷い顔をしていた。美人が台無しだと、お互いに思っ、へたくソに笑う。アミッドはノルアの涙を拭いて、ノルアは自身の魔法でアミッドの唇を触れて治して。見つめ合う。

「アミッド……わたしはもうすぐ、死にます」

「ノルア……わたしは絶対に貴女を、死なせません」
言葉も、想いもすれ違つて。
それでも2人は微笑んだ。
……微笑みながら、泣いていた。

17. 先送る

アンフィス・バエナを倒す方法。

本来であればL.V. 5級の冒険者が複数になって倒す様な相手を、単独で倒すために。

必要な方法は単純だった。

「はあ……はあ……」

「ノ、ノルア……!!」

「無茶なことを……!!」

27階層の滝壺。

そこからずぶ濡れになりながら輝夜によつて引きずり出されたノルア。背後には灰になりながら沈み始めたアンフィス・バエナの巨体と、その肉体を食い荒らし始めているモンスター達の集団。そして輝夜に蹴散らされた肉片。

「っ」

「自分から飲み込まれに行くとはな……」

「動かないでください！今治療をしますから！」

身体のうちこちに骨折、消化液や熱による火傷と溶解の痕。どれだけ事前に対策をしていようと、そんなものは気休めにしかならない。一步間違えれば死んでいたし、むしろ生きていたことの方が奇跡と言つてもいい。巨大なモンスターに飲み込まれるというのは、実際想像以上に危険なことだからだ。狭い喉を通り、炎袋を通り、溶解液の溜まった酸素の少ない胃袋に落とされる。噛み砕かれなくとも普通であれば死に絶える。内側からの攻撃は通りやすいことは間違いないが、そもそもその攻撃を出来る余裕がないというのが本来。

「うっ……アミッド、ありがとうございます……」

「なんであんな無茶をしたんですか！開幕早々に飲み込まれに行くなんて!!」

「唯一、勝てる未来が、見えた、方法なので……」

「……正直に話せ。本当に”確実に”勝てる方法だったのか？」

「……私の精神力次第でした。一度試してみた時には胃袋の中で混乱

して死んでしまいました。次に試した時には何とか倒すことが出来たので。つまりはアミッドのおかげですね」

「またそれですか!？」

「全く……もし体内から魔石を破壊するのがあと少し遅れていれば、まず間違いなく死んでいた」

しかし、それくらい橋を渡らなければ成し遂げられない偉業であったことも間違いはない。

戦闘時間僅か3分。

時間もそうであるが、これだけの實力差の相手に対してこれだけの被害で勝利を得られたというのは、あまりに運が良過ぎた。その後には輝夜とアミッドによる助けがあつてこそその策であつたため、本当に一人の力で勝てたかと言われるとまたそこも何とも言えないところではあるが、プラスとマイナスを天秤に掛けてみれば、あまりにもプラスに偏つた結果。

(……否、その道筋を見つけ出すことこそが、試練の一つだったということか)

一日中瞑想をして、鼻血を出しながら何度も気を失つて、色々な罫を図面から作つて試しては、それを破棄する作業。最後はそれら全部を投げ捨てて、あまりに原始的な策を自らの肉体だけで行うことになつたのだから、皮肉な話だ。

「……偉業に、なつたでしょうか」

「これではならなかつたのなら、最早どうしたらいいのか分からんな」

「まあ、確かにその、客観的に見ると、色々と速過ぎて何が何だかという感じでしたが……」

「別に劇的でなくともレベルは上がる。モンスターに襲われて必死に逃げていたら上がつていたということもある。それに比べれば十分だろう」

「ステータス、足りてませんが……」

「……まあ、そこは追々だな」

「ひ、一先ず帰りましょう? 目的はこれで達成出来たということの良いですよ?」

「ああ、これ以上ここに居る理由もない」

「よかった……」

治療は終わったが、まだフラフラとしているノルアを支えながら、アミッドは安堵の息を吐く。これでやっと帰ることが出来る。これでやっと命のやり取りをしないで済む。それは当然自分のことではなくて、ノルアが。ノルアが無茶をせずに、ただ普通の、普段通りの、1人の人間として生きている時間が戻って来る。

「ノルア」

「はい」

「気付いているか？」

「……はい」

「?な、なんの話ですか……?」

「この方法が続けることは現実的ではない」

「!!」

「そもそも、以前よりペースが上がっているという時点で分かっていた話だ」

「……そうですね。ステータスに余裕がない状態でレベルを上げ続ければ、レベルに見合ったステータスが得られなくなる」

「L v. 5になるために必要な偉業を、L v. 3程度のステータスで望むことになると言った方が分かりやすいな。その上、ステータスの伸びにも限度がある。お前の中の物モノの成長速度と、ステータスの成長速度が引っくり返った瞬間に、お前の死は確定する」

「……!!」

「私の個人的な感覚ですが、L v. 5になれるかどうかは別れ道だと思います」

「そんな……!!」

「……生きるためには、治療師をやっつけていられる暇もないかもしれないぞ」

「……分かっています」

「なんで、どうしてそんな事を言うんだろう。」

「この2人は。」

アミッドは先程までの感情と一転、胸が締め付けられる様な感覚を抱きながら、ギョツとノルアの腰を抱き寄せる。

せつかくこうして問題が半分解決して、明日からまた普通の生活に戻って来ると思えたところなのに。どうしてそんな辛い話ばかりをするのだろうか。

「ノルア……」

「はい？ どうかしましたか、アミッド」

ノルアは笑う。

優しい笑みを浮かべて、アミッドを見る。

他人はこの笑みのことを胡散臭いだとか白白しいとか言うけれど、アミッドはそんな風には思わない。幼い頃から見慣れている、優しいこの笑みを、白々しいだなんて思わない。

……ただ、今はその笑い顔が苦しかった。

その、自分が死ぬことなんて少しも恐れていなくて、むしろアミッドを気遣う方を優先している様なその笑みが、恐ろしいくらいに辛く感じてしまう。

「……帰りましょう、とにかく」

「ええ、そうですね」

そうしてアミッドはまた目を逸らす。

いつかは直視しなければならぬその事実から目を背け、ノルアからも目を逸らし、ただ自分の見たいものだけに目を向ける。

ノルア・コルヴァスはいつかは死ななければならぬし、それは決して遠い話でもない。その事実は決して覆るものでもなければ、避けられるものでもないのに。

「……何をして来た」

「アンフィス・バエナを、倒して来ました」

「……」 大和竜胆”とか？」

「いえ、その、1人です」

「……」

自分がいなくなるということも当然のように。

ディアンケヒトの怒りは増すだけ。

ダンジョンに潜るなどは言わない、輝夜と一緒にであるのなら文句を言うこともしない。あれが付いているのなら万が一も無いと知っているからこそ、意見もしない。

事情は知っている。

ステータスが必要なことも。

そうしなければ生きられないことも。

だから売上などなくとも、むしろ仕事なんか後回しにしても、それを優先させればいいというのに。眷属1人を犠牲にしても金が欲しいなどは、ディアンケヒトは一度たりとも思ったことはない。「ロキ・ファミアアの遠征に着いていく必要はあるのか。あとはステータスを上げればいいだけだろう」

「……本音を言えば、ロキ・ファミアアとの遠征までにレベルを上げておきたいと思っています」

「何を馬鹿なことを!!」

「……アミツドが嬉しそうなので」

「？」

「私と普段通りの生活をしていると、アミツドがそれだけで嬉しそうなので。なるべくそういう時間を作りたいんです。だから出来るだけ余裕を作るために、集中的に専念したいと思っています」

「……それで死んでは意味がないだろう」

「今のところ、そういう未来は見えていません」

「全てが見えている訳ではないだろうが!!」

「フィンさん達を信じていますから」

「っ」

「今度会った時に伝えるつもりです。最後は自死をするつもりだと、他の誰の手も汚させないと。……深層への遠征に拘っているのは、それが理由の一つでもあります。道筋を覚えたいんです。失敗して解き放ってしまったって、深層でなら地上の人達が逃げる時間くらいは出来ますから。それが誰にとっても最善です」

ディアンケヒトは、遂に脱力した。

もう何も言い返すことが出来なかった。

言い返す気力すら、奪われてしまった。

……正しいことを言っている。

こいつの言っていることは正しい。

だが正しいことが必ずしも良いことではないように、こいつの言っていることが必ずしも受け入れられる内容ではない。

自死など、神として、親として、最も許せない行為の一つだ。子供に対して、最もして欲しく無い行為の一つだ。

だがこの女はそれを進んでしようとしている上に、その行為が他の誰からも望まれていることであると理解してしまっていて、それを受け入れてしまってもいる。

……そのための努力を、しようとしている。
自死のための努力を、始めようとしている。

「……部屋に戻れ。休みもお前の好きに取れ、売上を気にする必要もない。そんなもの、儂が居ればどうとでもなる」

「承知しました。それでは、失礼いたします」

ノルアが部屋を出て行く。

目の前から、化け物が姿を消す。

そしてその瞬間をディアンケヒトは下唇を噛みながら待ち、扉が閉じた瞬間に思いつきり頭を机に打ち付けた。

……最悪の気分だった。

いつも最悪の気分だ。

あの馬鹿女とこういつた馬鹿げた話をした後、扉が閉じた後、襲つて来るのは本当に最悪の気分だ。

扉を閉じた瞬間に、化け物は消え、先程まで目の前にいたのが一人の人間の女であるのだと理解させられ、吐きそうになる。

あんなことを言っていたのが悍しい怪物ではなく、自分の可愛らしい眷属の一人であるのだと本当の意味で理解させられて、それまで抱えていた感情を数倍にも増して叩き付けられるのだ。

怒りも増す。

悲しさも増す。

後悔も増す。

神である自分の心が大きく乱される。

「クソッ！クソッ！！クソがアツ！！」

何度拳を叩き付けたところで、変わることは何もない。今日まで何も変わりはしなかった。出来ることなど何もなくて、ただこの無力感に浸されるだけだ。何度この全知零能な肉体を憎んだだろうか。全知零能などと言いながら、決して全てを知っている訳では無い自分自身を罵倒しただろうか。

神力を使つたところで、解決はしない。むしろ根本に対して影響を与えてしまい、事態が悪化する可能性すらある。

だから未だ天界に居る神の誰も干渉していないし、願っているだけ。何事もなくあの女が死ぬことを。

「……ああ、また酒の量が増えるな」

こんな時、愚痴を言える相手が居たらいいのにと。思わずそう思ってしまうくらいに、ディアンケヒトは弱々しくなる。

そんなことが出来る相手など、自分で突き落とし1柱くらいしか思いつかばなかったが。

18. 青い

薬剤を調査しながら、チラと窓の外に目を向ける。

今日もオラリオは活気に溢れていて、人々が笑みを浮かべて闊歩している。

誰もが出来る様な物ではない難しい薬剤の調査は率先してノルアが行なっている。そもそも、その薬剤を調査できる様な優秀な人材にはもつと別の場所で活躍して欲しいからだ。

人の前に出られないノルアには出来ることが限られていて、優秀な人材が育つほどに、その仕事もまた減っていく。ここ1週間、ノルアとアミッドが居なくとも仕事が回っていたのがその証左だ。

普通の仕事であるのなら2人がいなくとも既に問題ない。むしろ緊急時であっても、アミッドさえ居れば何の問題もない。究極的に言えば、ノルアは別にこのファミリアに居なくともいい。絶対に必要な人材では決してない。

(……そもそも)

別にノルアが居なくとも、世界は回る。

明日からもオラリオは存続するし、冒険者達のやることも変わららない。明日死ぬ冒険者は明日死ぬし、生き残る冒険者は生き残る。泣いたアミッドの目を拭うのはノルアでなくとも出来ることであり、結局のところ、こうして生きている現状は全部自分のため。

「……たくさん薬を作れば、許して貰えるかな」

生きながらえていることに。

今直ぐに死なないことに。

許して貰えるだろうか。

「来世は……許して貰えるのかな」

普通の人間として、生まれることが出来るのだろうか。

ああして市場を何の憂いもなく笑いながら歩いて、ファミリアの人達と仲良くなつて、色々な人達と手と手を取り合つて。そんなことが出来る様になるのだろうか。

少し前までは、ほんの僅かな時間ではあつたけれど、そんな時も

あつた筈なのに。今はもう遠い話で、実感すらなくなっていて、想像すら出来なくなっている。

部屋から出たい。

誰かと話したい。

誰かに触れたい。

そんな欲求を抑え付けながら、薬剤を作る作業に没頭する。

ああ、これでは誰でも良いみたいを考えているみたいにも思えて、自己嫌悪にも陥る。

死にたいとは思わない。

むしろ死にたくなんかない。

けど死んだ方がいいとは思っている。

……時々思う。

アミッドと関わったことは本当に正解だったのかと。

あの頃は生まれて初めて自分を人間として見てくれる彼女と出会えて、嬉しくて、幸福で、他にどうしようもないくらいに溺れてしまっただけだ。そのせいで彼女をこうして傷付けることになってしまってもいる。

もしアミッドが居なければ、とうの昔に自死していたと言い切ることで出て出来る。ただ、その方が何もかもが良かったのではないだろうか。

アミッドはノルア・コルヴァスと出会うことなく、ロキ・ファミリアの団員達と仲を深めながら過ごし。男神ディアンケヒトや女神ヘファイストスも余計な気を割く必要がなくなり。フィン・ディムナやリヴェリア・リコス・アールヴを含めた何人かの冒険者達にも、余計な悩みを与えずに済んだ。

(長く生きれば生きるほど、罪は増える……)

早ければ早いほど、他者に与える影響は少なくて済む。今やもうどうしようもないところまで来ているけれど、それでも引き伸ばすより今この瞬間に片を付けた方がよっぽどマシな結果になる。

……そう考えて思わずこうして首に手をまわしかけるのも、一体何度目だろうか。結局はやらない癖に、出来ない癖に、こうしてポーズ

だけは取りたがる。そんな自分にも吐気を催す。

(少しでも、役に立って……少しでも、人を救って……最後に迷惑を掛
けなければ、それで、許して貰えるかな……)

だからノルアは医療者という現状を維持する。

ディアンケヒトに言ったような理由以外にも、この職が直接的に人の命を救うことが出来て、それ故にほんの僅かにでも救いを貰うことが出来るから。少なくともそうしている間は、自分は人間の味方であり、人という枠の中に入れて貰えている気がするから。続けている。

今頃は新薬の治験が別の部屋で行われているだろう。

効果は問題ないと思っっている。

その権利はファミリアに帰する。

ノルア・コルヴァスの名前は残さない。

可能な限り、後世に自分の名前は残さない。

思い出して欲しくないから。

薬の命名も他人に任せた。

明日にだって仕事の引継ぎが出来る準備は常にしている。

「っ」

疾る頭の痛み。

一瞬見えたのは、また、ロキ・ファミリア。

剣姫を含めた何人かが、ダンジョンの中で、あの蔓型のモンスターや前に会った赤髪の女と死闘を繰り広げている光景。それほど遠い話ではない。その中には恐らくヘルメス・ファミリアと思われる人達も居て、何人かの死体も見えてしまう。

「……私に、どうしろと」

ダンジョンの中で年間何人の冒険者が死んでいると思っっているのか。

一度はそれを何とかしようと思っただけだが、結局は逆にその全ての原因がノルア・コルヴァスにあったのではないかと疑いを掛けられてしまった始末。

動けば動くほどに立場が悪くなってしまっうのに、こんなものを見せつけて、嫌がらせ以外の何であるのか。

どうせ向かったところで敵の一味だと思われるだけ。

むしろ敵からも攻撃を受けて、危険が増すだけ。

この事を他の人に知らせても、やはり敵の一味だと思われるのだろう。そんなことはもう知っている、何度も体験した事だ。関わりたくない、知らなかったことにしたい、けれどそうしてまた死者の顔を見せられる度に自分は罪深い存在になっていく。

「……行くの？本当に」

行きたくない。

むしろ何故自分が行って状況が良くなると思うのか。それこそ驕りだ。むしろ自分の存在に驚いたことで状況が悪化する可能性だけである。

だからすべきことは、忠告程度。

でも果たして、それでいいのか……？

「アイズを助けてやって欲しい」

「つ……私の助け、まだ必要ですか？」

あの時とはもう違って、彼女の周りにはたくさん、自分とは違ってたくさんの、仲間が居るのに。彼女自身も成長して、強い冒険者になったのに。それより弱い自分なんか、本当に。

ノルアは再び調査を始める。

当初のノルマを含めた今の仕事だけでも終わらせて、役割は果たさなければならぬ。予知を探るのはその後だ。

自分が行って何とかなるのであれば、そうすればいい。考えるのは予知を見た後でいい。だから今は自分の全部を押し付けて、只管に、作業へと逃げる。

あと1時間もすればアミッドは帰ってくる筈だ。

それまでは道具のように手を動かす。究極、ノルアが人間性を見せ

るのはアミツドの前だけでいいのだから。……せめて、心まで人間をやめることが出来ていたのなら、もう少しくらい楽だったろうに。

その日、アミツドは“青の薬舗”を訪れていた。

”青の薬舗”とはミアハ・ファミアリアの本拠地であり、アミツドがここを訪れる理由はディアンケヒト・ファミアリアとして貸し出している借金の回収のためである。

……というのは建前。

実際にはミアハに対して密かに想いを寄せているアミツドが、定期的に顔を合わせに行っているに過ぎない。そもそも主神のミアハが知人にホイホイとポジションを配っているお陰で常に火の車であるファミアリアの現状、借金だつて毎回返せている訳ではない。ディアンケヒトとしては法外な借金を押し付けてミアハが落ちぶれた時点で満足しており、回収出来なかつた事を伝えても、ニヤニヤとしながら嬉しそうに嫌味を言うだけ。

なにもかもが建前である。

そしてアミツドが選ぶのは、常にファミアリアにナーザ・エリスイスが不在にしていそうな時だけ。

「ああ、アミツドか。久しいな、もう支払日だったか」

「はい、お支払いは可能ですか？」

「ああ、問題ない。ここにある。……常日頃から苦労しているそなたに、余計な負担を押し付けたくはなかつたのでな」

「ミアハ様……」

アミツドの狙い通り、今この瞬間はミアハ・ファミアリアの唯一の団員であるナーザは不在にしていた。彼女と顔を合わせれば常に口喧嘩をすることになり、それはアミツドとしても決して望むところではない。

迎えてくれたミアハはやはりいつも通り神格者であり、どうやら自分のためにしっかりと準備をしてくれていたらしいことが伺えた。

ディアンケヒトのことも考えると、正直こうして支払いがスムーズにいき、かつミアハと2人で話せる状況というのは、アミッドにとっては何よりありがたかった。

「聞いたぞ、なにやら18階層でまた活躍したらしいではないか」

「それは……偶然状況に出会したに過ぎません。事を成したのはロキ・ファミアリアの皆様です」

「そなたは謙虚だな。しかしそれで助かった命もあると聞く、謙遜も過ぎれば毒だ」

「いえ……それに、その場で治療活動をしていたのは私だけではありませんでしたから」

「なに、そうだったのか。……なるほど、彼女か」

「はい……」

どうにも、18階層での出来事は既にオラリオの中でも広まっている様であるが、そこにアミッドが治療活動をしていたという話はある。ノルアが治療活動をしていたという話はないらしい。

呆れるくらいに、いつものことだ。

嫌になるくらいに、いつものことだ。

ノルアはそんなこと、もう慣れているのかもしれないけれど。

「……すまないな。そなたが信頼している相手だと分かっているにも関わらず、どうしても彼女には苦手意識を持ってしまう。公平でいるというのは、これがまた存外難しい」

「いえ、きつと仕方のないことなのでしょうから……」

仕方ない、などと口走った自分が気持ち悪い。

「個人的な感情はともかく、ヘスティアやヘファイストスがあれほど言う相手だ。彼女のことは信頼に足る人物だと、考えてはいる」

「……そう思っていたただけるだけで」

「ただ、彼女がアンフィス・バエナを単独討伐したという噂が既に広まり始めているのは知っているだろうか？」

「っ、何故それが!?そのことはまだ何処にも公表していない筈です!」

「やはりか……しかしどうも神々の間で、再び彼女を、その、”対処”しなければならぬという気合が高まり始めているように感じている」

る」

「どうしてですか!? ノルアはまだ何も……!!」

「アンフィス・バエナを単独討伐出来るほどの力を持っているとなれば、警戒してしまうのも当然と言えば当然だろう。それに彼女が無傷でダンジョンから出て来ているのを見た者も居たことから、更に尾鱈が付いてしまっている」

「ですがそれは！私が治療をしたからで！アンフィス・バエナの討伐だって簡単な話ではありませんでした!!」

「分かっている、それは18階層での件も含めれば少し考えれば誰にでも分かることだ。……しかし、彼女に限ってはそうはならない。神々も含めて悪い方向に考えるだろう」

「悪い方向……」

「今回の一件で、既にアンフィス・バエナを無傷で突破出来るほどにまで成長してしまっていると。手遅れになり始めていると。そう周知されてしまってもおかしくはあるまい」

「っ」

そもそも、何処からそんな情報が漏れたのか。

そんなの決まっている、ディアンケヒト・ファミリアの内部からだ。考えられるのは、帰ってきた日の夜。

ノルアがディアンケヒトに報告して、それに対してディアンケヒトが怒鳴り付けた時。中で行われている話を聞いていた人間が居てもおかしくはないし、それを面白半分で広めた者達だって居たのだろう。

ディアンケヒトは次の神会にて、今回の件を『ノルアとアミッドによるペア討伐』と報告するつもりだった。そうすれば多少は印象を和らげることが出来ると考えていたからだ。

……しかし、そうなる前に既に話は広まってしまっている。それも最悪な形で、最悪な方向に。

「それでは……もし、ノルアのレベルが上がったりしたら……」

「十中八九、”対処”の話が具体的な形で上がり始めるだろう。元々、ディアンケヒトやヘファイストスの脅しがあつての現状だ。神々の

中には未だに彼女の始末を狙っている者も多い。ここぞとばかりに立ち上がるだろう」

「ですが！ノルアはレベルを上げないと死んでしまうんです……!!」

「なに？そうなのか……？」

「はい……そうだと、聞かされています……」

「むう……」

レベルを上げなければ中の物に食い殺されてしまい、レベルを上げれば周りの人間に殺される。こんなのも一体どうしたらいいというのか。何故そうまでして、彼女を追い込もうとするのか。せつかくこうして、帰って来たというのに。

「……アミッド。デイアンに彼女のレベルを隠すように伝えるといい」

「え……？」

「なに、レベルの虚偽報告などヘルメスもやっていることだ。それにアンフィス・バエナの単独討伐に成功したというのであれば、レベル1つ分偽ったところで可笑しく思われることはないだろう？」

「それは、そうですが……」

「……アミッド、嘘は悪いことだと思っかな」

「悪いことでは、ないのですか……？」

「少なくとも、家族を守るための嘘であるのなら、私は悪いことだとは思わない」

「ミアハ様……」

否、そうではない。

現状、それ以外に手が無いのだ。

嘘について、誤魔化して、偽るしかない。

今から少しずつ『アンフィス・バエナはノルアとアミッドで討伐した』という情報を流しながら、レベルアップの報告を行わず、熱が冷めるのを待つしかない。穏便に済ませるのであれば、下手に情報を発信して有りもしない疑惑をより深めてしまうのであれば、こうするのが一番だ。

……それはつまり、デイアンケヒト・ファミリアがノルアのために

ルール違反を一つ背負い込むことになるのだけれど。それでもきつと、ディアンケヒトは領いてくれるだろう。当の本人のノルアだけは、渋るかもしれないけれど。

「……ありがとうございます、ミアハ様。本当に助かりました」

「いや、構わない。そなたが苦勞しているのは知っているし、彼女にも以前少し世話になったからな」

「そうなのですか……？」

「ああ、少し前に薬材が枯渇しそうだという情報をヘファイストスを通じて伝えてくれたことがあった。あの時は本当に助かったと、伝えておいてくれないだろうか」

「……分かりました、伝えておきます」

本当は直接伝えて欲しいけれど。

それが出来ないから、わざわざヘファイストスを通じて伝えたのだ。

……アミッドはその後、少しの雑談をしてから、ナーザーが帰って来ないうちに青の薬舗を出た。

今日の支払いはしっかりと貰えたので、このまま帰ってもディアンケヒトが何かを言うことはないだろう。大通りはいつものように商人や冒険者達でごった返しており、その平和な活気は見ているだけでも元気が貰える。

見上げれば気持ちが良い青空。ミアハに色々と話すことが出来たからか、なんとなくスッキリとした気分アミッドは僅かに漂う雲を見つめた。

「……どうして私ばかり、こんな幸福に浸っているんでしょう」

19. 希望の消失

「ロキ・ファミリアを助けに行く、か……お人好しも大概にしておけよ、馬鹿者」

「返す言葉もありません」

溜息を吐きながら輝夜はノルアを睨む。

時間を見つけて予知を繰り返し、ある程度の状況を掴めば、恐らくことが起きるのは2日後。全貌はまだ分かってはいないが、24階層の最奥・食料庫（パントリー）で恐らくは闇派閥との抗争が起きる。既に死者が出ることは確認しており、知る限りではそれはヘルメス・ファミリアの方からだった。

「……一応聞くが、お前が行く意味はあるのか？」

「タイミングにもよりますが、5人の死者を4人まで減らせます」

「それでも命1つ分か」

「事の最序盤から突入すればより多くの命を救えますが、私の個人的な目的のためにそれはしません」

「……というと？」

「予知が狂うんです。かなり先の未来で常に確定させている幾つかの事柄があります、今回の件は干渉し過ぎるとそれがブレるんです」

「なるほどな……」

「予知が狂わない中で、最大限動けても死者を1人減らすのが精一杯でした。残り2日間で他の可能性を模索してみれば分かりませんが……」

「碌なことにならないだろう」

「……………」

「いつもの如く、何故もつと早く来なかったのかと罵られるだけだ」
分かっていても。

何度も経験したことだ。

それでもなお、見えてしまったのだから仕方がない。見えてしまったのなら、1人でも救えると分かってしまったのなら、動かざるを得ない。

救えるのに見過ごすというのは、殺したと同義に思えてしまうからだ。少なくとも治療師として、そんなことは許されない。そうでなくとも2人は、自分の目的のために見殺しにすることになるのだから。

「……分かった、戦闘はするのか？」

「いえ。かなり激しい戦闘になりますから、私が前触れなく参戦すればむしろ犠牲者を増やしてしまいます。かと言って最初から参加すれば、予知が狂ってしまうんです」

「つまり、突入は戦闘が終わった直後か」

「はい、そこで1人は救えます」

「……食料庫を訪れる理由はどうするつもりだ？」

「……どうしましょう」

「おい」

「ごめんなさい、それについては本当に何も考えていませんでした」

「やれやれ……」

輝夜は呆れたように首を振る。

まあ別に理由としてはどうとでもなることだ。実際ステータスを上げるためにダンジョンに潜るつもりなのだから、鍛錬だのなんなのと言いつつすればそれでいい。

「襲われる危険性は本当に無いんだな？」

「今のところは」

「なら構わん、仕方なく付き合っただけ」

「ありがとうございます」

「……結局、闇派閥と関わることになるのか」

「申し訳ありません」

「まあいい、どうせ何れは相対することになっていただろうからな。……闇派閥と聞いて、あの愚か者が黙っている筈もない」

今は酒場で働いている、リユー・リオン。

きつと闇派閥の活動が増し、その話が彼女の耳に入ってしまったえば、また派手に何かをやらかすのだろうと輝夜は考えている。その時になれば流石に輝夜は動くつもりであり、そうなれば彼女自身にも色々面倒な事が巻き込んで来るのは間違いない。

輝夜としてはノルアを優先するつもりであるが、リユー・リオンが命の危機に陥るようなことがあれば話は別だ。今はノルアを優先するために生きていることすら明かしては居ないが、必要であればそれもしなければならぬ。

「私が生きている間に、闇派閥だけでもどうにかなるといいんですけどね」

「そこは微妙な線だな」

「フィンさん達も居ますし、私さえどうにかすれば、オラリオは大丈夫だとは思っています」

「それもどうだろうな。ダンジョンの到達階層の更新は止まったまま、黒龍も残っている。お前が居なくとも未来は暗いままだろう」

「黒龍はともかく、ダンジョンの方はロキ・ファミリアの皆さんが頑張ってくれるでしょうし」

「何れはあの女もダンジョンに連れて行かれるかもしれないな」

「……できれば、そうなって欲しくはないです」

「お前が遠征で活躍すればするほど、ダンジョン内での治療師の有用性も広がることになる」

「意地の悪いことを言うんですね」

「事実だ」

「正しい選択というものが、分かりません」

「そんなもの誰にも分からん、お前が決めることだ」

「それならば多分、自分は間違っているのだとノルアは思う。」

ノルアはアミッドの幸福を一番に望んでいるのだから。

そのための努力こそが正しい選択であり、それ以外は間違っている。けれどこうしてまたアミッドとは関係のない場所に行こうとしているし、またアミッドに余計な心配を掛けようとしている。

「……来世は、普通の人間に生まれたいんです」

「?なんだいきなり」

「もし救える命があるのに救わなかったら、やっぱり許して貰えないと思いますか?」

きつとその踏ん切りが出来ていないから、間違った道を進んでし

まっているのだろう。

アミツドの幸せと、来世の自分の幸せ。

その2つを天秤に掛けられていないから、こうして中途半端な選択ばかりを繰り返す。

「……お前は今日まで生きて来ただけで褒められるべき人間だ。むしろ神々の方からお前に謝罪が必要なくらいだろうよ」

「それこそ申し訳ないですね」

「もし次もまた同じように生まれて来たのなら、その時こそ滅ぼしてしまえ。神も、人も、お前の中の物も含めてな」

「ふふ、流石にそんなことは出来ませんよ」

「お前には常にその選択肢があるということだ」

「……………」

「その選択をしなかったというだけで、お前の存在は何千何万もの命を救っている。今更1人や2人見殺しにしたところで、誰がお前を責められるよ」

もしノルア・コルヴァス以外の人間が、同じ立場になったら。もし選ばれた人間がノルア・コルヴァスで無かったら。

それは彼女を知っている人間であるのなら、一度は頭に浮かべなければならぬことだと輝夜は思う。この女は確かに脅威ではあるが、その脅威を抑え込んでいる立場でもあるのだと。

「そもそも、お前より地獄に落ちるべき人間が他にどれだけいると思っっている。自意識過剰も加減しておけよ、馬鹿者」

「……………ありがとうございます」

来世に期待が持てるだけ、持とうとしているだけ正しい生き方が出ているのだ。来世に対する期待など当に捨てた人間が、この街には多く居るのだから。

「ノルア・コルヴァスさん……ですか？」

「うん、ディアンケヒトのところの副団長をしているみたいなんだけ

どね。少し前にヘファイストスに紹介して貰ったんだ」

とある廃れた教会の地下、そこが最近生まれた小さなこのファミリアの本拠地。色々特徴的な1柱と2人は、なんとなしに広がった話の中で例の女の話題を出していた。

「サポーターくんは彼女のことを知っているかい？」

「ええ、まあ。」白焰（レフ・フローガ）” と言えば、むしろリリのような日陰者にこそ有名なお方ですから」

「そうなのかい？」

「はい。あのお方は、その、見るだけで頭がボーっとしてしまうくらい嫌な感じのする方なのですが……」

「見るだけで!？」

「偶に貧民街に来ると、そんなリリ達を治療してくださるんです。何も言わずに黙々と治療だけをして、いつも無言で去ってしまうのですが」

「えっと……良い人、なんだよね？」

「正直よく分かりません。ただ、ディアンケヒト・ファミリアの最高位の医師の治療なんて、お金がなければ絶対に受けられませんから。治療と一緒に何か悪い魔法を掛けられている、なんて話もあります」

「え、ええ……」

リリルカ・アーデという小人族のサポーターが加わったのは、それこそ今日の今日の話。紆余曲折はあったものの、女神ヘステリアの唯一の眷属であったベル・クラネルに最初の仲間が出来た記念すべき日だ。そのような日に女神ヘステリアがわざわざあの女の話を出したのには、理由がある。

「サポーター君がそう思うのも仕方ない、彼女は恐ろしい爆弾を抱えているからね」

「爆弾……?ヘステリア様は何か知っているのですか？」

「ううん、なんて言えбайいのかな……例えば3大クエストが地上における最大の目標であるのなら、彼女という爆弾の処理は天界における最大目標な訳さ」

「……………??？」

ヘステイアのその言葉に首を傾げる2人。

思ったよりもスケールが大きい話だった。

そして意味がよく分からなかった。

ヘステイアも腕を組んで唸りながら言葉を出す。

「そうだなあ……例えば僕はこれでも天界ではかなり重要な立場に居たんだよ。それこそ12神の代表に選ばれるくらい、まあそれは辞退したんだけど」

「そ、そうだったんですか!？」

「なんか、意外ですね」

「おいおい、意外ってどういうことだい？失礼しちゃうな。……まあとにかく、僕は炉の神だからさ、特に火に関しては神の中でも相当に強い権能を持っていたんだよ」

「なるほど」

「彼女の中に居る爆弾は、そんな天界に居た頃の僕の大体1,000倍くらいやばい」

「……………え?。」

え?。

「彼女の中に居るのは本体の分身みたいなものだから、そこまで強い力は持つてないんだけど……本体の方がな〜り不味い。分かりやすく例えるなら、太陽そのものかな」

「た、たたつ、太陽ですか!？」

「例えば大き過ぎて分からないのですが!？」

「そうだよサポーター君、大きいんだよ。だから本体がそのままの姿で召喚されたら、地上も天界もその瞬間に諸共消滅してしまう」

「神様がたくさん住んでる場所ですよね!？」

「相手も異界の神だからね、しかも司る規模が違う。もし現実的な対処法を考えるなら、巨大な星を1つ使って無理矢理封印するとかになるのかな」

「現実的ってなんですか!？」

やはり神様や天界の話になると規格外というか、現実的な話が現実

的には見えなくなってくる。しかしそうなる問題は……

「そしてそんな怪物の髪の毛一本が、ノルア君になる訳さ」

「……あの、それって、かなり不味いのではないですか?」

「うーん……そこが微妙なところなんだよ。所詮は髪の毛一本、されど髪の毛一本だ。髪の毛を一本抜いたとして、相手がどう反応するのは相手次第だろう? 何処までが許容範囲なのか分からないから、天界も僕達も手をこまねいている」

「もしかして、神様が地上に降りて来た理由って……」

「いや、それは普通に僕の趣味だけど」

「あ、そこは普通に違うんですね」

とは言え、天界から降りて来る前にその辺りの話をチラと聞かされていたのは本当だ。直接会ってみれば何か他にわかる事があるかもしれないとヘステイア自身も思ったのだが、実際には正直知りたくないことも知ってしまった。

「まあそういう理由で、神々や地上の子供達が彼女に嫌悪感を持つってしまうのは仕方ないんだけど……ベル君、多分僕の眷属である君は別だ」

「え?」

「どういう事です?」

「ヘファイストスの眷属もそうみたいなんですけど、火に関する権能を持つ神の子達は、炎の影響を受けにくい……というより、炎に隠されたものが見える様になるらしいんだ」

「つまり、あの嫌な感じをベル様は感じないということですかね」

「速い話がそうなるね。さっきも言った通り、僕はヘファイストスより強い火の権能を持つてる。だから理論上、ベル君がこの街で一番彼女を人として見ることが出来る訳だ」

「なる、ほど……?」

火の眷属であるのなら、むしろ火の本質が見えてしまい、余計に悪くなるのではないかとも思うが、実際のところそれも当たっている。より正確に言うのであれば、彼女という人間と、彼女の持っている炎を分けて見ることが出来る。つまり「なんだか悍ましい女」から「な

んだか悍ましい物を持ってしまっている可哀想な女」という認識に変わる訳だ。

「つまりヘステイア様は、ベル様に”白焰（レフ・フローガ）”と仲良くして欲しいということですか」

「そこはベル君に任せるよ、気が合う合わないはあると思うし。……ただ僕の個人的な願いとしては、彼女に絶望して欲しくないんだよ」
「絶望……」

「彼女から爆弾を取り除く方法はない、彼女は近いうちにそれを抑え込めなくなつて命を落とすことになる。だからきつと、仲を深めれば悲しい思いをすることになるんだろう」

「……………」

「それでもさ、やっぱり最後は人として死なせてあげたいんだ。直接会つてそう思った。だからベル君には、仲良くならなくてもいいから、同じ人として扱つてあげて欲しい。サポーター君には難しいかもしれないけど、せめて、そういう事情があるってことだけは知つておいてくれないかな」

「……本当に、危ない人じゃないんですね？ヘステイア様」

「ああ、断言しても良い」

「そういうことなら、どうせ話すことも出来ないリリからは何も言うことはありません」

あくまで男神ソーマの眷属であり、耐性の無いリルカ・アーデは土俵にすら立つておらず、それ以上に口を挟むこともない。ただベルに危害が及ばなければ良い。そしてベルを大切に思っているヘステイアが、彼を危険な人物に近付けるようなこともしないと分かっている。

「ベル様はどうするのですか？」

「え？いや、それはその、会つてみないと分からないっていうか……神様がそこまで言う人なら会つてみたいけど、ディアンケヒト・ファミリアの副団長さんに会うことなんて早々出来ないし」

「まあ、それもそうですね」

「その……やっぱりその人、助からないんですか？」

「……うん、少なくとも僕には思い付かない。神の権能で無理矢理引き剥がそうと干渉すれば、むしろ本体を刺激しかねないからね」

「つまり、全滅ってことですね」

「そうだ。天界としては、彼女に関しては地上だけでどうにすることを求めている。本体が現れることを想定して、向こうでも色々準備をしないといけないから」

「どうにかって、どうにかなるんです?」

「その方法を、彼女に聞かないといけない」

「聞くって……」

それはつまり、相手に対して、どんな風に殺せばいいのかを直接聞くということ。人間として扱って欲しいと言っておきながら、そんなのはまるで人間に対してすることではないし、そもそもベルにそんなことが聞けるはずもない。……それに。

「なんだかんだ言いながら、ベル様をスパイに使うつもりなんじゃないですか?」

「いや、それを聞くのは僕の役目だ」

「!」

「君達はそんなこと気にしなくてもいい。そういう事情があることだけは知っておいて欲しいけれど、彼女と関わる中でそんな後ろめたさを感じて欲しくない」

「神様……」

「きつと彼女と関わることで、君は最後に悲しい思いをすることになるだろう。けど僕はそれをして欲しいと思っている。それはもちろん君自身の糧にもなるだろうけれど、生まれてからずっと犠牲になり続けている彼女の死を、1人でも多くの子供達に悲しんで欲しいからなんだ」

例えその死が望まれていることであっても、喜ばれるものであって欲しくはない。少しでも多くの人に惜しまれ、悲しまれるものでなければならぬ。

そしてその死の瞬間も、出来るなら、出来ることならば……

「ヘスティア様はどうして、それほど彼女のことを……?」

「……彼女は1から10まで僕たち神の被害者だからね。火の関係だから僕も色々と会議に参加させられたけど、立場上、色々悩んだものさ」

「責任を感じてるってことですか？」

「知れば知るほど、考えれば考えるほど、思い入れが強くなるのは当然だろう？全知全能の神にとって、出来ないことや無力を感じるっていうのは、結構ダメージが大きいものなんだぜ？」

実際のところ、ヘステイアが天界から降りて来た理由として大きいのはどちらなのか。どちらにしても、ヘステイアでは直接解決できないということは地上に降りて来て確定した。ならばもう、何も出来ることはない。

彼女を殺して、彼女の中から出てくる怪物をも殺す。

若しくは、彼女しか知らない様な解決法があるのであれば、それを聞き出す。

どちらにしても、楽しい話にはならないに違いない。

20. 未来の後悔

朝目を覚ましたら、珍しくノルアはまだ眠っていた。そういえばと思えば、彼女は今日は休みを取ってダンジョンに行く予定だと言っていて、そんなことを直前になって言われたものだから、アマツドは合わせての休みなんか取れるはずもない。

先日の1週間の休みでそれなりに仕事も溜まっており、青の薬舗に行くなりしていたこともあって、余裕なんか何処にもない。

一方でノルアの方は自分の仕事はさっさと終わらせているのだから、最初から今日を休みにする予定だったとしても、要領がいいというか何というか……

「……行つてきますね、ノルア」

寝息を立てている彼女の頭を撫でて、起こさない様に慎重に彼女の上を乗り越える。寝ていたのはいつも通り壁側だったから。立ち上がるのとベッドが軋んでしまうので、四つ足になりながらも慎重に……乗り越えようとして。

「ひんっ!?!」

突如として伸びて来た両手に、抱き締められた。

「おっ、おっ、おっ、起きてたんですかノルア!?!」

「ええ……なんだか、良い匂いがして」

「ちよっ、起きたばかりの臭いを嗅がないで下さい!?!というか離して下さい!?!」

「ん……あと2時間くらいは」

「あと10分でも遅刻なんですが!?!」

「アマツドは柔らかいですね……」

「ふ、太ってないですからね!」

「キスしてもいいですか……?」

「な、なな、なんで良いと思っただんですか!?!」

「耳に、ですよ……」

「耳だとしてもですけど!?!」

「ん」

「しました!?今しましたよね!?今キスしましたよね!？」

「してないですよ……」

「も、もういいから離して下さい!!」

顔を真っ赤にしながら、急いでベッドから降りるアミッド。明らかに冷静さを失った様子でノルアの方へ頬を膨らませながら見るが、彼女は布団の中から穏やかな笑顔で小さく手を振るだけ。

そんなことをされてしまうともう怒るにも怒れなくなってしまつて、一度溜息を吐いてから立ち上がる。

「……無事に帰って来ないと許しませんからね」

「アミッドも、頑張ってくださいね」

「……………」

言われなくとも、頑張っているつもりだ。

個人的には。

けれどノルアの様にさっさと仕事を終わらせることは出来なくて、起きた問題に対して即座に解決策を提示したりすることは出来ない。

自分の部屋に戻つて、着替えと髪を整える。

「頑張つては、いますが……」

アミッドの本音としては、ノルアに対しての嫉妬がないこともない。そして同時に、彼女に精神的に強く頼つてしまっている自分が居ることも自覚している。

もし彼女が居なくなったら、このファミリアの仕事の全てを一人で指揮していくことになるだろう。そしてもしそうなった時、果たして自分だけで十分な役割をこなせるのか不安で仕方がない。

アミッドが普段からしている業務より、ノルアがしている業務の方が難しく面倒なのは明らかだ。アミッドの忙しさを理解して彼女が進んでそういった仕事を引き受けてくれているのは知っている、彼女が最近それとなく自分の仕事を分配し始めていることも知っている。

けれどそれをされている団員達の大半は、アミッドと同じことを考えているだろう。

(この人が居なくなったら残業時間的な意味で絶対やばい……)

幹部陣に配られた引継ぎ書は、それぞれ書物1冊分。業務量自体はそれほど多くないとは言え、引き継がなければならない内容が多過ぎる。その上、どれもこれも交渉でどうにかなる内容ではない。一時的な頑張りで解決出来るようなものでもない。必要な知識も多岐に渡る。

そもそも、この材料とこの材料を組み合わせたら、どうしてその新薬が出来るという前提で計画がここまで進んでいるのか。いやまあ、予知なのだろうけれども。新薬一つを認定するのにどれだけ面倒な手順が必要だと思っているのか。

ここに書いてある全ての途中研究を理解して、完成まで漕ぎ着けるという内容の仕事（研究）までであった。しかも元はその幹部自身が途中で捨てた研究であるというのだから、最早嫌味ではないかというくらい。

他にもギルドや他ファミリアとの連携だったりとか、今後の治療師の立場の移り変わりだとか、掘れば掘るほど色々な課題が出てくる始末。

気になって他の団員達に普段どんなことについてノルアに判断を仰いでいるのか聞いてみれば、ちよつともう引いてしまう様な失敗話ばかりが聞こえて来てしまつて。どんだけ団員の代わりに地雷処理をして来たのかと。

実際のところ、ノルアが仕事分配をし始めたことを聞いて誰よりも早く顔を真っ青にしたのは、そういった地雷処理を彼女にぶん投げるような形でお願いしていたファミリア中堅の団員達である。責任ある立場を任されながらも、どうしようもないミスをしてしまい、他の幹部達には到底言うことが出来ず、手紙で地雷処理を依頼していた彼等にとつては、ノルアが居なくなるというのは考えたくもない損失なのだろう。

確かにノルアが居なくともファミリアの仕事は回る。ただこれまで表面化して来なかった問題が大量に浮き出てくるというだけだ。そしてこれから見込める彼女が仕込んでいた凄まじい利益と、これから生じる筈であった大量の課題と向き合うことになる。つまりは阿

鼻叫喚の地獄絵図。

「……副団長という立ち位置が、居なくなっても問題ないだなんて。本気でそんなことを考えている様なら引っ叩いてやりたいですね」

自分自身、ノルアが居るから安心して今の団長という立場でやっていられるのだから。最初から自分一人であったのならまだしも、ずっと支えてくれていた人が急に居なくなって、それまで通りになんて出来る筈もないのだ。

「ノルア」

「行きましたか?」

「ああ、お前の言う通りな。どうやら気付かれてもいないらしい」
「良かったです……」

ダンジョンの3階層、主となる通路から少し離れたその空間。ノルアはフードとマスクを取り、戻って来た輝夜からの報告を受けて、安堵の息を吐く。

「狼男と金髪のエルフ、あとは黒髪のエルフの3人が走って行った。ここから30分後に出発で良いんだな?」

「はい、今回の件はタイミングが重要ですから」

「異常事態は想定しているのか?」
「それも含めて私達がタイミング通りに辿り着くのは確定しています。距離的に多少時間が合わないので、恐らく何かしらの妨害はあるでしょう」

「軽く言うな」

「あの蔓状のモンスターは根城ですから」

「私に火力を期待するなよ、物量で攻められれば守り切れん」

「ええ、承知しています」

そこから30分、先行した剣姫とヘルメス・ファミアはそろそろ突入する頃だろうか。

ヘルメス・ファミアの面々も知らない訳ではないし、何人かは顔を合わせたこともある。特に団長を務めているアスフィ・アル・アン

ドロメダは昔少し話したことがある。彼等の仲間を見殺しにする様な形になるにも関わらず、救世主面しながらこれから向かうのだから、本当に凶々しいと思わざるを得ない。

特にこの件で最も心に深い傷を負ってしまったのは、チラと見た予知の光景的にロキ・ファミリアのレフイーヤ・ウイリデイスだろう。ノルアは彼女とはまだ言葉を交わしたことは無いとは言え、その情報だけは知っているし、以前に酒場で顔を見た。あの時の様子を見るに、もう既にまともに会話を出来る関係ではないのだろうか。

「ノルア、今日の予定の中にステータスを上げる算段はあるのか？」

「……すみません、正直無いです」

「それなら両手を縛った状態で先行しろ。モンスターを倒す必要はない、ただし予定の時刻には絶対に遅れるな」

「……相変わらず厳しいですね、輝夜さんは」

「遠征に行く前にレベルを上げるのだろう、時間が無い」

「はい、わかりました」

正直に言えば、相当キツイ。

そもそも以前にアミッドと潜った際にも片手を縛っただけで厳しかった。人によっては無茶というかもしれない。けれどそんな無茶を出来る機会というものが、安心して無茶を出来る機会というのがこれまでのノルアにはなかった。ダンジョンに潜るにも遠征に着いて行くにも、信頼できる仲間など居らず、むしろいつ背後から刺されてもおかしくない状態。そんな頃と比べれば、心から信用できる輝夜が側に居てくれるという安心感は相当なものだ。だからこうして輝夜からの無茶振りの様な指示にも応える。それも全て自分のために言ってくれていることだと分かっているから。それくらいしなれば間に合わない、そう言ってくれているから。

「アミッドさんって、副団長とどういう関係なんですか？」

「えっ？」

そんなことを聞かれたのは、アミッドが新人の女性団員と食事をし

ている最中のことだった。昼休憩を取るために近くの店を紹介して入ったそこで、突然そんなことを聞かれた。

「どういう関係、と言いますと……」

「いえその、朝アミッドさんが副団長の部屋から出て来たところを見てしまいました……一緒に寝てるのかなあと」

「う……ま、まあその、一緒に寝ては、いますか……」

「付き合ってるんですか？」

「っ、つき!?!私とノルアは姉妹の様な関係なだけで……!!」

「あ、そうなんです。私まだ副団長と会ったことないので、どういふ人か分からなくて。てつきり男性なのかと思ってました」

「……………」

新人とは言え、団員が副団長の顔どころか性別すら知らないというところに少しの問題を感じながらも、アミッドは息を吐く。

しかしまあ確かに、人によってはそう思ってしまうのも仕方ないのかもしれない。この年になって寝床を共にしているとすれば、同性と言えどそういう関係であることを疑われてしまうのは当然であるし。実際アミッドとノルアの距離感は単なる姉妹や女友達であったとしても近過ぎる。

(け、今朝なんてその……キス、されましたし……)

耳にであるが。

確かに普通の姉妹はこんなことしないだろう。

それも19にもなって、あんなこと。

とは言え、する方もする方であるが、されるがままになっている方も問題である。しかもそれが普通に嫌ではないというところも問題で。

「なんか不思議な人ですよー、副団長さんって」

「不思議？」

「ええ。だって先輩方も凄く避けてるのに、凄く頼ってるみたいなどころあるじゃないですか？全然顔見たことないですけど、存在感だけはあるといふかー」

「……………いつも引きこもっている訳ではありませんよ、偶には市場に出

て調査もしています。治療の手が回らない時や、緊急の依頼が発生した時、他にも薬材が不足した時なんかもですね」

「へえ、なんか意外ですね」

「本当に頼りになる人ですから」

そうは言っても、あの日、デイアンケヒトと共にお酒を飲みに行つてから、ノルアは殆ど外に出ることは無くなってしまった。外に出る時には目を隠すのは当然として、フードを被ったり、自分の姿をなるべく隠す様に始めている。

あの日誰に何を言われて、そうし始めたのかは分からない。けれどそれまではどんな目で見られようとも外に出ていた彼女が自分の身を気にし始めた。否、気にしなければならぬようなことを言われたのだろうと思う。

……普通の人間として、普通に混じって生きてはいけないのだと、そう突き付けられてしまったのだろうと思う。

「つて事はカッコいい系なんですかね、副団長さんって」

「え？……そ、そう、ですね。確かにカッコいい女性ではあるでしょうか」

「いいですね、カッコいい女の人って憧れるんですよ。あー、カッコいい大人のお姉さんと結婚したい……」

「結婚つて、貴女は女性ではありませんか」

「ん？でも性別とかどうでも良くないですか？」

「え？」

クルクルとスパゲティを巻きながら、新人の彼女はそう言う。新人とは言え年齢はアミッドと然程変わらない。このファミリアで長く働いて来たアミッドと同じくらいの時間を、彼女は別の場所で生きてきた。

「ん？……男性と恋愛するのと、女性と恋愛をするの。何が違うと思います？」

「それは……子供が出来る、とかでしょうか」

「逆に言えば、それくらいしか違いなんて無い訳じゃないですか？子供を諦めたら、正直相手の性別どっちでも良くないですか？」

「……そう、なんででしょうか」

それは少し極論の様な気もするが、言いたいことはなんとなく分かんなくもない。異性を選ぶ意味というか、しかし恋愛において選ぶというのも違う気がするのはアミッドがまだ若いからなのか。損得で語るのとは違うような気がどうしてもしてしまつて。

「私、どうも生まれ付き子供出来ない体質みたいなんですよね〜」
「!」

「まあそれは諦めてるので別にいいんですけど、個人的に付き合つて楽だったのは何故か同性だったんですよ。元々子供なんて出来ないのは承知の上だったからかもですけど」

「それは……」

「男でも女でも、どうせ子供が出来ないなら自分が好きな方と居たいじゃないですか。私がオラリオに来たのも、カッコいい女の人を探すためです〜」

「そ、そうだったんですか?」

「探索者の女性なんて気が強くないとやってられないと思いますからね。父親が村の医者でその手伝いもよくしていたので、治療系ファミリアが丁度良いかなって」

それは理由としては不純であるのだろうが、実際この新人の女性、新人にしてはかなり優秀である。多少専門的な話をしてでも難なく付いてくるし、最低限の器具の扱いは心得ている。何より血や臓物を見ても顔色一つ変えない胆力、これは才能と言つてもいい。そこに彼女の趣味も合わさるのであれば、それは正しく天職と言つてもいいのかもしれない。

「団長は好きな人とか居ないんですか?」

「え?……好きな方、ですか?」

「団長くらいになると有名な冒険者とも面識があるんでしょうし、1人くらい居たりするんじゃないんです?」

「それは……」

ふと頭を過ぎつたのは、神ミアハの顔。

想いを寄せては、いるのだろう。

特別意識しているのは自覚している。

常から女性から人気のある神格者である彼は、むしろ惹かれない方が不思議と思ってしまうくらいに神物だ。自分もまた彼と会う度に不思議と胸を高鳴らせ、会話をするだけで幸福感を得ている事実がある。

「も・し・か・し・て、実は副団長のことが好きだったりするんですか？」

「えっ？」

頭が白に染まる。

「いや、割と居るんですよ。同性同士の恋愛を否定する人ほど、実は身近に心当たりがあったり、強い興味があったりとか」

「そ、そんなことは……」

「でも毎日いっしょに寝てるんですよ？」

「そ、それはそうですが……！ノルアと私はその、本当にただの姉妹の関係で！」

彼女と自分は、決してそういう仲ではなくて。

「団長、そういうのが簡単に分かる方法、教えてあげましょうか？」

「そ、そんな方法があるんですか……？」

「簡単ですよ。その相手と自分が抱き合ってキスをしている姿を想像してみればいいんです、それも思いつきり濃厚な」

「なっ、ななっ!？」

「そこで少しでも嫌悪感や抵抗感が出て来れば、それは単なる友愛かもしれません。ただ、嫌ではなく、むしろ求めるくらいであるのなら、その気はあると思います」

そんな不埒なこと、そんな、ノルアを汚すような想像、出来る筈がない。しかし新人の彼女は迫るようにして視線を向けて来るし、むしろここでやらない方が怪しく思われてしまうだろう。

（あ、あくまで否定するため……純粋な関係だと、証明するためですか
ら……）

顔に上った熱を抑えながら、目を閉じて想像してみる。

自分より背の高い彼女に抱かれながら、自分は彼女の顔を見上げて

いる。

(……違う、ノルアならきつと)

ただ立って抱き寄せるだけなんてしない。

むしろ意地悪をする様に顔を近付けて来て、抱き寄せるどころか抱え込んで来るだろう。こちらが明確に嫌がらない限りは今日の朝のように少し強引に迫って来て、壁とか、ベッドとかを使って、逃げられないように詰めて来て……奪われて……

そのまま、されるがままに……

「い、いやいやいやいや、いやいやいやいやいや……!!」

「どうしました?キス以上までいっちゃいました?」

「行ってませんが!」

「キスは出来たんですねえ」

「なっ!そ、それは違っ……そ、そもそも私にはミアハ様というお方が……!」

「へえ、団長はミアハ様がお好きだったんですか」

「しまっ!」

人は慌てると碌なことにならない。

口が簡単に滑ってしまっし、余計な情報を与えてしまっし。

「そうしたら今度はミアハ様で想像してみたらどうですか?」

「なんでそうなるんですか!」

などと言いつつも、結局は言われるがままに試してみる事になってしまっしアミッド。

先程と同じように瞳を閉じ、想像を深めて広げて行く。相手は男神ミアハ……彼は一体どういった雰囲気ですう……といったことをして来るのだろうか。例えばそう……

「……………」

「……団長?どうしました?」

「……………」

「ああ、想像してる間にミアハ様の顔が副団長に変わっちゃうんですね」

「だからなんで分かるんですか!!」

「それくらい衝撃が強かったのかなあって」

ああそうだとおも。

彼女の言う通りだった。

ノルアとそういつた行為をするという想像自体の衝撃があまりに強過ぎて、逆に神ミアハがそういつた行為をするという想像があまりに出来なさ過ぎて、無理矢理想像しようとすると思自然と思考がそつちに寄って行ってしまう。

というか、一度してしまおうとノルアとのシーンがあまりに簡単に再生出来てしまうのも悪い。そもそもキスに関する知識なんて殆どないアミッド、想像出来るパターンというのが殆どない。強引に抱き寄せられて奪われて、そのまま身体に力が入らなくなるまで好き放題されて……:よりによって唯一再生出来るのがそれなのだから、ミアハがそんなことする筈もなく、解釈違いに拒否反応が起きてしまつて。

「ちなみに副団長とはどこまでしたことがあるんですか?」

「どこまでもしてませんけど!?!」

「手を繋いだりとか」

「それくらいは、まあ……」

「抱き合ったりとか」

「偶には、はい……」

「耳とか首にキスされたりとか」

「しっ、しっ、してませんが!?!」

「ああ、したんですね」

「してませんが!?!」

「多分それ副団長からですよ? なんだ脈ありじゃないですか」

「親愛のキスですから!!」

「単なる親愛で耳にキスするとか、むしろ気持ち悪くないですか?」

「家族が頬にキスするとか! そういうのです!」

「じゃあ耳じゃなくて頬で良かったと思うんですけど」

「~~~~!!」

何を言つても打ち負かされる。

悔しいが言葉が出ない。

……だって実際、嫌ではなかったし。

もし本当に嫌であったのなら、もつと明確に拒否の反応をする筈で。しかしだからと言ってそれは容易く受け入れられる事実でもなく、足を踏み外せば元に戻れなくなるような恐怖もあって。

「全部気のせいです！」

「別に良くないですか？好きな人が2人居たとしても」

「気のせいですから!!」

「……………」

なんだか冷ややかな目を向けられる。

しかし今の距離感がベストであり、これ以上変なものを持ち込みたくないと思っっているのも事実だ。そうでなくとも考えなければならぬことも多く、こんなことで余計な乱れを生じさせたくない。変に拗れていられる時間も余裕もないのだから、現状を変えたいとはアミッドは少しも思わない。

「……………後悔しないといいですけどね」

2.1. 信用

「いやはや、まさか怪物進呈（パスパレード）をされるとは、運が良いなノルア」

「はあ、はあ、はあ……」

「くく、流石にキツいか」

「……モンスターを、倒さない方が……苦しいん、ですな」

「当然だ。倒せば余裕が生まれる、逃げ場が生まれる。だが倒さずに逃げ続ければ追い詰められるばかりだ、そうして命を落とす冒険者も多い。怪物進呈から生き延びるコツは、逃げながらも適度にモンスターの数を減らすことだ」

23階層から24階層へと繋がる階段の中腹部分、盛大に息を切らして疲弊しているノルアを見て輝夜は笑う。

18階層を素通りし19階層へ入ったところ、突如として現れた大量のモンスターを引き連れながら逃げてきた冒険者のパーティ。そのパーティの中には何人か怪我をしている者も居たことから、大量発生したモンスターに追われているというのは疑いようもないことであり、ノルアと輝夜はそれを押し付けられたのである。

『モンスターを倒すなよ、ノルア』

釘を刺す様にそういった輝夜に対して、ノルアは冷汗を流して只管に走った。24階層までには振り払わなければならないのに、わざとらしく速度を抑えて走る輝夜。それに合わせていればモンスター達に追い付かれてしまつて、倒さない程度に蹴つたり殴つたりしつつ猛攻を防ぐ。そうして23階層をなんとか踏破したところで、ようやくモンスターを殲滅する許可が出たというのが事の経緯だ。

「さて、目的の階層に着くには着いたが……確かにここからでも分かるくらいには少々騒がしいな」

「……ふう。時間的にはそろそろ最終局面といったところですが、今から走ればタイミング的には丁度ですね」

「僅かに遅れる異常事態の原因は怪物進呈だったという訳か」

「それを利用した輝夜さんの扱き、の間違いだと思えます」

「はっ、この機会を逃す手はないだろうが。ほら、さっさと行くぞ。1人は救うのだろうか？」

「ええ、それと白炎を出して行きます。これがあれば少しは印象もマシな筈なので」

「……常に出していれば良いのではないか？」

「いえ、その、魔力が尽きるよりポーションで私の腹が満たされる方が先になるかと……」

「それもそうか」

「……次の遠征では出しっぱなしにしていけないと言われているんですけどね。今のうちに最低出力での維持をコントロール出来る様にしておかないといけません」

薄らと掌に白炎を馴染ませながら、ノルアは24階層の奥へと走り出す。次第に見えてくる緑色の壁、そして徐々に大きくなっていく地響きと破壊音。入口は完全に閉じられており、侵入するには壁を破壊するしかない。

「ぶった斬る、先に行け」

「お願いします」

瞬間、一瞬の閃光と共に4度の斬撃が緑壁を襲う。四方形に切り裂かれたそれをノルアは蹴り飛ばしながら突入し、輝夜もそれに続いて後ろに付いた。しかし切り裂き突入しても壁はまた存在し、やはり目的地に突入するのはそれほど容易いことではないらしい。

「チツ……『深き夜の獄底に、神の愛子に見止められ、直ぐ愚かし人の道。濁り燻るみ心を、今見にしめて己のため、いそしむ吾を許しませー滅死開闢、アカノキドウ』」

「っ、魔法……？」

ノルアも知らない輝夜の魔法、居合と共に放たれた斬撃の嵐。遠距離攻撃の、範囲攻撃の、斬撃攻撃。その切れ味は凄まじく、容易く壁を引き裂いていく。

「あとは好きにしろー……ここから先はお前の仕事だ！」

「はっ」

『レア・ラーヴァティーン!!!』

「タイミング完璧です」

大きく空いた壁の穴のその先で、轟く魔法と炎獄柱。この瞬間を待っていた。

……全てを、なかったことにしてはいけない。その犠牲も、悲しみも、そしてその末の成長も。だからノルアが突入するのはこの瞬間でなくてはならなかった。

ここまで来れば勝利は確定し、苦痛も刻まれ、成長という実も成る。だからそれとは関係のない、否、影響の少ない犠牲だけは掬い取る。今回はそれが少ししかなくて、自分の都合を加味すれば1人分しかなくて、だから助けると決めていた。この後に様々な疑惑を立てられることになるに分かっていても、異様な目で見られ、また疑われることになるに分かっていても。自分の都合で見捨てる人間が生まれる代わりに、その犠牲を決して無駄にすることはなく、救えるだけのものは救おうと。

「地理焼却 (Fomalhaut)」

「え……？」

倒れているエルフの少女と、そんな彼女に覆い被さる様にしているドワーフの女性。

……助けられるのは、彼女だけだった。

既に死亡寸前であり、心臓、肺、食道、脊椎、胸椎への損傷に加えて出血多量。これほどの損傷を受けていながら即死でなかったのは、このタイミングであれば間に合ったのは、間違いなく彼女自身の屈強な肉体のお陰に他ならない。

「……その状態で助かるのか？ 本当に」

「助かりますよ。というより、助けます。脳くらい緻密な物はアミツドの力を借りないと難しいですが、心臓を治すことくらいなら私1人でも可能です。……ここまで酷いと流石に障害は残る可能性が高い

ですが」

「……十分だろう」

魔法による心臓の修復を行いながら、肺への損傷による窒息を防ぐための処置を施し、血に塗れながらも治療に最も効率の良い手順を思考する。一瞬でも、一步でも間違えれば彼女の今後の人生が大きく変わってしまう。

ノルアの魔法による治療は損傷後の即使用が最も効率良く、遅れば遅れるほど効力が下がる。

アミッドであれば纏めて治せるものも、ノルアは一部分一部分を解析し、手順を組み立て、最善を尽くし、時間を尽くし、それで漸く1人を救えるのだ。その分、修復の精度は高かったりするが、単純に命を救うという点に関してはノルアはアミッドに敵わない。こんな風に血みどろにならなければ、人を救うことが出来ない。

「あ、貴女は……」

「話しかけるな」

「えっ……」

「そいつに話しかけるな」

身体を起こしたレフィーヤに、輝夜はそう釘を刺す。人の命を1つ救うことが、そう容易いことではないと輝夜は知っている。実際にそれを受けた他でもない自分だからこそ、その難しさを良く知っている。

何時間もそのことだけを考えて、自分の怪我も負担も何もかもを無視して、驚異的な集中力で気を失いそうになるくらいに向かい合っていて、そうして漸く、1つを掬い上げることが出来るかどうか。生きている人間に構っている暇などない。死んでいる人間に構っている暇もない。

「輝夜さん」

「なんだ」

「この後、この空間が崩落します。それまでに延命措置を何とか完了させますので、完了と同時にこの人を外に出すのを手伝って下さい」
「分かった」

「崩落?.....っ!?!」

直後、ノルアの言葉通りに空間全体が揺れ始める。階層全体に広がる巨大なヒビ、そしてそうなるとう然そうなるという様にパラパラと振り落ち始める小さな瓦礫達。

「こ、これって.....」

「.....完了です!!輝夜さん!!」

「ああ!」

「え!?あ、あのっ!?!」

「レフィーヤさんは私が連れて行きます」

「ひ、ひいつ!?!」

問答無用、情けなし。

瞬間、元居た場所に降り落ちた人間の身体の何倍も大きな瓦礫群。輝夜は自らが切り裂いた穴の元へと走り飛び込み、ノルアもそれに続いてレフィーヤを担ぎながら飛び込む。レフィーヤにしてみれば突然現れた人間に攫われて、しかもその人が例の奇妙な人で、明らかに燃えている白い炎によって自分の足が焼かれているという凄まじい状況ではあるが、彼等がレフィーヤを守ってくれたドワーフの女性を治療し、今もこうして自分を助けてくれているということは確かだった。

背後からはヘルメス・ファミリアの生き残り達やアイス達も同様に走って来ているのが見えて、それにも同様に安堵する。

「あ、外に.....」

「レフィーヤさんごめんなさい、下ろします」

「え?あ、ひゃんっ!?!」

思っていたよりも乱暴に降ろされてしまい、軽く尻餅を付いたレフィーヤは恨めしそうにノルアの方角を見る。しかしその間にも彼女は未だ意識を取り戻さないドワーフの女性の治療に戻っており、額に汗を滲ませながらも鞆から取り出した様々な器具と魔法を両立させて手当てを行っていた。

.....正直に言えば、不思議な気持ちだった。

レフィーヤはロキ達から彼女についてのことをそれなりに聞いて

いたし、今だつて彼女に対する本能的な嫌悪感を感じている。彼女に触れられた部分を無意識に摩つてしまつていくくらいには拒否感もあるし、信用出来ないという思いだつて強い。……しかしそれなのに、あの白い炎があるからか、以前よりも少しは冷静に彼女の存在を見るのが今は出来ている。

確かにこれは不思議な感覚だつた。

例えるのであれば、今回の騒動の原因となつたあのオリヴァスとかいう男。あの男が道端で必死になつて自分の恩人の治療をしているのを見てしまったとすれば、同じような感覚に陥るだろう。

事実、彼女はこうして自分を助けてくれたドワーフの女性の命を救うために懸命になつてゐる。こうして自分を助けてもくれた。それは紛れもない事実だ。

しかし一方で得体の知れない根拠のない嫌悪感だけが、その事実に対抗しており、そんな風に思つてしまう自分の異様さを自覚していないが、この感覚をどうにもすることは出来やしない。

「レフィーヤ！大丈夫だつたか……！」

「フィルヴィスさん……！」

「っ、この女は!？」

「ま、待つてくださいいフィルヴィスさん！この人は、その、よく分からないんですけど治療してくれていて……！」

背後の穴から同じように出て来たフィルヴィスとヘルメス・ファミリアの者達が、その光景を見て一斉に再度の戦闘態勢に入る。レフィーヤはそれを見て必死に止めようとして、それでも冷静さを失つていたヘルメス・ファミリアの団員達が駆け出そうとしたところに、輝夜が立ち塞がった。

「邪魔をするのであれば全員斬り伏せるが」

「……」

その間違いようもなく格上の雰囲気と殺気に、団員達は吞まれて動けなくなる。レフィーヤだけでなく、フィルヴィスもまた腕を震わせていた。それほどに今の輝夜という人間の實力は研ぎ澄まされている。束になつても敵わない、もし勝てるとすれば……

「……治療、してるの？」

「そうだ、阻止するか？」

「……ううん、しない。その人はきつと、助けしてくれるから」

「……そうか」

唯一勝ちの目がありそうなアイズがそう言ったことで、団員達もまた武器を仕舞い始める。アイズに肩を貸されながらも鋭く輝夜を睨み付けていたベートもまた、舌打ちを切って目を背ける。

「輝夜さん！私のバッグから青い液体取って下さい……！手が足りないです！」

「な、なに？ま、待て……これか？こつちか？」

「そつちです！」

「こつちか！」

右手に取った物と、左手に取った物、正解は鞆の中に残ったもう一本の方だった。そんなら漫才のようなことをしながらも、次第に表情に余裕が出来てきたノルアを見て、どうやら大分状態は良い方向に近づいて来たことを悟る。

事前に情報を集めて用意しておいた輸血パックを輝夜に指示をして準備し始めたことを考えるに、止血も大分進んで来て、心臓の修復は完了した。

「……これで一先ず、命は大丈夫です」

「「おお」」

……先程まであれほど疑っていたにも関わらず、いざ仲間の命が大丈夫だと言われるとこういう反応をしてしまうのだから、現金なものだと輝夜は思ってしまう。実際に自分が同じ立場であればそうするだろうし、実際過去にそうなたただけに表には出さないが。分かっていても、納得出来るかどうかはまた別の話し。

「ここからは後遺症をどこまで減らせるかの勝負ですね……」

問題は脊椎の損傷、これの修復をどれだけの精度で行うことが出来るか。こういう作業は本来、それなりに技量の高い治療師が複数人で確認しながら行うものだ。アミッドが居れば後遺症など殆ど残らないくらいに完璧に仕上げる事が出来るが、流星に今回の件に彼女を

巻き込む気はなかったのだから仕方がない。

「……これを……これと、これに……配列のパターンが、ドワーフだから、こつちのこれが……じゃなくて、3番目の、その……」

もうここまで来ると素人には何がなんだかサツパリ分からないので、色々な器具を使い意味の分からない言葉を呟き、さつき以上に集中し始めたノルアを放って、輝夜は一応持つて来ておいたポーションの入った鞆をレフイーヤに向けて投げ付ける。

「請求先はロキ・ファミリアとヘルメス・ファミリアで良いか？」

「あ、それは……」

「全てヘルメス・ファミリアで構いません。……エリリーの治療費もまた、いくらでもお支払いします。ですからどうか、どうか彼女を助けて下さい。白焰（レフ・フローガ）」

「……頼まれなくともアイツは助ける。金よりも精々あのバカの悪評を取り払ってやれ、それ以上は望まん」

「……………」

そうしてそれから10分ほどで、漸くノルアの治療は完了した。

治療が終わると同時にその場で大の字で寝転ぶノルア。

目頭をぐしぐしと解しながら、彼女はドワーフの女性：エリリーに駆け寄っていく団員達を微笑ましげに見守る。

「……ありがとうございます、白焰（レフ・フローガ）」

「アスフィさん……」

「……貴女とこうして顔を合わせるのも、いつ以来でしょうか」

「アスフィさん、無理しなくてもいいですよ」

「っ」

「私達、もう帰りますから。私なんかのことより考えないといけないこともあるでしょうし、感じなければならぬこともあると思います。……私への気遣いは無用です」

その言葉通り、彼女は本当に帰り支度をし始める。本当にこれだけをしに来た様に見えるが、実際にこれだけをしに来たのだから仕方がない。これだけの戦力、帰りも問題ない筈だ。

それより長く接している方が負担を掛けてしまうということは

知っているのだから、さつさと前から姿を消すのが先決であるというもの。自身の手に宿した白炎はそのままにして、ノルアは一瞬ふらつきながらも輝夜の手を借りて立ち上がる。

「それではまた」

「……ええ」

そんな2人を見送ったアスファイは、一瞬仲間達に囲まれる未だ気を失っているエリリーの方への視線を向けると、直ぐにまた俯いて思考を回し始める。

……見透かされている、というよりは、内心を読み取る以前にそもそも展開を事前に予測してそれを前提に動いているというような感じ。仮にも仲間の命を救って貰ったのだから、それが例えどんな相手でも表面上は取り繕わなければならない。そんなアスファイの無理を、必要ないと言われた。これをどう捉えるべきなのか、判断に困る。

(それに……”輝夜さん”ですか)

治療の最中に彼女から出たその名前。

片腕、片目、髪型や服装も変わっている。しかし何処となく感じた既視感、そして隠し切れない美貌と所作。何より黒髪に極東風味の刀武器、そしてあの殺気と実力と来れば、その正体は他にはあり得ない。(生きていた？あの状況で？だとしたらリオンは知っているのでしょうか？……いや、知っている筈がない。知っていたらあんな事にはならなかった)

これをリユー・リオンに伝えるかどうか、それは非常に悩ましいところだ。本当に生き残っていたのであれば、あの凶行に走った彼女を止めていた筈だし、今日の今日まで彼女に会いに行かないなどと言うことがあるのだろうか？

そして彼女のノルア・コルヴァスに対するあの異様な入れ込み様。ノルア・コルヴァスに対して嫌悪感どころか、むしろ受け入れ、助力をしている。……あまり言いたくはないが、洗脳されているとか、手下にしているとか、そういう想像も頭を過ってしまう。

「……昔ヘルメス様と接触した時には、もう少しマシだったんですが」
神ヘルメスは当初からノルア・コルヴァスの討伐を支持している、

それは彼女という歪な存在が英雄となり得る芽を潰してしまう可能性があるからだ。彼女は这个世界にとつての激毒であり、その内面が普通の少女であればあるほどに、英雄という存在にとつて害悪にしかならない。英雄という存在を折るのに十分な要素となってしまう。

漸くエリリーが目を覚ましたのか、喜び笑い合う仲間達を横に、”輝夜”と共に歩いて遠ざかっていく小さな背中。滅ぼすことこそが正しいことなのだ、アスフィは知っている。きっとこの街の大半もわかっている。問題は、ただ正しいことをすることが本当に間違っていないのか。その自信だけが存在しないこと。

本当に殺してしまってもいいのか、本当に彼女を始末すれば全てが丸く収まるのか、その根拠だけが何処にも存在しない。

2.2. 乳繰り合う

遠征の前日、それは漸く実を結んだ。

「……Lv. 5、到達じゃ」

「…………良かった。ありがとうございます、ディアンケヒト様」

ギリギリ届いたステータス、なんとか間に合ったLv. 5。もしかすればLv. 4からLv. 5にかけての最短記録を更新したかもしれない、しかしそれは同時にそれほどの無茶をしたと言う証拠にも他ならない。ディアンケヒトは隠すことなく溜息を吐く。

「やれやれ、困った眷属よ。これでまた外からの風当たりは強くなる、理解しておるのか」

「してはいますが、選択肢が他にないので議論しても仕方のないことだと思っています」

「……愚か者め」

「申し訳ありません」

服を着なおし、向き直る。

ディアンケヒトも分かっている、何を言っても意味などない。忠告も意味をなさない。手元にはロキ・ファミリアから送られて来た遠征の詳細、その目的は59階層の踏破。参加条件は常に白炎の付与魔法を使用すること、そして常に最前線での戦闘に参加すること。

……あまりにも無茶な条件だ、しかしそこまで無茶な条件を突き付けて漸く安心出来る存在だということでもある。そこまで弱らせて、いつでも殺せる状況にしておかなければ、フィン・デイルムナは、それでも彼は慢心しない。

「生き残れる算段はあるのか?」

「新薬を開発したとお伝えしていたと思いますが、実はもう一つ並行して進めていた改良があります」

「なに?」

「簡単に言えばポーシヨンの濃縮です、少ない量でより多くの効果を得られる様に。それがこの固形の回復薬になります、主に使用を考えているのは青色の方です」

「……効果は？」

「舐めている間、もしくはそのまま飲み込んでもいいです。継続的に回復効果が得られ、回復量も十分以上のものが得られます」

「改善要素を言え」

「単純に恐ろしいほど不味いです。それと大量摂取によって目眩や腹痛、発熱などの副反応が発生します。また、継続して使用する場合は空腹状態を避け、胃と口で交互に摂取することが望ましいです。継続して欠片を飲み込ませた空腹状態のネズミが、5つ目の摂取中に胃痙攣を起こしました。改良の余地はまだあります」

「他には何もないな？」

「調べた限りでは」

「……ならば使い方を誤るな、儂から言えるのはそれだけだ」

「承知しました」

この女の数少ない信用できる部分に、薬師としての働きというものがある。色々と目を離せない人間ではあるが、この女は治療師として、そして薬師としては非常に有能だ。商売に関してはアミッドの手助けくらいしかしないし、金にならないことにはばかり手を出しているところがあるが、それでも最終的に誰よりも金を齎すのは、やはり薬師・治療師としての働きゆえ。

こういう場合を想定して密かに作っていたのだろう。確かにノルアの不快感を軽減する白炎を常に出し続けていられるのなら、周囲からの目も多少は和らぐ。それを長く続ける方法を模索し続けた先に行き着いた策なのか。

それにこの件については彼女は確かに嘘はついていない、だからディアンケヒトもそこは信用する。薬師としてのこの女は、信用する。

「……ノルア」

「はい」

「お前は神を恨んでいるか？」

「恨んでいません」

「……」

しかし、そこには少しの嘘が混じっていた。
だがそんなことは今更だ。

この女にはそれを出来る権利がある。

だからディアンケヒトはその嘘には動じない。

「お前は変わらん。ここに来た時から。妙に物分かりが良く、不満も言わず、かと言って必要とあれば勝手に動く」

「……………」

「だが、そろそろ文句くらい言うようになれ。好き勝手言われるばかりでなく、それを受け止めるばかりでなく、言葉の一つでも返してみろ。そうするだけで少しは楽になる。……勝手なことばかり言う儂等（神々）に、不満の一つでもぶつけられるようになれ」

「……………」

「無理に大人しく振る舞う必要はない、子供の様に泣いて笑え。そういう愚かさを、お前は他者に見せるべきだ」

「……そのようなことをしても、何も変わりません」

「少なくとも、お前を見る者の目は変わる」

「変わりません。どうせ何れ誰も私のことなんて認識出来なくなるのですから」

「っ」

「もうこの街の半数が私のことをまともに視認出来ません、姿を見せた瞬間に心を失ったように睨み付けるようになりました。フィンさん達だって何れはそうなります、その前に私が死ぬのが先かどうか程度の話でしかありません」

「貴様……………」

「だから私は泣きません。そんなみっともない姿をアミッドに見せたくありませんから。……私は最期まで、アミッドにとつて少しでもカッコ良く見える自分でありたいので。唯一私を普通に見てくれる彼女の前でだけは、私は最高に頼れる姉で居たいんです」

そうして女は、まだ許されてもいないのに頭を一つ下げて勝手に部屋を出て行く。あれはそういう女だ、一定のラインからは踏み越えて来る前に逃げていく。故にディアンケヒトは頭を手で押さえながら

今日何度目かの溜息を吐き、ただただ脱力する以外にない。

普段の金・金・金と快活に笑い声を響かせる彼の姿はそこにはなく、ただ愚かな眷属の行末を案じる老神が居るだけ。最近ミアハの元にも行っておらず、自分自身も徐々に活気が失われているのを感じている。仕方のないこととは言え、金に対する執着も薄らいで来ているような気もする。結局どれほど金を注ぎ込んだとしても、この悩みだけは解決しないのだから、当然と言えば当然か。

「なぜ、アミッドだけが……」

あの子の影響を受けないのか。
それだけが分からない。

火の神共は分かる、元々アストレアの所にいた女武者の方も、事情を聞かされているだけに理解は出来る。しかし最も身近であるアミッドがまともで居られる理由だけが分からない。

アミッドに特別なスキルがある訳でもなく、火に関する何かがある訳でもなく、ノルアと特殊な繋がりがある訳でもない。それなのに彼女だけが最初に出会ったその瞬間から全くと言っていいほどノルアに対する脅威や抵抗感を感じていない。その理由さえ分かれば何か突破口が見えてくるかもしれないというのに、誰にもその理由が分からない。

「……せめて納得のいく最期に」

なる訳がないと、分かってはいても。

せめて最悪の災厄にだけはならないように。

悪意の塊の様なその生涯が、その最期に強大な呪詛と成り果てることのないように。これまでの自らの選択の失敗を自覚しながらも、それだけは間違いを起こしたくない。

鍵はアミッドだ。

誰がどう考えてもそれ以外にあり得ない。

ここまで来ても選択を他人に委ねなければならぬ現状に、ディアンケヒトは少しくらい普通に相談が出来る神友を作っておくべきだったと少し気落ちした。

「!……明日の準備はもう出来たんですか?」

「ええ、準備万端です。時間があるなら一緒にお風呂でもどうですか?」

「あ、ええと……行きます。この仕事はもう明日に回しますので」
「それは良かった」

執務室。書類仕事をしていたアミッドが出来としては中途半端な具合であったものの、それを放り出して立ち上がる。

自然と出された手を取って、向かう先は大浴場。否、その横に設置された小浴場。基本的には昼は自由に、夜はノルアくらいしか使わないうように自然となってしまうたその場所。小浴場とは言っても2人分程度なら足を伸ばせるくらいの大きさはある、一緒に入る事になんの問題もない。周りからの目とか、噂とか、そういうことを気にしない限りは、便利な浴場だった。

「アミッドとお風呂に入ると疲れが取れやすくて好きなんです、聖女様はお湯を温泉に変える力とか持つてるんですかね」

「なにを馬鹿なことを、あり得ません。私は入浴剤か何かですか」

「もしそうならディアンケヒト様が良からぬ企みをしそうです、アミッドを使って温泉浴場を作るとか」

「ぜ、絶対にディアンケヒト様に言わないで下さいよ!?!?そんなの絶対に嫌です!!」

「言いませんよ、私だって嫌ですから。アミッドの出汁をオラリオ中にばら撒くなんて、これは私だけの物です」

「出汁とか言わないで下さい!?!?あと貴女のものでもないですからね!?!」

「……ん、ちよつと甘酸っぱいですね」

「飲んだんですか!?!今飲んだんですか!?!」

「冗談です」

「笑えない冗談はやめてください!!」

そんな頭の悪い会話をしながら、肩を寄せ合ってお湯を楽しむ2人。こういう裸の付き合いも実は割と久しぶりで、アミッドは妙に緊

張しながらこの場に居たりする。こういう日だからと勢いで承諾してしまったものの、まさかこの歳になって、こんな小さなお風呂に2人で入ることになるなんて思いもしなかった。

大浴場くらい大きいのであれば意識なんてせずとも済んだが、小さな風呂に2人で入るとなると、途端に何故だかいやらしい意味を感じてしまうのは不思議な話である。

普段から諸々の処理には気をつけていた筈だが、自分はみっともない姿を見せていないだろうか。剃り残しがあったりはしないだろうか。そんなことを考えるとこうしているだけでも凄く恥ずかしく感じて来てしまつて、アミッドはなんだか居た堪れない。

「アミッドの身体は綺麗ですね」

「っ!?そ、そうでしょうか……?」

「触つてもいいですか?」

「ええっ!?そ、それは……その、別にいいですけど……」

「では遠慮なく」

「んっ……あ、腕ですか……」

「?」

てつきりもつと他の……それこそ普段は見られないし触れない様なところに触れてくるかと思つたら、普通に腕を引き寄せてフニフニと触れて来る程度。ホツとしたような少し残念だったような、いや、自分は一体なにを考えているのかと一瞬冷静になりながらも、されることがまみにされる。

……くすぐりたい、何をそんなに触ることがあるのかと思つてしまう。普通に恥ずかしいし、顔が熱い。のぼせてしまったのかもしれない。

「ひんっ」

「ふふ、アミッドは可愛いですね」

「あ、ああああのっ!?」

「まあまあ、偶にはこういうのもいいじゃないですか。身体任せてください」

「は、はい……」

突然抱き寄せられて、後ろから抱き締められる。耳元で囁かれ、背中に伝わる彼女の身体の感触。顔が熱いどころの話ではなく、心臓もこれほど跳ねたことはいつ以来なのかというくらいに強く動いていて、それが確実に彼女にも伝わっていると考えると、もうなんだか顔を見ることも出来やしない。

「……気付いていますか？」

「え……？」

「私の心臓も、鳴っているでしょう？」

「……あ」

それに気付いてチラと彼女の顔を見てみれば、彼女も恥ずかしそうに顔を赤らめていることに気付く。異様に心臓の音がうるさいと思っていたが、どうやらそれは自分のものだけではなかったからなのかもしれない。けれど相手も自分を意識していると思ってしまうと、余計に気恥ずかしさは増してしまう。

続く無言の時間。

そんな中でもチャプチャプと湯をかけてくれるノルア、アミッドはただ俯くばかり。

「……えいっ」

「ひやああっ!？」

「ん、やっぱり私のは触り心地が違いますね。柔らかいというか、指が沈むというか」

「なっ、ななっ、何をしてるんですかあ!？」

「いえ、少し気不味くなってしまうたので」

「こんなことをした方が余計に気不味くなりますよね!？」

「えつと……私のも触ってみます？」

「それで一体何が解決するんですか!？」

「多分?そんなに変な形でもないと思いますよ、はいどうぞ
「っ?!?!」

!左手を強引にノルアの胸の方に持っていかれ、ふにゅんと柔らかい感触が伝わってくる。

一気に頭に上っていく血流、心臓の音が自分でもちよつと心配にな

るくらい凄いことになっていく。

……いや、いや、姉の胸に触った程度で自分は何をこんなに狼狽えているのか。自分たちは同性、そこまで動揺することでもない。冷静になるためにそんなことを考えながら意識をなんとか引き戻そうとするものの、ノルアがむしろ揉ませる様に上から手を動かせば、冷静さなんて嵐を前にした紙キレのように容易く吹き飛んでしまう。

「ふふ、顔真つ赤ですね。アミッド」

「だ、だだだ、だって……」

「別に遠慮なんかせず、好きに触ってもいいんですよ？ どうせ他の誰にも触れさせるつもりのない物なんですから」

「~~~~!!」

「あ、んっ……そ、それは流石に、強い……です」

「ぐ、ぐぐぐ、ぐめんなさいっ!!」

暗に全部アミッドの物と言われた気がして、同時にこの身体に他の誰かが触れてしまう可能性を考えてしまっただけ、色々と冷静さを失い思わず強く彼女のそれを揉んでしまった。

慌てて手を離すものの、その感触だけはしっかりと掌に残っていて、無意識に何度も掌を握ったり開いたりしてしまおう。

「……アミッドのえっち」

「え、ええ、えっち!」

「そんなに私の胸の感触は良かったんですか？」

「そ、そそ、そんなつもりでは!!」

「別にアミッドの物ですから好きにして貰っても構いませんけど……」

「いや貴方の物ですからね!」

「急にまともなこと言われるとビックリしてしまいますね」

「私はずつとまともでした!!」

それはまあ確かに色々と思いが吹き飛びそうにもなったというか、今も自分の手で彼女が喘ぐ姿が頭の中に残って離れたかったりもしているけども。自分の手で彼女を好き勝手に出来るという想像に妙な背徳感が上って来て一瞬思考が真っ白になってしまったりもした

けれど。けれども。

「……さて、私は先に上がりますね」

「えっ!? あ、それなら……」

「アミッドはもう少し入っていて下さい」

「え……あの、その……すみません……」

「ふふ、別に怒ってないですよ。ただ今いつしよに出ると、なんだか少し気不味いでしょう?」

「そ、それは……」

お前のせいだろうが!

と言いたくなつたけれど、実際自分と同じ様に顔を赤らめている彼女を見ると、そんな反論も出来なくて。

「……後で出ます」

「ええ、ちゃんと部屋に来て下さいね? 約束ですよ」

「い、行きますよ。……行かないと、明日から顔が見れなくなってしまいそうですし」

「ふふ、そうですね」

その後、アミッドも5分ほど湯船の中で頭の熱を冷ましながら、部屋に戻った時にいつも通りの顔で合わせられる様に努力した。まあ努力しただけでそれが実るとは限らないが、確かに一緒に出る時よりマシだと思って立ち上がる。どうせ部屋に戻ったらノルアはいつも通りで、いつも通りに少し弄られながら床を共にすることになるのだ。見せられない様な顔になったのなら、さっさと布団に入ってしまった方がいい。

……そう考えながら湯船から上がり、寝巻きを着終わった時に。

彼女は現れた。

「あれ? アミッドさんじゃないですか」

「っ、貴女……」

以前にノルアのことと色々と言葉を交わした、新人の女性団員。彼女はニコニコと笑いながらこの小浴場に入ってきて来る。どうやら連れ

もおらず1人のようだ。

「いやあ、この小浴場前から気になってたんですよ。なんだか雰囲気良さそうなところなのに、誰も入ってるところ見たことなかったの。団長専用なんですかね〜」

「……いえ、そういう訳では。夜はノルアが入っているので、誰も入って来ないというだけです」

「ああ、副団長専用ってことですかあ。……ってことはもしかして、今副団長と一緒に風呂入ってたんですか〜?」

「っ、それが何か問題でも?」

「毎日?」

「ま、毎日ではありません!今日が久しぶりの……というか、貴女には関係のないことでしょう」

「あ、もしかして乳繰り合っていました?」

「あつてません!!」

あれ以来、彼女と離すのは少し苦手になっていた。というか彼女は未だにノルアと会ったことがないのか、ノルアに対して好意的……というか、拒否感を持っていない。自分とノルアの間をこうして弄ってくる。アミッドとしてはその度にノルアのことを意識させられてしまうので、困ったものだった。

「わ、私はもう行きますから……!この浴場は好きにお使いください
い」

「アミッドさん」

「な、なんですか」

「明日の遠征、参加しないんですか?」

「え?」

振り向けば、真面目な顔をしてこっちを見ている彼女。そういえば、彼女の名前はなんと言ったか。でも今はそれよりも……

「それは、どういう……」

「いえ、割と危機感ないんですね」

「……ノルアのことを言っているんですか?」

「59階層に行くそうですよ、さつき噂で聞きました」

「59階層……」

「分かってます？副団長はこれから、世界で一番危険な場所に、周囲の誰も信用出来ない状態で行くんですよ？」

「っ」

「……まあ、アミッドさんがそれで良いなら良いんでしょうけど。私が口を挟むようなことでもありませんし」

言いたいことだけ言って、彼女は衣服を脱いで浴場に入っていた。

アミッドはそれに対して、立ち尽くす。

立ち尽くすだけ。

明日の仕事を考えて。

自分の役割を考えて。

治療しなければならぬ患者達の顔を思い浮かべて。

結局そのまま動くことが出来ないのが、彼女の常なのだ。アミッドはそう、危機が目に見える所まで来なければ動くことが出来ない。それは彼女のこれまでの求められた立ち位置とノルアという存在が作ってしまった性分。ノルアとアミッドの治療師としての明確な違いが、そこにあった。